
二人静 - ふたりしずか

かなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人静 - ふたりしずか

【Nコード】

N9328W

【作者名】

かなこ

【あらすじ】

大奥にやってきた美女・静山^{しずやま}。若き年寄り職にあつた月島は、静山の後見人を命じられる。謎の多い静山は一体何者なのか？
いっぽうの静山は圧倒的な性格の月島に、強く惹かれていく。互いの想いが交錯するなか、やがて幕府終末に向かう時代の渦がふたりを巻き込んでいく。

「ツイン・ソウル」「不安的な時代の変わり目にどう生きるか」をテーマにしております。ツインソウルは何も異性であるとは限らな

い。彼女がいるから自分が輝ける、お互いに照らしあいたい。舞台は幕末よりちょっと前。生き方を大きく変換させなければならぬ時代の人間たちを、現代の不安定時代とリンクさせて書いてみたいと思います。

お中臈（前書き）

第一章

お中臈

今朝はどうも騒がしい。

原因は 新しく入った 静山しずやまという中臈ちゅうらうのようである。

中臈は大奥で將軍の世話係。

身分も高くお手つきになりやすい立場である。

「越後黒川藩の家老の娘、ということですが……」

月島つきしまは、少し思いやられるような声で 上臈年寄じやうねんよりの万里小路まんのこうじにたずねた。

大奥年寄として実権を掌握している月島はまだ三十二を越えたばかりであった。

美しい顔と若々しい風貌から、実際の年よりはずいぶんと若く見えた。

「黒川藩は財政が厳しい。

家老の娘といえど安穩あんのんにはしておられんそつや。

あちらとしては婚礼にお金をかけて無駄にどこぞに嫁がせるより、大奥にいれて出世をしてもらうか、側室にでもなってもらう可能性があるがあるほうがよい、ということらしい」

公家出身の万里小路は京都口調でやんわりと話した。

「しかし、旗本の娘と違って藩家老の娘……大奥でつとまりましようか？」

「頭は悪くなさそうやが……問題は、もっと別にある」

万里小路は口をつぐんだ。

ただならぬ雰囲気を感じて 月島も黙った。

御年寄り

月の高い晩だった。

庭には そろそろ大輪の菊が咲きはじめ その香がほんの少し所々に落ちていた。

「顔をあげなされ」

万里小路に言われて 見上げた顔に皆は息を飲んだ。

妖気の漂う目許。

人形のような綺麗なアーモンド型の目の中に、どこを見ているか分からない泥眼が、輝いていた。

泥眼は、能の面で高貴な美女の眼の中を金泥で塗りつぶした状態のものである。

きちんと眼球があるのに、泥眼に見える妖気が女にはあった。

高い位置の眉は、そのままでスツと可愛らしく弧をえがき、薄い唇と細い首が人形のように、ますます人離れしてみえた。

「静山と申します。右も左も分からぬふつつか者でございます。どうぞよろしく願います」

「ほ……これは」

顔に似合わぬ 低く強い声に 年寄四人は我に返った。
なかなかと根性のある娘のようである。

ここ大奥では 御年寄おとしよりというのは、役職であり 筆頭御年寄を頂点に、上臈年寄じやうなんぎ、御年寄、中年寄……となっている。

名前は老人風であるが、比較的若い人もなることが多かった。
しかし、大奥御年寄は 表向きの老中にも匹敵する権力をもっていたのである。

「ま、万里小路さま、静山は月島さまの下ともう決まっちゃったのですか」
月島以外の年寄たちは万里小路に詰め寄った。

名実とも大奥筆頭年寄である万里小路。
年は四十歳を少し過ぎた頃か。

上臈年寄の万里小路は、京都から御台所みだいどころつまり將軍の正室に付き従ってきた公家の娘である。その御台所は数年前に他界していた。

「わたくしの所はこの間、中臈じゆうなんが病いで宿下しゆくかがりましたゆえ、是非、わたくしのもとへ静山をお入れ願います」

しかし万里小路はきっぱりと言った。

「月島さんトコと もう決まってます。表にも部屋づきの報告はもうしました」

女たちは露骨にがっかりした。

將軍の目に止まる可能性が高い靜山を自分の部屋に入れたい思いは大きかった。

誰にでも將軍のお世継ぎの生母になれる可能性がまだ残っていたからだ。

正室は既に他界し、十数人の側室がいたが いずれも子供は早死にしまっていた。

唯一の男子・家倅いえさちは十七歳であったが、知的に障害があり、父親の家賢いえよし自身も次期後継者としての決定を決めかねていた。

「ああ、万里小路さまと月島さまにやられた」

靜山が月島に連れられて出ていくと、村岡が声をあげた。

「月島さまは、そんなことやる性格ではないと思いますが」
おっとり系の美津波瀬みつはせが、苦笑いをした。

「分かりませぬぞ。第一 見ましたか？ あ的美貌」

「ええ。あれは尋常ではござりませぬ？ 一体 誰の……」

さしがねなのか、と言葉を飲み込んだのは、三人目の年寄・夏川。

「いずれにしても、何か起こりそうな予感がいたします」

「気を引き締めていかねば」

その後で、美津波瀬がくくつと笑った。

「しかし、一見の価値はありましたわね」
「え？」

「月島さまと 静山の連れ姿。まさ牡丹と芍薬のようで。悔しいですが、お似合いでしたわ」

「確かに」

村岡と夏川は 二人の姿を反芻はんすうした。

月島はかつて「大奥随一の華」と呼ばれていたのである。

なのに、將軍・家賢いえよしの寵愛をさほど受けることが無かったのは？
変人？ だったからと もっぱらの噂であった。

随一の美貌とは裏腹に、月島は女として磨きをかけるより 何か妖しげな書物を読んだり、仏閣に日参したりと、おかしなモノに執着を持っていた。

華美な衣装や道具をしつらえる決まりを守らず（一応將軍のお手つきだったので皆もキツく言えず）、
出入りの業者と懇意になることもなく（けど趣味にはうるさい）、
噂や権力にも興味を示さなかった。

それでも、ずば抜けた知性は大奥では貴重がられキャリアを重ねていったのである。

「我々三人としては、月島さまお預かりということでは 今回は痛みわけ、ということでございますな」

美津波瀬は、静かに笑った

菊会

静山は落ち着かなかった。

月島という人物に戸惑っていたからだ。

人なつこさを感じさせる雰囲気の中に、藍色の澄んだ眼差しは、秘め事さえも すっかり見通してしまうような力を持っていた。

『今まで出会ったどんな人物とも違う』

けれど、そう

バレルわけにはいかない……

細い首を、ぐっと枕に押し付け、泥眼を閉じた。

「今年の菊はどうじゃ？」

月島は、部屋子筆頭の墨越すみこしに尋ねた。

御年寄りともなると、自分の部屋と部屋子を持つことが許されていた。

「はい、今年は尾張さまの厚走あつぱしりが大変に見事で、黒川藩の広物ひろものもなかなかでございます」

「そうか。静山はどう思った？」

「はい。尾張さま、黒川藩の菊も素晴らしいものでございましたが

…

管物の紀州さま、熊本藩の肥後菊もなかなかのもの、とお見受けいたしました」

「なるほどの。では後で見にまいろう」

九月の行事、観菊は月島が主催することになっていた。

観菊は将軍が配する大奥の庭に、菊の花壇をつくり、その後ろに諸家からの献上盆栽を飾るのだ。

「あ、いらした！」

「どれどれ？」

「月島さまのすぐ後ろ」

「え、月島さまもいらつしやるの？」

「あーん、よく見えない」

花壇の掃除をする 御末おすえの少女たちは色めきたっていた。

今話題の静山を見られると聞き、御末のほか、用事もない御小姓の娘たちまでが十人近くいたのである。

「なるほど……」

庭を眺めていた月島は、嬉しそうにつぶやいた。

「そなた、小菊が好きか」

静山にたずねた。

少し笑みを浮かべた静山は

「……いいえ」

と答えた。

「肥後菊がなかなか、だと申したではないか」

「はい。もちろん肥後菊は素晴らしいのですが……それはあの位置より、もう少し手前、そう、あの辺りに置いたら、もっと可憐で好ましゅうございます」

その言葉を聞いて 月島は静山の目をじっと見つめた。

月島は愛らしくニツコリと笑うと、

「およう、その鉢をその辺りに置いてくれぬか」

「はい！」

およう、と呼ばれた、色の黒い頑丈そうな娘は 嬉々として月島の下へと飛んでいった。

「よかったですね。月島さまに気に入られたようですよ」

墨越は控え部屋で、菓子を口に入れながら笑った。

「そうでしょうか」

その言葉に、静山の涼やかにみえた美貌も、少しほころんだ。

「月島さまは、とても頭のよい方なのですが……ひねり好きとか」

まじめそうな墨越は、ちょっと悲しそうな顔をした。

「まともに小菊の鉢をもつと前にしたほうがいいですよ、なんて言うより、今日の静山さまのように言うほうが嬉しいがられます。……わたくしには、それが出来ないのです」

墨越は下をむいた。

新入りの静山は、何かを言う立場ではなかったので、黙って聞くしかなかった。

「わたくし出すぎましたでしょうか」

「いいえ」

墨越はきっぱりと声をあげた。

「静山さまは、聡明なお方。そして、その美貌。きっと、上様のお声がかかるのも時間の問題でしょう。いずれはお方さま、と呼ぶことにもなりましょう。それより何より……」

墨越は小さく息を吐いた。

「あなたさまは違うのです」

静山を見る墨越の目は遠くを見ているようだった。

「あなたさまや月島さまは……何か違うのです」

藍瞳

墨越は立ち上がると、棚にあった時絵ときえで飾られた文箱ふみばこを二つ取り、静山の前に置いた。

「これは？」

「ご覧になれば分かります。どうぞ」

差し出すと墨越は部屋を出ていってしまった。

文箱の中。

ひとつの箱には大奥の女性たちからの、月島の対する恋文とおぼしき書が何部も入っていた。

そしてもうひとつの箱には、將軍・家賢いえよしから月島への恋文。

三十路を二年も過ぎた月島は、もう將軍の相手をするには出来ない。
い。

それでも、想いを押さえることは出来なかったのだろう。

『変人だから、ご寵愛ちゆうあいが無くなったなど、全くの嘘ではないか』

家賢いえよしの文を読んでいると、体は手にはいつでも心が近づけない辛さはない、そして、今やその体さえも遠くから見ればかり、と言ったことが書きつらねてあった。

將軍といえど、大奥の女であつてさえ手に入らないとは…

「そうしておるとまさに天女のようにやな」

月島の声に、文を読んでいた靜山はぎよつとして飛び上がった。

足音さえ気づかなかつた。

「つ、月島さま！」

「……天女も驚くのか」

月島は目を丸くさせた。

「も、申し訳ござりませぬ。お許くださいませ、これは、その
「ああ」

文箱の文を一瞥した月島は、何でもないかのように口をとがらせた。

「墨越に捨てておくように言い渡しておるのに……あの者は取つて
おくのだ」

「し、しかし、これは上様からの」

「……………」

慌てふためく靜山を、月島はまじまじと見つめた。

その瞬間、靜山は、

深い藍色の瞳に、吸い込まれそうになり
息をするのを忘れた。

急に胸が苦しくなった。

何か泣きたいような、甘酸っぱいような、そんな感覚が走った。

しばらく二人は見つめあっていたが、そのままでは何かおかしくなりそうだった。

強い意志を取り戻したのは月島だった。

くるりと背をむけた。

「そこを片付けておきやれ」

「はい……」

文が散らばったままの部屋で、胸に手をあてたまま静山はひとりた
たずむのだった。

大奥には年寄としよりというキャリア組とは別に、お方様かたさまと呼ばれる寵妃ちようき
組もある。

つまり、將軍の子どもを産んだ女たちだ。

將軍の男子を産むと「お部屋さま」、女子を産むと「お腹さま」と呼ばれ、生んだ男子が次期將軍ともなれば、おふくろさま・生母さま、とも呼ばれ絶大な権力を持つことができた。

が、

通常のお手つきくらいでは、大したことなく部屋ももらえない。子供を産んで初めて部屋をもらえるのである。

ここに、お初^{はつ}の方という女人^{にょにん}がいた。

お初の方は、家賢^{いえよし}の母方の娘で、寵愛を受けたのだが、生んだ子供はすぐに死んでしまい、そんなうちにお褥辞退^{しつじたい}となった。つまり、三十路をすぎたので伽^{とぎ}は引退。

そんなお初の方は、強引で激しい性格をもてあましていた。

前々から 同世代の月島にライバル心を持っていたのだが、いつの頃からかなぜか、よからぬ情欲を抱くようになった。

しかし何度 文^{ふみ}を送っても、無しのつぶての日々にギリギリとしていた。

「どうにかして月島をこちらへ来させられないだろうか」

昼間から酒を飲み続ける主人に、手を焼く部屋子・長柄ながえは、ややうんざりしながらテキトウに答えた。

「何かあちらの手落ちでも見つけて、それを盾に、こちらの言う事をきかせるというのはどうでしょうか」

「月島に限って手落ちなどありません……いや、しかし失敗するようにしむける、というのはどうじゃ？」

急に目が輝きだした主人を見て、長柄は『しまった』と感じた。
お初の方がこういった悪い顔をしだすと、ろくなことを言い出しかねないのを知っていたからだ。

「し、しかし、お方さま。月島さまが失敗されたのが、万一露見して大奥をお下がりにもなったら……」

「それもそうじゃ。では、大奥を下がるほどの失敗でない失敗を考えるのじゃ」

「……………」

不可能な注文である。

「お方さまのご意向に沿うか分かりませぬが……今度大奥に上がりました月島さま付きの静山をまず呼び寄せてはいかがでしょうか？あちらは中臈でござりますし、お方さまに挨拶に来ることに、何の違和感もございません」

「おおお、噂の静山か。美貌の天人にいちど会いたいと思っておつ

たのじゃ
」

「お方さま、静山はいずれ上様のお手つきとなられる身かと」

「分かっておる。わたくしの目的はあくまで月島。鯛を釣るには何
とやら、じゃ。」

早速、静山を呼び出すのじゃ
」

將軍をおとせ

徳川 家賢いえよしをむかえての観菊の日になった。

靜山は、おかしな気持ちだった。

雲の上の存在であった將軍が目の前におり自分をじっと見つめている。

『一見したところ凡庸そうなの男が、公方さま？』

確かに品はよさそうで横柄なところはないが…將軍とはこんなものだろうか？

四十五歳で新將軍となった家賢は、父である家成いえなりが長い間、大御所しよとして君臨しており、政務を手放さずにいたためずいぶん和我慢を強いられてきた。

就任二年後に家成が他界して、ようやく人心地ついたが、家成時代から続く老中や幕閣たちの政権争いは、依然悩みの種であった。

「靜山は黒川藩・横井 定利さだとしの娘か」

初めて見る顔の娘に家賢は声をかけた。

「はい」

家賢の視線には靜山に対する興味の色が、明らかに認められた。

『そうではなくてはならぬ。そのために私はここへ来たのだから』

「深窓の娘に大奥は辛かろう…」

「いえ。大奥務めは徳川臣下の誉れでありますゆえ」

家賢はそこで不思議そうな顔をした。

「天女とおぼしき女人が、普通にしゃべっておるのを見ると……何かおかしい感じがする」

その言葉に月島は深く納得した。

「上様がそう思われるのも無理はございません。

わたくしどもも、未だに靜山が天に帰ってしまうのではないかと心配しておりますゆえ」

「月島、そなたが言うのは変だぞ」

家賢は笑った。

「そうです。月島と靜山。どちらも、この大奥に咲いた大輪の花。

この世のものとは思えぬ美しさだと、みな口々に言っておりますよ」

口を開いたのは、家賢の隣にいたお美津の方。

唯一のあととり家倅いえさちの生母は、ふたりをぼおつと見比べながら言った。

「月島が昼なら、靜山は夜。月島が蘭ならば、靜山は睡蓮ではないか？」

「上様は、なんと上手く例えられるのでしょうか」

「愛でてこその花じゃ……」

家賢は少し寂しげに、つぶやいた。

靜山は恋文にかかれてあつた家賢の悲しい気持ちを思い出していた。

秋の日は暮れるのが早い。

日も落ちてほどなくした頃、靜山は万里小路の部屋に呼び出された。

「首尾はなかなかのようやな」

万里小路は満足そうに、靜山を見下ろした。

「上さんがエライ喜んでたて、聞きましたで。このぶんならお褥しとねのお声もすぐに」

「そうでしょうか」

靜山が不意に口を挟んだ。

「どういう事や。菊見の席に、あんたほどの美人がいて男が喜ばへん訳ないやろ。何か失敗でもしたんか」

「いえ。ただ、わたくしは……」

家賢は喜んでいたというより、なにか哀しんでいたように見えた。

「何や？」

「上様は、月島さまがお好きなんだと感じました」

「はあ？」

その言葉に、万里小路は顔色を変えた。

「……まだ、あきらめたらへんの？ ……あんたでもあかんのか？」
「……………」

「何のためにあんたを呼んだと思うの？ 何のためにあんたを月島の部屋に入れた思とんの？ ……あんたと並べたら、年かさのいった月島のほうが容色が劣るの、上さんに分からせるためやる？」

その作戦はあきらかに失敗だった。

静山と並ぶと同質エネルギーの交流によってか、月島の容貌はさらに輝いていたからだ。

「と、とにかく、なんでもええ。上さんの寵愛をもらうんや。月島への渴望が強いぶん、あんたへの欲望に火がつく可能性かてあるしな。こんなトコでぐずぐずする訳にはいかんのえ」

静山を下がらせてから、万里小路は大きなため息をついた。

『なんで、あれほどの美貌を持ってしてだめなんや。女の私がみてもクラクラする程の妖気やのに。美しすぎるんか？ もっと別のおなごのほうかええんか？』

いや、あかん。今のままでは……

上さんの、月島への情念が更に増してしまった今、平凡なおなごで立ちうちはできん。どうやったら、計画が進められるんか』

万里小路は 右手をぐっと握りしめた。

鎌かけ

「お初の方が？」

月島は怪訝な顔した。

「はい。静山さまに一度顔を出せと」

墨越は困った顔で、文箱から伽羅きやうらの香りのする文を取り出した。

“静山様へ”と宛名にある。

「月島さまに文を出しても無視されるからって、こちらの部屋の静山さまに文を送りつけるなんて」

「そういう静山への文を、そなたは盗み読んでいるのであろう？」

「ぬ、盗み、など……わたくしは局つぼねの責任者として吟味しているの
でございます。

これは月島さまに対するイヤガラセです。……ああでも、断るわけ
にもいかないし」

文を読んでいる月島に向かって、墨越は早口でしゃべり続けた。

「ふうん。一度くらいお会いしてもよいのではないか？」

「はあ？」

「お初の方に どうこうされる静山ではあるまい」

「し、しかし……色好みのお初の方の元に行くのは危険ではありませんか
せぬか」

「まあ、……危険であろうな」

「月島さま！」

焦る墨越に対し、不遜な顔して月島は笑った。

「ふふふ、安心せよ墨越。上様のご寵愛を受けようかという靜山に、まさかお初の方とて、無体しようとは思うまい」

「ほつ、そうでございますね」

「だから、これはわたくしへの挑戦のつもりなのだ。靜山は頭がよい。大丈夫じゃ。それに……」

月島の眼は、何かを企んでいるようだった。

「それに？」

「あの者のことが、少しは分かるやもしれぬ」

「それは、靜山さま、の事でございますか」

墨越の問いに、月島は答えなかった。

そう。

確かに、何を考えているのか分からない。

黒川藩が送りこんできた美しい刺客。

藩として単に大奥の実権に絡みたいだけなのか？

後見となっている万里小路は、すでに大奥の実権を握っている。

自分の推す娘を寵妃に加え、地位を磐石にしたいだけなのだろうか？

それでは、公家出身の万里小路と越後の小藩・黒川藩とは、何のつながりがあるのか？

万里小路に金をつんで大奥入りを狙う連中が山ほどいる中、財政のひっ迫している黒川藩が大金を出せないのは分かりきったこと。

解せぬことが多かった。

「さすがじゃ」

お初の方はうっとり声をあげた。

「お方さまには、ほんのお耳汚しで」

静山は琴爪をかくしながら頭を下げた。

「何を言う。天女が爪弾いているようで、この世のものとは思えなかったぞ」

お初に招かれた静山は、琴を披露してみせた。
墨越以下数人の部屋子を連れての訪問だった

「その赤みがかった琴……滅多に見るものではない。なんと、その紅葉の打ち着と合っておったことか」

楽器、小物、衣装、香などを トータルに演出できるほど、相手をむむっ、と言わせることが出来る。大奥の上流階級は才女でなければやっていけなかった。

「それは、“錦秋”^{きんしゅう}という灘からの新酒じゃ。静山といっしょに楽しみたいと思つての」
膳と一緒に運ばれてきた杯。

朱塗りの椀には、紅葉の葉が一枚。そのまま酒がつかれる。

「わたくしは江戸から出たことがない。大奥に上がってから、もつと世間は狭くなった。

そなた黒川藩の出身と聞いたが、ずっと藩元^{はんもと}にいやつたのか？」

「はい」

「その割には、江戸風が板についておるの」

「三年前に江戸に上がりましてございます」

澄まして静山は答えた。

「そうか。……黒川・越後はどんな所なのじゃ？」

「雪深い里^{くに}でございます。冬はいつ果てるともない雪がしんしんと降り、丘も田畑も完全に白の壁におおいつくされてしまいます。山は遠くにかすみ、吹雪はいつおさまるのか見当もつきません」

人間離れた静山の目に表情が表れた。

少し遠い目は、凍てつく雪国をみていたのだろうか。

「そんな所でそなたを見たら、雪女かと思まごいそうじゃ。越後は雪ばかりなのか」

「いえ、水がぬるめば苗は育ち、夏は美しい櫛形山^{くしかたやま}をのぞむことができます」

「なるほど。そうそう、うちにも、ひとり越後の者がおつての。これ、かよをこれへ」

お初の方が呼ぶと、お犬と呼ばれる下っ端らしい十、十一歳の少女が現れた。

墨越はお初の算段が少し読めた。

お初も静山の身元を疑っているのだ。

「かよ。おまえの藩は越後であつたな。どういう所じゃ？
冬は前が見えぬほど雪が積もるのか？夏は櫛形山の眺めは素晴らしいのか？」

「は、はい。確かに雪は深こうございます」

上役に囲まれる経験がない田舎娘は、顔を上げられぬままオドオドと答えた。

「櫛形山はくしかたやまどうじゃ？」

「櫛形山？」

かよは一瞬分からぬことを聞かれたため動揺した。

「夏になると見える山じゃ」

「おら、いえあたしたちには、ぼっこ山しか見えませんでした……」

「ぼっこ山のお」

お初はゆっくりと静山のほうを向いた。

『これは……』

不敵に微笑むお初の方が、急に歪む。

静山は、酒に何かを盛られたことに気づいた。

「あの」

墨越が取り繕おうと口を開きかけたとき、

「これは、したり！そうでした」

につこりと笑う静山があつた。

「農民たちは櫛形山が低く、棒状であつたのをみて、ぼっこ山と呼んでおりました」

「ほお。なんと、そうであつたか。正式な名前を教えてくださいとは、さすが静山どのじゃ。のう、ほほほ」

うまく誤魔化したのか、どうか真実は分からないが……

笑いながら、どうして眠り薬が効かないのだろう、とお初の方は、いぶかしんでいた。

しかし、その瞬間。

静山はドサリツと崩れ落ちた。

「静山どの！」

「静山さま！」

方々の声と手が、静山を取り囲んだ。

要注意人物

「で、わたくしに静山を引き取りに来い、と」

一連の出来事を墨越から聞いた月島は、別に何かを考えているようだった。

「はい」

墨越は青い顔をしてうなずいた。

「詰めが甘いな。お初の方は」

「はあ？」

頬について少しなじるような口調の月島。

墨越には、なんとも幼く見えた。

「わたくしなら、もうちょっとマシなやり方を考える」

「マシとは、どういった？」

「色じかけとか……」

「……月島さま御自身で？可能だとは思いますが」

「冗談だ」

墨越に一本とられたようで、少し悔しかった。

そのまま奥の部屋に帰っていく月島を、あわてて墨越は追いかけた。

「あの、引き取りにいかなくていいのですか？」

「よい」

「え、ですが……あのっ」

「静山は自分で何とかするであろう」

奥に行ってしまった距離からの声は少し遠かった。

「何とかって……」

墨越は眉をよせた。

「失神してるのに？」

口をとんがらせてつぶやいた。

まだ少しぼおっとする頭を振って、静山は御殿向きの暗い廊下を歩いていた。

墨越たちが部屋に帰されてから半刻^{はんとき}ほど。

静山は倒れたふりをして、部屋の様子を伺っていた。

お初の方が月島を呼びつけることしか頭がないのを確認して、こっそりと静山は部屋から退散した。

「あかりさま」

「山吹！」

下働きらしい大柄の少女が部屋の戸口から静山に近づいた。

「解毒剤は、効きませぬか」

「飲んでおらぬ。そんなに強い薬ではなかったし……わたしには効きはせぬ」

「で、ありましような。マンネンロウで、眠気は覚めますが……」
「よい。マンネンロウは覚醒しすぎるので嫌いなのだ」

その答えに共感した山吹は、静山の肩を遠慮がちに支えた。

「想定内のことだ。わたしが疑われるのは百も承知」
「はい」

「お初の方に他意はない……それより、他の年寄・側室たちのほうが、目を光らせておる」

「それは、月島さまも含めて……で、ございますね」

一瞬沈黙がおりた。

「そうだ」
「あの方が一番の要注意人物だ」

——なのに。どうしてこんなに心が乱れるのだろう——

「わたしはあのお方が一番こわい」
その言葉を耳にした山吹はぎょつとした。

「いけませぬ。親方を裏切つては」
「もちろん裏切りはせぬ」
「では、なぜそのような“怖い”などと……わたしたちが唯一恐れるのは、親方だけ。一族の掟だけです」

違ふのだ。

一族が結束するチカラとはまた違った力で、月島は、静山を惹きつ

けるのだ。

「誰か来る！そなた、もう行け」
山吹は闇に同化した。

「お婆の易、当ってたでしょ？」
「あの気味悪い風体さえなきやね」

仲居か、お末の娘たちが、出てきたのは書庫からであった。

夜もふけ、亥の刻（午後十時頃）。
御火番が、回りだす頃であった。

一段低まった板の間に、番台があり、その奥には背丈ほどもある書棚が、何十と並んでいた。
灯りは、その番台から洩れているらしい。

「そなた、新入りじゃな」

見えぬ存在に、静山は声をかけられた。
書庫の影になっている白い頭にすぐに視線をうつした。

「ほほう、よう見つけた」

ボサボサに伸びた白髪頭に、すりきれた間着^{あいぎ}、つまり打ち掛けを着ないままの小袖、背は非常に小さく、静山の胸くらいしかなかった。

「二つの星が見える。禍々（まがまが）しい赤い星……そして、神

々しい白い星じゃ。

恐ろしく大きな力を持つておる… その二つの星どちらが本物なのか」

目はぎらぎらと輝き、黄色い歯をむいて近づいてくる老婆の表情におののいて静山は後ずさった。

「そなた、何を考えておる」

「わ、わたくしは……」

ぐつと息を飲み込んだ。

「月島さま部屋、中臈・静山です。あ、あなたこそここで何を」
「なに、月島の？」

質問には答えず、老婆は下からなめ回すように視線を浴びせた。

「ふん。あの者の周りはおかしなヤツばかりじゃ……さて、今夜あたり来そうじゃの」

「つ、月島さまが?!」

静山はあわてた。

何やら足音も聞こえてきた気がする。

急に胸がドキドキとした。

「会つとマズいのか？」

静山はぶんぶんと首を縦に振った。

「では、その奥の部屋に隠れておれ」

番台の奥に小さな戸口があつて、戸を開けると、老婆の寝所らしい小さな部屋があつた。

静山は急いで、奥に入った。

老婆は 燭台の上にはらばらと香を垂らした。

静山の香りを消すためである。

そのすぐ後

「おばば」

銀の鈴のような声が響いた。

月島の秘密

「おばば」

「なんじゃい」

「つれないのお…今夜は柿羊羹かきようかんを持ってきたのだぞ」
その涼やかな声の主は、まさしく月島だった。

静山は息を潜めた。

「なに！？ 柿羊羹じゃと」

老婆は嬉々とした声をあげた。

戸口を薄くあけ静山は、こっそりと覗き見た。
包みをのぞいて二人は、笑いあっている。

「仕方ないのお。柿羊羹を出されては」

老婆は番台の下から、青い分厚い本を三冊取り出した。

それは洋書であった。

「ほうぼう手をつくして、やっと出島の知り合いから送ってもらったんじゃ。」

南蛮の……ふい、ふいそろひーとかいう本じゃったな」

「そうそう。そうじゃ！フィソロフィー！おお、アルケミーもある！すごいではないか、おばば。でかしたぞ」

月島は老婆に抱きつかんばかりの勢いだった。

想像も出来なかった月島の嬌声に、靜山は更に身を乗り出してのぞき見た。

「そなたは無理ばかり言う。そんな南蛮書ばかり読んでいったい何をするのか……金も法外にかかることじゃ」

目を輝かせてページを繰る月島は、老婆の言葉などもう耳に入っていなかった。

何か、タガがはずれたようだった。

「これは、やはりエゲレス語」

ぶつぶつとしゃべり続けると、持ってきた風呂敷包みから、分厚い赤い本を取り出した。

青い本を読んで、またしばらくすると今度は赤い本を開く。そして、何かを書く。

辞書を引きながら読み、翻訳していることが分らない靜山には、月山の行動が不可解であった。

「始まったか」

老婆は慣れたように、行灯あんどんと火鉢に火を入れると、そっと書庫から出た。

「あれはな、書に没頭しておるのよ」

靜山のいる部屋に入ってきた老婆は説明した。

「書を？お読みになつていいるのですよね？」

「それも南蛮の書じゃ。以前は論語やら、般若経やらに凝つておつた」

老婆はあきれたように首をふった。

「あきれたやつじゃ。知識欲もあそこまでいけば魔物じゃ。女の身で、この大奥で……勉強をおさめて何とする」

「それで、月島さまは何とおおせに？」

「自分は、ただこの世のことが知りたいだけだ、勉強をおさめたい訳ではない、と言うのじゃ」

しゃべりながら老婆は布団を敷き、着替えをはじめた。

「この世のこと？が、書に書いてあるのですか？」

「さあての、わたしには分からぬ。多少の易^{えき}なら出来るがの。

だが、月島は書には色んな世界が存在する、と面白がっておるのだ」

「いろんな世界……でございますか？」

「だ、そうだ」

よっこいしょ、と老婆は布団にもぐりこんだ。

「わしはもう寝る。そなた、帰りたければ帰るがよい。

どうせ、月島は気づかぬ」

やさしくゆすられて静山は目を覚ました。

「静山」

眩しい光の中には、寝ぼけた子供のような顔をした月島が立っていた。

化粧もせず、崩れやすい片はずしの髪が、ほとんどほどけていた為、本来のあどけなさが更に際立ってみえた。

「そろそろ朝の勤めの時間じゃ。起きよ」

「つ、月島さま！」

驚いて立ちあがった拍子にドサリと肩から、打ち着が落ちた。いつの間にか眠ってしまった静山に、月島がかけてくれていたものらしい。

書に没頭する月島から目が離せなくなつて見入っているうちに眠ってしまったのだ。

静山にとってこんな失態は、あるまじきことであつた。

「わたくしは非番なので、大きな仕事はないが。昨日の件もあつて、皆が心配しておるのでそなたは先に帰つたほうがよい」

「は、はいっ」

驚いたのと恥ずかしいのと気まずいのが、混ざりあつて静山は顔をあげられなかった。

逃げるように書庫を立ち去りかけた時、

「待ちやれ」

ふいに手をつかまれた。

月山はそのまま静山の頬から髪に、ふわりと手を触れた。

「髪が乱れておるではないか。せつかくの美貌が台無しじゃ。そなたは もうじき上様のお声がかかる身なのじゃぞ。誰かに見られて

もしては大変じゃ」

間近で見る口元に微笑をたたえた月島の素顔。眩しくて胸が高鳴り、静山は息ができなかった。

頬から髪をなであげる指は柔らかくて、優しくて。

自分はいちやうくちゃんとした姿をしているクセに。それが恐ろしいくらい艶やかなのに。

声がかかり候補の静山に気をつかうのは、大奥御年寄の意識からだけだろうか。

それを思うと胸がちりりと痛んだ。

「月島さまは、どんな世界にお住みになっているのでしょうか」
「ん？」

「書で色んな世界にいける、と書庫番の老婆が申しました」
「ああ」

月島はニヤリと笑った。

「いけるぞよ。天竺でも唐でもオランダでもエゲレスでも、あの世にも」

「あの世にも?!」

「……なあ、静山、そなたこの世は確かなものと思うか？」
そう聞かれると、急に足元がややふやになった。

般若心経では、この世は“空”^{くう}と説かれているし、昔からこの世は“夢のまた夢”“無常”と言われてきたからである。

「そうじゃ、いい加減なものじゃ。だがな、この世でわたくしたちは色んな苦しみにあう。ほんに辛いこと、耐え切れぬことばかりじゃ。こんなに辛いのに、それを“空”でした、と言われてもな……」

自嘲気味に月島は笑った。

「だからわたくしは自分が納得できるまで、書を漁っておるのじゃ。誰か教えてたもれ、助けてたもれ、と悪あがきをしているのじゃ」

大奥のトップに位置するこの女性に、そんなに苦しむ何があるのだろうか。

確かに月島は権力に執着が少なそうに見えたし、何か虚しく空ろな時があった。

「それで……お分かりになったのですか」

「分かつては遠のきじゃ……だが、自分自身であれ、ということ一文には衝撃をおぼえた」

「自分自身？」

「我々はいつも何かに惑わされておる。何かにならねば、何かをなさねば、と思わされておる。」

大奥の年寄、武家の娘、母親、女のつとめ。他にも他人と比較して、自分にはないものを数えて苦しんだり、嫉妬をしたり、はたまた出世や蓄財に励んだり。

……そんなこと本当は意味がないのだ。自分で作った、大きな山に苦勞して苦勞して登っているようなものなのだ。

『ああ、いい気持ちだ』と足を投げ出して、気持ちのよい草の上に寝ころんでみたところを想像してみよ」

足を投げ出す、など、娘としてあるまじき姿であったが、ずいぶんと幼い頃はそんな事をしていたような気もする。

静山は目を閉じて想像した。

春の草の香りを含んださわやかな風と、暖かな陽射しが、頬を撫で、どこからか小鳥のさえずりが聞こえてきた。

静山の表情に生氣が灯った。

月島はその美しさと清々しさを見て微笑んだ。

「その時の気持ちこそ、自分自身でいる状態なのだ」

「これが？」

「そうじゃ。その気持ちが本当の自分の姿なのだ。その姿でいることだけが大切だそうだ。

例え辛くともでも、病みやつれていようと、その気持ちでいられれば必ず状況はよくなる……」

「本当でしょうか」

「分からぬ……が、わたくしはちよつと自分で試してみた。少しは効果があつた気がする」

月島は笑った。

「どうしてでしょう？」

「一番自然な状態だからだそうだ。人間は無理をするとひずみが出る。ひずみはやがてどこかに溜まり、悪い状態につながる。

人間の知ることが出来る世界は、知れているそうじゃ。カエルは動いているものしか認識出来ないという。なら人間が見ている世界も、仏や神からみたら、まだまだ目隠しされている状態なのではないか？」

静山は驚きのあまり声が出なかった。

月島の話しは、あまりにも突拍子がなくて、それでいてもっともつと聞きたい魅力に溢れていた。

「ああ、いかん！ もう時間じゃ」

配膳係りたちの声が遠く近くで聞こえ出した。

「ああ、でも……」

名残惜しそうにぐずぐずする静山を、月島は書庫から押し出した。仕方なしに、早る胸を抑えて静山は廊下を歩くしかなかった。

執心の女

ここにひとりの男がいた。

水戸、筑波山つくばさんに集落をもつ、裳羽服津衆もはきづの親方・炎才えんさい。

陽に焼けたがつしりとした体格に、きりりとした目と太い肩。渋い表情から生まれた皺さえも年輪を感じさせる、なかなかの美丈夫である。

年の頃は五十代の半ばといったところか。その炎才、囲炉裏の前で腕を組んで、何か思案に暮れている様子であつた。

「親方、どうされた？」

息子の龍才りゅうさいが尋ねた。

父親に似た風貌を持っていたが、その中に理知的な雰囲気加わり、少し柔和されたものがあつた。二十代半ばのようである。

「……………」

炎才はしばらく無言で答えていたが、やがて口を開いた。

「今朝、お城より文が届いたのだが」

「はい」

「なかなか上様のお手がつかぬそうだ」

「まさか」

龍才は、信じられないといった顔をした。

「何か、あかりはしくじったのか？ それとも……素性がバレたとかっ？！」

「落ち着け。しくじったりしとらん」

「では、なぜ？！」

炎才は組んでいた手をほどいた。

「……わからん。ただ、万里小路さまの文には、上様には、他にご執心の女人がおつて、あかりに気が向きにくいのだろう、とあつたそうだ」

「ご執心の女？」

その内容さえも理解できぬ、といった顔で龍才はつぶやいた。

「わが妹に落とせぬ男がおるとは……信じられぬ。それとも大奥といたところは、あかり以上のおなごが、ごろごろいる、というのか？」

「何を言っておる。あかりの器量以上のおなごなど、そうおりはせん。多くのお殿さまに目どおりしていただいた折り紙付きなのだぞ。それだけでない。あいつには人を惹きつける？妖気？があるのだ」

「そう、そうだ」

龍才はうなずいた。

「とにかく、上様のご寵愛をいただくことには、話がはじまらん。次期將軍候補のご注進など、夢の夢。まあ、今のところ、そのご執心の女人は、すでに床さがり（と）をしておるらしいし、懷妊（くわいにん）しそうな特定の娘はそういない……我々にとって悪い状況ではない」

「はあ」

不承ながらも、そう答える。

「奥の状況は悪くはない。殿に言われた命令は、ほぼ守れておる。あかりにすぐお手がつかなかったのが計算外なだけだ。龍才、そろそろオマエの方の仕事にかかれ」

「はっ」

龍才は立ち上がって部屋を出ていった。

家賢^{いえよし}は数人の中臆、と、万里小路とで庭を散策していた。

「上様は、靜山にはご興味あらしやいませんか」
万里小路は、声ひそかに尋ねた。

「ん……」

家賢は少し微笑んだ後、しばらく間を置いた。

「余も迷うておるのよ。……靜山は何か、近寄りがたいのだ」
「それは美しすぎるからですか」

「もちろん、それもあるが」

歩を進め感慨深げな表情を浮かべた。

「何か……月島のことを思い出すゆえ」

それを聞いて万里小路は、やはり、とため息をついた。

「上様、靜山は月島と違います。大奥のしきたりもよお守ってます

し、職務も見事にこなし利発で歌舞音曲の才もなかなかのもんです」

「月島とて職務と歌舞の才は見事なものだ。だからこそ大年寄にまで抜擢されたのではないか」

「それは、そうでござりますが……若さが違います」

それを聞いて家賢はムツとした顔をした。

「もう、月島のことはあきらめてくださいませ。幕府の安泰のためにも、一刻も早よう若さんをもつけることを第一に」

「そんな事は、分かっておる」

そう言い捨てると、家賢は万里小路から去った。

家賢は悲しかった。

月島を愛した日々が思い出されて、胸が痛かった。

溢れる寵愛を与えたかったのに、それに答えて欲しかったのに。

懷妊できなかった遠慮と、政治的な重圧に耐えかねた月島は、家賢から遠ざかった。心が遠ざかったのだ。

『余は……そなたさえいてくれたらよかったのだ。懷妊などしなくても』

しかし、將軍には許されないことだった。

『世継ぎ、世継ぎ。そのせいで何人のおなごを抱かねばならんのか』

近頃では、好きな女というより懷妊しそうな娘や年寄が推す娘を、義務的に選んでいる自分がいた。

融合する粒子

月島は夢を見ていた。

赤い血が飛び散るのを。

真っ赤な血を浴びた狂気の形相の父の姿。

恐ろしくて、必死に声を上げ逃げようとし

「はっ！」

目が覚めた。

胸がまだときどきと鳴っていた。

「お氣がつかれましたか」

やさしい天女が微笑んでいた。 静山だった。

「わたくしは、どうした？」

「詰所でお倒れになったのです。覚えておいでですか？」

「……ああ」

そうだ老中の土井と水野の対立意見書。

大奥から上様にとりなして欲しいと来た使者が鉢合わせしてしまったのだ。

「あまりにも無礼です」

静山は思い出した怒りのため語気を荒げた。

使者は我が我がと月島に嘆願を迫り、その露骨な身勝手さに月島は使者が帰った後倒れてしまった。

「皆、保身のことしか考えぬのだ」

「ご心痛をお察し申し上げます」

「職務ゆえ仕方ない」

気づくと部屋はもう真っ暗で、夜半のようである。

「そなたが付いていてくれたのか？墨越はどうした？」

「墨越さまはお風邪気味でして。あの、墨越さまをお責めにならないでください。わたくしが無理を言っておそばに居させてもらったのです」

月島はわかった、といった顔をしてから、額にあててあった濡れてぬぐいを取り、身を起こした。静山は、少しほっとしたような顔で水を取りに行った。

大奥の医者の見立てはいい加減だったので、静山は自分で処方した心労を少なくする薬を、医者からの処方だと言って月島に飲ませた。

「うなされておいででしたが……」

薬を飲むと月島は少し落ち着いたようだった。

「悪い夢をみた」

月島は手で額をおさえた。

髪がはらはらと肩をすべりおりる。

「色々と思い出したのだ」

そのまま月島は沈黙をした。

「そなた……人を殺めた^{あや}ことがあるか？」

思いもかけない月島の言葉に、静山は息をのんだ。
「いや、そなたにそのようなことあるはずないの」
苦笑気味に笑った。

「月島さま」

「ここ大奥は、分からぬ理由でよく人が死ぬ」

下を向いたまま月島は何かを思い出しているようだった。

「その原因は色々だ。もともと体や心の弱かった者もいるし、心労が多く耐えられなかった者、妬みや呪いで死んだ者、色々とおる」

しばらく間があいた。

「もちろん実際に殺された者もいる。……わたくしが年寄になるまで色んなことがあった。事実わたしの手もきれいとは言わぬ。じゃが、少しでもそうだったことが無くなるように、どうしたらいいのかずっと考えておるのだが……未だにに分からぬ」

「そのためにあんなに勉強をされていたのですか」

「いいや。大奥だけをどうこうという話でなく、わたくし自身がどう生きていったらいいのか知れたかったからじゃ。人間は生きていくのに基盤が必要だと思わぬかえ？」

「基盤？信じる道ということでしょうか」

「そうじゃ。そなたは神や仏を信じておるのか？」

そう聞かれて静山は、答えられなかった。

育ってきたのは、修験道、山岳信仰が強い地域だった。

だが寺もあり、それぞれの行事に参加していた。

どちらの存在も敬い、加護を得んが為、熱心にお参りをする里だった。

「わたくしの地元では神も仏もそれぞれに敬う地域でありましたが……それが生きていく基盤になっているかどうかは不明です。

願を掛け、ご利益を得る方法は色々と確立されてきたかもしれませんが、どう生きていつていいのか、は分かりませぬ。分からないときは知恵者や和尚様にお聞きしておりました」

「そなた、その答えに納得できたのか」
少し非難めいた口調で月島は揶揄した。

「納得できたものも、納得出来なかったものもございます。納得出来ないのはわたくしが浅はかだから、と思っておりましたが」

そう言いつつ静山は、一方で答えを探してもいた。

「そなたが浅はかかどうかは問題ではない。その知恵者が、どこからその生きる方法を編み出したのかが問題なのじゃ。和尚なら、仏の道であろう。知恵者なら儒教や国学など学問からであろう。果たしてそれは正しいのか。

わたくしは疑り深い。だから自分で色々な道を勉強したが、実際のどれにもまだ使えぬのじゃ。わたくしが愚かであるからだろうか」

静山は息をのんだ。

月島の真剣なまなざしに青い光を見たからだ。

「わたくしよりずっと賢くいらっしゃる月島さまに何を言うことができません。……ですが、わたくしに二つだけ分かったことがございます」

斜め下から見上げた静山の目。

碧く濡れた瞳孔が光った。

「それは何じゃ？」

「月島さまは答えを見つけるのが、すでに道となっておられることです。愚かなのではなく、答えがあるかどうか分からないものを追求することは道のような気がいたします。」

そして、もうひとつは

頭で考えすぎだと思います」

月島はハトが豆鉄砲をくらったような顔をした。
思いもよらない答えであった。

「いえ、考えるのは道として当然でございます。ただ、心で感じることも必要なのではないでしょうか」

「……………」

「手を」

静山が両手を出して手の平を上に向けた。

「わたくしの手には月島さまの手をお載せください」

言われたままに従った。

そのままやわらかな手がふんわりと月島の手を握った。
暖かなものがなだれこんできて、どこまでが自分のものか分からない。
なる。

自分の細かな粒子と、相手の繊細な粒子が交じり合う感覚。
その粒子は月光のようなものであったろうか。

「何か感じませぬか」

「ふわ、と暖かいものを感じる」

「わたくしもです」

静山の心臓の音と同時に、月島の胸は弾み、二人で共鳴しているようだった。

それは今まで二人が生きてきて受けた傷だったのかもしれない。
嬉しさだったのかもしれない
圧倒的な誇らしさだったのかもしれない

誰にも理解されない孤独だったのかもしれない。
不思議な満足感がふたりを満たした。

「ずっとおそばにいたいです」

「……………」

月島は静山の手をぎゅっと握りしめた。

「そなたとは何かが似ている」

「……………恐らく」

月島は腕を伸ばすと静山と静かに抱き合った。

お声がかかり

「よかった…今朝は機嫌がよろしくて」「

風邪あけの墨越がホツとしたようにつぶやいた。
その言葉を靜山は聞き逃さなかった。

「今朝は、ということは、他の日はどうなのだ。
倒れるのが日常化しているのだろうか。」

食い下がる靜山に音をあげた墨越は、しぶしぶ口を開いた。

「月島さまは、職務の気遣いにご実家の気遣いが重なってお倒れになったのだと思いますが……ご実家も複雑なんです。昨日弟さまから文が届いてまして。きつとお金の無心です」

「ご実家って、確か御家人の？」

「はい。代々続く旧家です。が、あまり財状がよろしくないらしく、月島さまにベツタリ頼られているんです。なにしろ、大奥の御年寄には大きなお金が入る、と思いこんでおられますから。しかし大奥では、出て行くお金も半端ではないのです。」

亡くなられたお父上さまは放蕩家、後を継がれた弟さまはお金の勘定にうとい。ゆえに、いくどか騙されたりもしたらしいのです。

だもので、何か大きな相談があると月島さまにお伺いと、お金の無心の文がくるのです」

静山はうなずいた。

「月島さまは、未だに女の身でご実家のすべて背負われています。大奥で生き残るだけでも大変な重労働なのに、ご実家も負担をかけるのです」

墨越は、はああとため息をついた。

「冷静な月島さまも、ご実家には複雑な心情があるらしく、手紙が来ると決まって機嫌が悪くなります。よく体調も崩されます。……本当は、あの方そんなに強くないのです。皆には、それが分からないのです」

「ええ」

静山はあいまいにうなずいた。

精神も体も決して強くないのは分かっている。
あれだけ繊細なのだから。

でも、何かが違う。

そう。

その繊細な人間が、それほどの重圧に耐えている状況自体が異常な
のではないか。

強くあらねばならぬ、とは何ぞ？

手足が抜けるような重り、たとえば5000Kgの重りを持ち上げ
よ、という話と同じではないだろうか。そもそも不可能な事態。

それをやっている月島……

静山は強い不安にかられた。

大奥の警護を忍者がしていたのは、案外知られていない。

忍者たちは、今でいう総合警備会社のように大奥以外にも江戸城で、普通に要人のSPをしたり、出入りの業者をチェックしたりしていた。

もちろん諜報活動も行っていたが、それを使いこなせるのは、要人のうちでも少なかったものと思われる。

諜報活動をする部下を月島は持っていた。

が、忍者ではなかった。

それは大奥にいる自分の肝いりの数人の女性たちだった。

「静山さまに頻繁に来る文は黒川のご実家ふみからのものだけのようです」

静山の部屋方に任命した、おまつが伝える。

おまつは頭がきれ誠実な女である。

「どうにか中味を見ようと思ったのですが、すぐにお焼きになってしまふのです」

「ふうん」

怪しい行為だ。

『何かを企んでいるのは必至であるが、持ち物はすべて検閲を受け

ている。

他に道具を持ち込んでいるハズだ。それは身の回りのモノとして紛れているに違いない』

「静山が常に身につけている道具や、特に気に入ってそばから放さぬものはないか？」

「はあ」

おまつは記憶を辿っていく。

「分かりませぬ。こちらに來られてずっと身につけておられるものはないように思います。かんざしなどは……はっ」

「どうした？」

「そういえば、この間來た“つくば屋”は静山さま、ご指名でございました」

「“つくば屋”とは何ぞ」

「かんざしや小物、化粧品などを扱う、小間物屋でございます。月島さまのお部屋は“三条屋”御用達なので、おかしいな、とは思ったのですが、藩あがりの静山さまゆえ特別なご贖店があるのだ、とか申されて」

「万里小路さまが出入りを許可されたのか？」

おまつは、うなずいた。

「そうか。そこで静山は何を買ったのじゃ」

「確か……かんざしを二本、髪あぶら、おしろい、だったと思います」

「……おまつ、もし出来れば、静山が買った……おしろい、を盗っ

てまいね。紙に二つまみほどでよい。出来るか？」

「はい」

「くれぐれも無理をせぬようにな」

將軍が大奥に泊まるのは忌日以外の日で、月の半分くらいである。その中で、いかに將軍のおめがねに叶うか。

チャンスその一

権力のある御年寄のコネによって、將軍の身の回り係りに送り込んでもらう。御中臈である。

チャンスその二

朝の総触れ、つまり「お鈴廊下での謁見」時、声をかけてもらう。

チャンスその三

御庭御目見。しやうたいおめみえ旗本以上の娘が綺麗な着物を着て、庭を歩く。その中から気に入った女性を、將軍が選ぶ。

通常、將軍に直接目通りが叶うのは、身分が高い“お目見え以上”のクラスだけだったが、歌舞や楽器の得意な者は、お目見え以下であつても目に止まることがあつた。

という訳で、

ここしばらくは、何となく無難に女人を選んでいた家賢であつた。

そんな中

とうとう靜山の名が、朝の総触れで上がった。

「いったいどうなることかと思いましたで」

万里小路は肘掛に体をもたせかけながら、嬉しさと不安が入り混じったような声を出した。

そのまま前に控えるのは月島と靜山。

「月島さん、あんたきちんと面倒みたってや。分かってるやろうけど、粗相のないようにな」

「はっ」

月島は頭を垂れた。

万里小路が靜山の後見であるかぎり、万里小路に靜山の不審な行為を話したとて一笑に付されるだろう。あちら側の人間なのである。

靜山の意図が分かるまで、家賢との床入りは避けたかったのだが。

「最近はおさんも、お床入りした娘に手もつけんと休まれることが多々あつて……そろそろ、お年で役にたたんようになったんかと心配してますんや」

「お年による、陰萎いんいであられるのでしょうか」

「分からん。侍医たちは大したことない、精力のつくもんをお食べになつて、ええおなごを側に置くのがええというばかりや。まあ、いい加減なことや。けどまあ、それで」

「それで、靜山を？」

万里小路はにやりと笑って大仰にうなずいた。

「そうや。全く何が味方するかは分からへんけど……けど、今の状況は、重い」

「はあ」

重責任務というわけである。

「上さんも少し焦ってはるんやろ。男としても、お世継ぎのことにしても……」

そんな状況やから、静山」

「はい」

「頼みますえ」

無表情のまま静山はうなずいた。

あかり（前書き）

第二章

あかり

「あかり、おまえももう十五になった。これからはサエらについて、女人として新しい技を身につけるのだ」

十五歳になった夜、あかりは親方にそう言われた。よく分からなくて、はい、と答えたが、新しい技ってなんだろう。

早駆けや力技では男の子たちに叶わなくなつたとしても、道具投げや吹き矢なんかじゃ、まだまだ自分の方に部があつた。またひとつ新しい技を加えられるなら、それは頼もしいことに思えた。

水戸筑波山の麓。

野山を耕し細々と生活する村人たちは、他の顔も持っていた。
忍び^{もはき}裳羽服津衆としての顔である。

水戸藩の御用達にして密かに結成された諜報集団は、武士から分かれた一団であつた。

一族の長を中心に剣術を習い、然を読み、技を鍛えるといった伝統を持っていた。

その裳羽服^{もはき}津村のはずれに、あかりは母と二人で住んでいた。
だが、その母も十二の年に死に、近所の人に面倒をみてもらいながら暮らしていた。

来るように言われていた部屋に入ると、五つ年上のサエと同じ年頃の勘介^{かんすけ}がいた。

「あかり、今からあたしが勘介にする事をよく見ておくんだよ。次にあなたにやってもらうからね」

「…はい」

「いよいよ新しい技の練習だ。」

サエは勘介の肩に手をかけると、媚惑的な目をして勘介を見つめた。弾かれたように勘介はサエの口に吸い付くと、そのまま舌を絡ませあい息を上げた。

言葉も出ないあかりは、口を開いたまま後ずさった。

「あかり！よく見ておきなさい」

「でも」

サエは片手であかりの腕をグイッと掴んだ。

「こうよ！」

そのままサエはあかりの唇を奪った。

「こうして……唇の弾力を楽しんだり……相手の舌を強く吸ったり絡ませたりすると、気持ちいいでしょ」

「あ、あ……」

サエの繰り返し返される愛撫に、あかりは腰から下の力が抜けそうになった。

「ふっ」

その様子をみたサエはあかりを離れた後、肩を落とした。

「あなた、吸い口くらい見たことあるでしょ」

「うん……でも」

見るのとするのでは大違いだ。

「この先したい？」

「うん」

何だかうずうずして気持ちよくて、たまらなかった。

「じゃ、勘介、頼むわ」

「おう」

こちらを見ていた勘介が嬉しそうに笑った。

「えっ、やだ」

「え？」

「勘介はやだ。サエがいい」

「なんだよ、それ」

「だってエ」

なんだか男とするのは汚れるような気がした。

はあ、とサエは大きなため息を吐いた。

「分かった。……勘介、あんたもう行っていいよ」

「えー 今日はやれる思ったのに」

「仕方ないでしょ。お姫さまは、まだ男が怖いんだから」

ぶつぶつ文句をいう勘介をサエは部屋から追い出した。

「あかり、今日は最初だから言っておくね」

布団の上に正座をしたサエは、向かい合ったあかりの目をじっと見た。

「これからするのは技だというのを忘れないようにすること。女の忍びとして男を籠絡さうらくするのも技術のひとつなんだよ。ただ……最初

は快樂が大きいから体にひきずられないようにするのが大変なんだ」

さっきの口吸い技を思い出し、あかりはごくりとつばを飲み込んだ。
「さ、サエはもう何ともないの？」

「ふつ、そんなことないさ。あたしだって、気持ちよけりや感じるよ。だけどね、これはお役目だ、ってことをしっかり頭に入れておけば、心のどこかが冷静でいられるんだよ」

「ほんとに？」

「ああ」

「あたしには無理かも。だって、さっきみたいにサエに口吸われて、ぎゅつとされたら、その人のこと好きになっちゃう気がする」

「それはお役目だと思ってないからだよ」

「そうかな」

「それと慣れだよ」

「慣れるの？」

「ああ。手裏剣でも綱渡りでも練習するだろ？あれと同じだよ」

「ふうん」

そう聞くと大丈夫なような気がした。

サエはこれから起きるシビアな事実を、あかりが理解していない事が分かっていた。

「後は相手のヤなところを忘れないようにすることだ。あんた勘介のヤなトコ言ってみな」

「バカなトコ？」

「うーん、それもいいけど、口が臭いとか、目がやらしそうとか、肌が汚いとか、そーいった生理的に嫌なところだ」

「勘介そんなに悪くないと思うな。がざつでちょっと目がやらしいけど」

「でしょ？あんたを見る目がいやらしい、ねっとりしている、汗臭さそう……」

「そこまで言わなくても」

あかりはきや、きやと笑った。

サエはあかりを布団に押し倒した。

「でも、今日はいいいよ。初めてだからね」

柔らかい乳房と乳房を合わせ、サエはあかりの脛を指で優しくなぞった。

無邪気に頬を上気させて目を閉じているあかり。
その姿にサエの胸は痛んだ。

あかりは頭を抱えうずくまっていた。

毎夜、毎夜、男と交わり、快楽の地獄に落ちていた。

『慣れたよ』

サエが言ったのは、こういうことだったのか。

確かに、三人の男たちと順番に行為を行えば、相手の人格など気にしていられない。

周到に用意されていた男たちは、みな妙齡で技巧達者。勘介など足元にも及ばないだろう。

相手を感じさせ、自分も気持ちよくなるよう、色々な指導が行われた。

言われたことが出来るようになるのに反して、心は冷め、体は快樂だけを求めている。

「サエ、あたし、もうだめになっちゃうよ」

あかりはサエに泣きついた。

「あたし、最初サエにしてもらった時、どきどきして嬉しかったのに、何か心が暖かかったのに…… もう今はやることしか考えてないの。好きものみたいになっちゃったの」

「あかり……」

「あたし、もうダメだ。もうよく分からない」

サエはあかりの肩を優しく抱いた。

「大丈夫だよ。……あたしも通った道だからね。

もう少ししたら、あんな月のものがくるだろう？ そうしたら気持ちも変わるし、その後は快樂に溺れていられない程、体を動かす修練が待っているから。

筑波山を何回も駆け上がったり、降りたりするんだよ。つらくてヘトヘトになるよ」

「ほんとう？それで、体の欲望はおさまるの？」

涙のたまった目であかりはサエを見つめた。

「ああ。大丈夫だ」

少し安心したあかりは、とにかく早く月経が来てくれるよう願った。

でももし……月のものがきても、おさまらなかったら。

あかりは、一族に伝わる薬湯書を開いた。

今までに忍びの智恵として、薬草の知識は教えられていたが、自分から求めて探すのは初めてだった。

数十冊からなる薬湯書は、驚くべき内容を記していた。

毒物・幻覚薬・媚薬・解毒薬……気になったのは、堕胎剤や避妊剤の項目。

『あたし……やや子が出来てたりしないだろうか』

月経が来る日づけから換算して性技巧の修練が行われていたのは分かっていたが、やはり心配であった。

色々考えながら、薬湯書を真剣に読んだが、結局、色狂いを治す薬を見つけることは出来なかった。

龍才（りゅうさい）

「親父どの！どうしてあかりに薦^{つた}かずらの業を行った！」

十八歳の龍才^{りゅうさい}は目を血走らせて、裳羽服津衆の長であり父親の炎才^{えんさい}の首元を締め上げた。

馬を走らせ飛び降りてから、一瞬のことだった。

「あかりはもう十五だ。そろそろ女として」

「そんな事を言ってるんじゃないねえ！」

周りにいる長老たちが、あわてて龍才を引き剥がそうとした。

「あんたはっ！自分の娘になんて事をしたんだ」

「…娘だからこそ、一族の掟には誰よりも従ってもらわねばならん。おまえこそなんだ龍才。後とりともあろう男がなんてザマだ」

「うるさいっ！」

龍才は自分を取り押さえていた男たちの腕を振り払った。

「あかりはあんたの何だ？使い勝手のいい道具か？

それじゃ、あまりにもあかりが可哀相だろう！本当の娘だということも知らず、ずっと下人として一族の掟に従ってきたんだぞ」

「おまえはあかりが妹で、抱けなかったことに腹を立てているだけだ」

龍才はぐっと黙った。

「親父どのが悪いんだ……俺は、俺は、ずっとあかりを」
「だから、おまえの居ぬ間に薦かずらの業を行ったのだ」

ぎりり、と歯を鳴らすと龍才は、「うわー」と叫んでおもてへ飛び出した。

悲しくて、悔しくて、死んでしまいたかった。

なぜ、俺は忍びなんかの家に生まれてしまったのだろう。
なぜ、あかりは妹だったのだろう。

炎才が憎くてたまらなかった。

あかりは筑波山を駆け登っていた。
息があがる。

今日はこれで四度目だ。
サエが言ったとおり、倒れそうなほど激しい修練が始まったのだ。
ただし、月のものはまだ来ていなかった。

『どうして来ないの』
赤ん坊を孕んだかもしれない恐怖を覚えながら、毎日を過ごす。

あまりにも激しい運動のため夜はあつという間に寝付いてしまっていたが、それ以外の時間はずっと不安を感じていた。

『もし、出来ていたらあの薬を使わなきゃいけないんだろうか』
薬湯書の堕胎剤が何度も目に浮かんだ。

そんな日が続いて四日目。
ふいに月経がきたのだった。

「いたた」

遅れてきた月経の痛みは強かった。

山登りを免除されたあかりは、家で薬草を煎じていた。

「あかり」

「龍才さま」

ひきつった笑い顔で龍才はあかりの元を訪れた。

あかりは母親が死んでから、ひとりで小さな家に住んでいた。
もはきつ
裳羽服津衆の集落内ではあったが、ひっそりとした場所にあった。

「何を作っておるのじゃ」

「痛み止めです」

「どこか痛いのか」

「ええ、ちよつと腰が……」

あかりはあいまいに笑った。

「いかん、いかん。俺が煎じてやるから、おまえは寝ておれ」

「でも、龍才さまにそんな事をさせては……」

「いいから。おまえは寝ておれ」

強く促されてあかりは、布団に入った。

土瓶に入った薬草をしばらく混ぜかしたり濾したりしていた龍才だったが、作業が終わると出来上がった薬湯をあかりに持ってきてくれた。

「さあ、飲め」

体を起こすのを手伝いながら、あかりに湯のみを差し出した。

血の気のない白い顔は、夕顔のようでいつそう儚げに思えた。

「ありがとうございます」

「そうじゃ、おまえに花かんざしを買ってきてやったぞ。おまえ、前に欲しがっておったろう」

「ええっ？」

龍才は懷から、布に包まれた花かんざしを取り出した。

銀色の地に、先に大きな円がついており、その中に牡丹の透かし彫りが品よく彫ってあった。

「わあ、何てきれい」

「気にいったか？」

「はい」

町で金持ちの娘たちがつけている、ビラビラと揺れるような飾りのついたものより、シンプルで技術の高いかんざしのほうが、あかりは好きだった。

「あの…でも、龍才さま、こんな高価なものいただいてよいのでしょうか」

「あかり」

龍才は真剣な顔をした。

「おまえには、安物は似合わない」
不思議そうにあかりは首をかしげた。

「おまえはな、こんなドロ臭い、鄙^{ひな}で埋もれているような女じゃないんだ。

御殿女中のように贅沢で、きらびやかな世界こそ、おまえにふさわしい」

「龍才さま？」

「あかり、こんなトコにいたんじやおまえは一生草モノだ。それじゃあんまりにも惜しい。

どうだ、俺といつしよに江戸にいかねえか？」

「江戸に？」

「ああ」

「龍才さまといつしよに？」

龍才は力強くうなずいた。

「俺とめおとになってくれねえか」

あかりはぽかんと口を開けた。

あまりにも突然で、理解できなかった。

龍才はあかりにとって、次期親方として敬う人物であって住む世界が違う人間であった。

「俺の事が、きらいか？」

「いえ。決してそのような……ただ、あたしにとって龍才さまは尊敬する方であって、その」

「尊敬なんかするな！」

龍才をあかりを抱きしめた。

「あ……」

その瞬間、あかりはぞくぞくとした鳥肌がたった。

だめ。

肌を合わせられると、欲望の波に押し流されそうになる。

「だめですっ！」

あかりは龍才をつき離れた。

「あ……」

そして目が合った。

ふたり二様の感情。

龍才の眼には驚きと失望が。

あかりの眼には恐怖と後悔が。

龍才は一瞬うなだれたように視線を落とし、そのままあかりの家から出て行ってしまった。

ある日、衆の若者・三五郎ちんごろうが殺された。

二十二歳の三五郎は、忍びとして遜色もなく力自慢の男であったので、村では騒然となった。

首の後ろを鋭利な刃物で深く刺されていた。

よそ者がやったのか、それとも内部の者か？

何度も長老たちが、集まりを持ったが手がかりはつかめなかった。

そんな中、龍才は竹吉の様子がおかしいことに気がついた。

「ちょっと来い！」

竹吉は村の若者衆の一員で、ずるがしこいネズミのような目をした若者だった。

「いてて、いて、痛いですって」

「おまえのやった事は分かってるんだぞ」

「えっ！何を」

「三五郎のことだ」

「お、俺は三五郎を殺してません！」

「違う。おまえと三五郎は」

「違うんですっ！俺は止めとけて止めたんです！」

「何を止めとけて？」

鋭い眼差しで睨む龍才。

ハメられた事に、気づいたが既に遅かった。

「あ、ああ……」

と、竹吉は言いづらそうに口を開いた。

「俺たち、薦かずらの済んだ娘に、夜這いをかけようって話になつて。いや、その昔からの慣例だし、薦かずらの娘は体が欲しがつてしょうがないから、これは人助けにもなるって」

薦かずらが済んだ娘？

あかり、ではないか！

「なんだとお」

龍才は眼球をひんむかんばかりに見開き、竹吉の首根っこを締め上げた。

「ごめんなさい、ごめんなさ」

息が苦しくて最後は声にならない。

龍才は力をゆるめた。

「話せ」

「うつつ……お、俺があかりの家に行った時は、すっげー抵抗にあつて、結局何もせずに帰って来ちました」

「おまえの他に、あかりの家に行ったのは？」

「三五郎です。おれが前の日に失敗したの聞いて、『俺は大丈夫だ。おまえみたいな失敗はせん』って息巻いてまして……」

三五郎を殺したのはあかりなのか？でも、強力で忍びとして経験もある三五郎とあかりじゃ、どうみても三五郎に部がある。

あかりが殺される事はあつても、三五郎が殺されることはあり得なかった。

「絶対にあかりが三五郎を殺したんですって。誰も信じやしないだろうけど、俺には分かる」

「なんで、そんなことが分かるんだ」

「あかりを襲った時、俺は殺されかけたんです」

「それは、おまえが忍びとして未熟だからだ」

「そ、そりゃ、俺は龍才さまや三五郎とは違ってヘボですけど、あかりはその、ものすごく強いんですよ。……のうえ、あの家には忍びの俺たちにも分からないほどの仕掛けが山ほどあるんです」

あかりの母親が女だけの家を守るため、何か特別な仕掛けをしていたのだろうか。

「三五郎は、ひっかからなかったのか？」

「知りません。止めとけて言ったんですよ。なのに、余計やる気を出しちゃって」

自分の能力に自信がある三五郎の性格では、あきらめはしないだろう。

「だけど、三五郎はあかりの家ではなく、自分の家で死んでたんだぞ。あかりが家で殺したのだったら、あの者を運ぶのは、かなり骨折rid。馬もない、不可能だ。やはり、あかりが殺したなど、つじつまが合わない」

「いや、あの女です。妖術を使って三五郎を運んだんです」

龍才は竹吉の話など、もう聞いていなかった。

竹吉を十分に脅して口止めをし、他の若者にも一族の娘に手を出さぬよう言い渡した。

歩きながら龍才は、考えた。

あかりが手を下したのではないとしても、何かあったのは確かだろう。

竹吉の言う日づけから考えても、あかりが無関係とは言いきれない。

急に三五郎の首の傷と、あかりにやったかんざしが頭に浮かんだ。

『あかりなのか？』

生きる道

龍才が家に帰ると、炎才が呼んでいるとの言伝を受けた。

炎才の部屋に入ると、あかりが居た。

龍才は驚いたが、何気なく髪にさしたかんざしに目をやった。
艶のある黒髪に、銀製の花かんざしはきちんとおさまっていた。

「龍才、来たか。座れ」

跡取りとしての座場所は、炎才の右隣と決まっていた。

あかりとは向いあう形になる。

竹吉から聞いた話と違い、あかりは不気味なほど落ち着いてみえた。

「龍才、あかりは、今日からこの屋敷に住む」

「はあ」

「村はずれの一軒屋におなご一人でいると、何かと物騒のようだな」
その言葉を聞き、龍才はびくんとした。

炎才は横目で、息子を見ていた。

「三五郎は修練の失敗で死んだのだ」

その言葉に龍才は息を飲んだ。

親父は、三五郎の事件の犯人を知っている？

「ではまさか」

あかりは、無表情で龍才を見つめていた。

そうだ、と返事したも同じであった。
それがどうした、という表情にもとれた。

「よいな、三五郎は修練中に死んだのだ。おまえ、あかりの面倒をみてやれ」
そのまま炎才は、ふたりを残し部屋を出ていった。

しばらく無言の時間が流れた。

「あかり……三五郎を殺したのか」
「はい」

「どうやって殺した」

「三五郎のうちに行って誘惑をし隙をみて殺しました」

あかりから三五郎のうちへ？

「なぜ？」

「……………」

あかりは口をつぐんだ。

「大体の話は竹吉から聞いている。おまえを責めているのではない。ただ、三五郎よりも非力なおまえがなぜそこまで出来たのか…三五郎を誘惑したとて相手は忍びぞ。そうそう簡単に気をぬくとは思えん」

しかしあかりは今度も口を開かなかった。
龍才はそれ以上の質問は止めた。

言いたくない事を、それ以上聞く必要もなかったからだ。
いったい、あかりは何を考えているのか。

この間まで無邪気に笑っていた少女は、人を殺め、何を考えている
か分からない無表情な娘へと変貌してしまっていた。

三五郎事件は修練の事故ということで、裳羽服津衆内は解決した。
炎才と長老たちが、そう決めたからだった。

不透明な仕事をしている忍びには、長が決めたことを詮索しない、
という不文律があった。

また、三五郎が独身であったこと、皆からあまり好かれていなかったこと、などから、決定に反対するものは無かった。

「なぜもつとあかりの面倒をみてやらん。薬草を取りに連れて行って欲しいと言われているのだろう」
不機嫌な龍才に、父親は声をかけた。

「……親父どのこそ、あかりに大甘ではないか。今頃になって父親面か？」

炎才はにやりと笑った。

「おまえは、本当に子供だ。あかりのほうがよっぽどしっかりしておる」

「では、あかりに後を継いでもらえばよろう」

「おまえは、あかりの何を見ておる。あかりの忍びとしての腕は相当だと思わんか？自分より実力のある三五郎を倒したのだぞ」

「それで、親父どのは喜んでおるのか」

「おうよ」

炎才は腕を組んで少し遠い目をした。

「人間はな、ぎりぎりで追い詰められた時、本来の力が発揮されるのだ。あかりは三五郎に体を奪われた。」

しかし、その後でちゃんと相手を倒しておる。復讐心に燃えたただけでは、三五郎を倒すことなど出来なかったであろう。事を達成するには氷のような冷静さと炎のような情熱が必要なのだ」

あかりは三五郎に体を……？

龍才はその言葉に衝撃を覚えた。

『だから、あかりは何も言わなかったのか？』

茫然とする息子を見て、炎才は少し声を落とした。
「おまえも、いい加減にあかりの事はあきらめろ。
いや……近くにいて、それは無理な話か……」

背を向け去っていく炎才。

初めて父親が息子に詫びているように見えた。

裳羽服津の長として生きると決めたときから
親としての愛情を優先させることはずっと無かった。

そしてそれは

皮肉にも息子が、母親の違う妹を慕う結果にもなってしまった。

あかりは乾燥させた益母草やくもそうを、黙々とくだいていた。

薬草園にある小屋は、薬庫であり調剤所でもあったのだが、最近ではそこにすっかり入り浸っているあかりであった。

小屋は炎才の従弟である雲才うんさいが管理をしていた。

雲才は体が弱いため忍びとしての実践を行うことが出来なかったが、聡明で知識が豊富な男であった。

一族の医者も兼ねているといつてよかった。

しかし、今小屋にはあかりひとりだった。

龍才はあまりにも熱心に作業をしているあかりにしばし見とれた。

台の上には色々な薬草と書が散らばり、一方では火にかけた土瓶がぐつぐつと音を立てていた。

「また、新しくすりを作っておるのか」
龍才はあきれたように言った。

「龍才さま」

あかりは緑色に染まった手の動きを止めた。

「だって、女人の病に効く薬が全くないんです。雲才さまったら…
揃えてないんです。」

材料もぜんぜん足りません。芍薬がもっと必要なんですが、この時期じゃもう手に入らなくて…

来年に向けて今から植え付けないといけませんし。ああ、そうだ
龍才さま！」

「な、なんだ？」

「今度、町で市が立つ日に、連れて行ってもらえませんか」
「市に？」

「はい。富山の薬売りも店を出すと聞いています。それを見たいの
です」

「雲才どののほうが詳しいのではないのか」

「雲才さまは、お金を出し惜しみされます」
なるほど。

異様なあかりの迫力に飲まれ龍才は市に連れていく約束をしてしま
った。

しかし、こんなにあかりは凝り性であったのか。

いや、水を得た魚のようだ。

薦かずらの業や三五郎の件を考えると、別人のようであった。

龍才は知らなかったのだ。

二つの事件があったからこそあかりは目覚めた、ということ。

忍び、と女。

この二つが重なると、過酷で苛烈な運命は必至となる。

自分の体と心を守るのに、薬はなくてはならないものであった。

催淫剤や幻覚剤だけでなく、妊娠しないようにする薬や、月経痛を軽くする薬が欲しかった。

また、男に体をあずける任務を実行するにあたっての幻覚剤の工夫もしたかった。

今回はオオカミナスビを服用する事によって覚醒状態を保ち三五郎を刺殺した。

感情が麻痺し任務は遂行しやすくなる。

ただ薬は危険でもあった。

オオカミナスビを使用した後の気分の悪さといったらなかったからだ。

麻薬は量の調節や使用する部位がむずかしくまだまだ情報と実験が必要であった。

あかりは薬に没頭していった。

新たな打診

それから数年がたった。

雲才を凌ぐ知識と薬剤の在庫を持つ事になったあかりは、一族では女医師として認められるようになっていた。

反面の悩みは、年頃になり美しさに磨きがかかってきた事であった。尊敬を集めるのに淫靡なる美しさは大きな障害だったからだ。

薬草を探して山を歩く姿を見て妖術を使うのだ、などと言うものもあった。

一部の者からは炎才や龍才が親子共々あかりに骨抜きにされているのではないか、という噂もたっていた。

炎才を悩ますそんな事態に、朗報とも言える使者がやってきたのは、暖かい春風ふく菜の花の咲く季節のことであった。

「この間、お城からのご使者が来ての」

龍才とあかりを目の前に炎才は口を開いた。

「裳羽服津衆せいはふしから頭のよい美しい娘の隠密が欲しいと言われたのだ」

「何ゆえにござりますか」

龍才はあかりに該当する話なのだと推測した。

「今は詳しいことは言えんが、いずれは江戸城大奥に御殿女中として入りこむためだ」

「ご、御殿女中！江戸城大奥に？」

あかりと龍才は顔を見合わせた。

「そ、それで、あかりをそのお役目へ？」

「そうだ」

めずらしく炎才はキセルを口に持っていった。

すうっと吸い込み、しばらく待って、ふう〜と煙を吐いた。

「だが、その任務は何人かの候補を立て最終的にひとりだけが選ばれる。お城での検分や、武家の娘としての修練が終わった後、一番相応しいものを選ぶのだそうだ」

「ではあかりが大奥に行くと決まった訳ではないのだな」

「まあ、そうだが…」

炎才は少し口調を濁した。

「わしとしては、あかりに行ってもらいたい、と思っておる」

キセルの中の灰を落とすため、囲炉裏のふちをカンカンと叩いた。

「今、村であかりの存在がどう言われているか、分かるな」

その言葉にハツと顔をあげたあかりは、しばらくして「はい」と答えた。

「それは村の連中の勝手な言い草だ。あいつらあかりに助けてもらったクセに、妖女だの何だのとバカなことを言いやがって……そんなやつら放っておけばいいんだ！」

「龍才！」

「だって、そうだと親父！あかりは」

「いい加減にしないか」

切れあがった眼がキツと龍才を睨んだ。

「もはきつ裳羽服津衆は、お城の殿からずっと過分な期待をかけていただい

ておるのだ。今度のお役目は天下の大事業ぞ。藩とて伸るか反るかの大博打なのだ。

もし我々がしくじれば我が藩はタダでは済むまい。それほどのお役目なのだ。それを……その榮譽を殿は我々に与えてくださったのだ。なのにおまえは何というたわけた事を言うのか」

「申し訳ありません」

龍才は打たれたように頭を下げた。

「あかり、今言ったことは本当なのだ。お城の殿さまは、今のお上では決して世情がよくならんと思われておる。実権を握っている大御所さまは大奥に何十人も妾を囲い浪費し、その側女一派が世事を牛耳っておる。

一方地方では、庶民の暮らしは厳しく一揆や飢饉も起こっておるのだ。他にも度々不穏な外国船が近海に出没しているとの話もあるのだ。このままではいかん、放っておけん、と御三家の殿は立ちあがろうとされておるのだ」

「そんな重大なお話とわたしの大奥での御殿勤めに何が関係あるのです？」

「詳しいことはまだ言えぬが…大奥の威力をおまえは知らんのだ」

「……………」

「大奥は將軍や表の人事さえも動かす大きな権力を握っておるのだ。大奥がすべての実権を握っておるとは言えぬが、政治の重要な要素であることは確かなのだ。時期將軍に関わる場所でもある。

ただ、あまりにも謎に包まれた場所ゆえ何人か息のかかった者を送

り込み、状況を知りたい、と思われておる」

衝撃的な内容にあかりと龍才はしばらく口がきけなかった。

腐敗政治。

御三家の反乱。

外国船の渡来。

五里霧中の大奥。

「とにかく、大奥へ入ったら何が起こるか分からん。だから、これは誰にでも出来るお役目ではないのだ。……あかり、おまえにしか出来ないお役目である、とわしは思っておる」

炎才の目に愛しい光が宿ったようにあかりは思えた。

強い信頼感を感じた。

そうだ。

親方には十五の時よりずっと恩義を受けている。

三五郎の件もおさめてくれた。

薬草の勉強も、お金だって沢山かけてくれたのだ。

何より炎才が、折々にかけてくれた声の暖かさをあかりはちゃんと覚えていた。

そのようなことずっと見守っていてくれなければ出来るものではない。

それに

大きな世界に出ていける。

この小さな村から出て江戸、それも江戸城に行くのだ。
十八の娘には胸高鳴る出来事であるのは間違いなかった。

あかりは役目を果たす決意をした。

「龍才、嫁を取れ」

あかりが出て行った後、炎才は龍才に静かに言った。

心外な顔をして龍才は父を見上げた。

「おまえも、もう二十二だ。結婚してもいい年だ」

「ですが…」

「弓才のトコのアヤはどうだ？」

今年十七になるアヤは又従妹にあたるおとなしく素朴な少女であった。

その無口さは忍びの女房としては相応しいものであったが、何に付けても普通であった。

「もう少し頭のいい娘でないと跡取りの内儀は務まらぬ」

「そんなに悪い訳ではなからう。あんなものだ。そのうち機転が効くようになってくる。女は年月がたつにつれ自覚がめえしっかりしてくるのだ。おまえの母親もそうであったぞ」

「俺は元から頭のいい女が好きだ」

「おまえの好みなど聞いておらん。とにかく結婚するのだ。よいか、あかりはもうおまえの手の届かないところに行く。あきらめるんだ、どうせ結ばれぬ運命だ」

龍才は狼狽したような悲しいような顔をして黙った。
どうして。

何千回と唱えた呪文。

こんなに愛しいのに。

こんなに間近にいたのに。

あかりしか見ていなかったのに。

ああ、やはり、あの時一緒に駆け落ちしてしまえばよかったのだ。
誰も知らない場所へ……

あかり……

そして内命

あかりが裳羽服津村もはきつを離れて約三年がたとうとしていた。

江戸小石川にある水戸藩江戸屋敷。

十八万坪もある広い広い庭。

それを配す邸内に、あかりは居た。

江戸屋敷での扱いは、家老・安藤帯刀あんどうたてわきの娘としての奉公である。

日中は藩主の奥方の世話をし、夜は安藤家で休むといった日々であった。

藩邸に上がったのはここ半年ほどで、その前は安藤邸にてみっちりと武家作法・習い事を仕込まれていた。

小石川後楽園に咲く菖蒲が目にも鮮やかとなったある日。

藩主・為昭なりあきにあかりは召されたのだった。

側には養父である安藤帯刀も控えていた。

「今日はな、そなたに大事な話があって呼んだのだ」

「はい」

一通りの挨拶が終わった後、為昭は一段声を低くした。

「この幾年、そなたはよう頑張ってくれた。礼を申すぞ」

「身に余るお言葉、痛み入ります」

「でな、そなたも何とのう気づいておると思うが、そなたに大奥でのお勤めに上がってもらうことになった」

「では、わたくしが？」

「ん」

為昭は選ばれたのはあかりである、と大仰にうなずいた。

「ここにやってきた客人たちが何人も、そなたを嫁にもraitたい、
と言った。また、黒川藩主の柳沢どのや家老の横井どのにも太鼓判
を押していただいたのでな。」

わしはな、そなたが美しいというだけで、この役目をそなたに決めたのではないのだ。何よりも聡明であること、機転が効くこと、度胸があること。これが何より大事じゃ」

あかりはうなずいた。

「大奥は魑魅魍魎が跋扈しておる。女の業が渦巻く世界じゃ。そこでやっていくには、並大抵のことではない。美しさだけではやっていけん。否、美しいがゆえ嫉妬の的ともなるのだ。よいか、あかり」
「はい」

「そなたは大きな陰謀に巻き込まれるやもしれん。女としての人生を狂わし、立ち上がれないような事もあるう。しかし、それでもやつてもらいたいのだ」

「はい。今までお殿さまに受けたご恩忘れませぬ。裳羽服津衆の一員として、またわたくし個人としても精一杯、お役目を遂行させていただきますと思います」

あかりの姿を、養父である安藤帯刀は笑みを浮かべながらうなずいていた。

「詳しいことは、わしから話そう」

優しい声で安藤はあかりに向かって、膝を向けた。

「そなたのお役目は、大奥に御中臈として入るところから始まる」
安藤は、あかりの前に詳細を記した紙を置いた。
大奥役職の一覧のようである。

「御中臈は上様の身の周りのお世話をするのが仕事である。もっとも上様のお手がつきやすい役職じゃ。じゃが、最初から新米の中臈が上様直々のお世話をさせてもらえる訳もない。まずは、有力な御年寄の下で働きながら大奥のしきたりを学ぶのが先である。

融通のきく御年寄の元に配属されれば、大奥の仕事に忙殺される事はなく、われわれのお役目に重きを置くことができる」

「上様のお手がつきやすいように、このことでございましたが、お役目としてお床入りは、どれほど重要なのでしょうか」

今までの経緯から考えても、美貌は大事な要因であった。しかし、それだけが仕事とは思えなかった。

「さすがだ、あかり。上様のご指名は重要である。はっきりいえば寵愛を一身に受けてもらう必要がある。その為の床技巧や媚薬を使ってもらうのも構わん。だが」

安藤は少し言いよんだ。

「もしそなたが上さまの世継ぎを生んだとしても、その子は將軍できぬ」

「……はい」

返事はしたが意味がよく分からない。

「つまり、そんなに待っておれぬ、ということじゃ」

「それは外国船問題があるからでしょうか」

「……まあ、そうじゃ」

ここで為昭が立ち上がってゆっくりとあかりに近づいた。

「酷なこと言っておると思う。しかし、もう猶予はならぬのじゃ。もし、もしじゃ……もしそなたへの上様の寵愛が不動のものとなつた折には、わしが考える次期將軍候補を推薦してもらいたい」

「それは……」

「それは政局をみて、おいおい沙汰いたす。上様は現在のお世継ぎであられる家倅^{いえさち}さまに心許ない思いをされているのは確かだ。もちろん、わしらも家倅^{いえさち}さまでは困るのだ。乱れた時勢を変えるには、次期將軍として強い実行力をもつ方が必要なのじゃ」

間近でみる為昭の眼光は力強く真剣であった。

「家倅^{いえさち}さまは体もお弱い。いつ身罷^{みまか}られるか分からぬ。だから言つていつまでもご健在であられても困るのだ」

その言葉の裏の意味があかりにはすぐに分かった。

「では、わたくしに家倅^{いえさち}さまを？」

「いや。それはまだよい」

あかりの眼を覗き込むようしゃがんでいた為昭は、立ち上がった。

「ただ、忍びの情報からも、いま世情がどうなっておるか、そなたも多少は知っておろう。……多くは言わぬ。しかし、わしを信じてお役目を果たしてくれ」

あかりは、はい、とうなずいた。

「大奥の様子は逐一報告して欲しい。寵愛を受けている女人や、その権力構図、噂話まで必要じゃ。また、老中たちが御年寄にこそこそ頼み事をしている内容などは大事である。これは年寄付きであるからこそ出来る仕事なのだ」

「わたくしが配属される御年寄は決まっているのでしょうか」
安藤が口を開く。

「万里小路さまという京から来られた上臈御年寄じゃ。万里小路さまは、現在の大奥で強大な権力を持つておられる。その手腕は公家出身としては異例のこと。」

そなたも重々気を抜かぬことだ。万里小路さまはこちらの計画を大方ご存知であられる。しかし、藩としての内情までは話さぬことじや。そなたは、ただ上様を籠絡して溺れさせるのがお役目であると心得よ」

「はい」

「この計画は絶対に洩れてはならぬ。そなたは黒川藩、家老の娘として入台するのだ。それゆえ文を書くときは、家老横井殿の江戸藩邸をあて先とし、用向きがある時も横井殿に頼むのだ」

先ほども出てきたのだが、なぜ、黒川藩なのだろうか。

そういえば何回か黒川藩の藩主や家老にお茶を出したことを思い出した。

「黒川藩の娘として振舞う理由を、そなたが知る必要はない。ただし、黒川藩の処々はそなたは知っておく必要がある。明日よりそなたは黒川藩 越後に向かうのだ」

「越後…」

「くに元から来たという身元になっておるゆえ、越後を見ておくのも大事じゃ。その後は横井どのの江戸屋敷にて過ごしもらう」

政治的思惑は、怒涛のように動き出した。

早る胸と緊張を抱えて、あかりはこれからの日々に思いを馳せた。

夜伽（前書き）

第三章

夜伽

小さな紙に包まれた、白い粉を月島は観察していた。

静山の部屋から、おまつが盗んできたおしろいである。

自分の京おしろいと比較してみて、色や匂い味は大きく変わらないように思えた。

『動物に与えたとして鉛である白粉自体、有害…これでは確かめようがないではないか』

当時使われていた京おしろいは鉛でできており、大量に使う舞台役者や大奥では鉛中毒者が多かったと言われている。

その事を知っていたものは、ごくわずかであったが、月島は知っていた。

情報通の月島は代用品として、タルクのような粘土に化粧水や椿油を混ぜてを使っていた。

『これは京おしろいであろう。……とすると、もっと他に何か隠している場所があるに違いない』

しかし、今日は探索どころではなかった。

部屋局として、上様への褥入りを準備せねばならないからだ。

「おまつ、これを神田白壁町の遊玄^{ゆうげん}という町医者に届けさせるのだ」
二つのおしろい包と文と金子を渡す。

これが確かに京おしろいである、ということを綿密に調べて欲しい

との旨を手紙には記していた。

遊斎はオランダから入ったといわれる顕微鏡を持っていたし、何がしかの実験をして反応から同じ物質であることを確かめてくれるだろうとも思っていた。

月島は大奥御匙医の無能を知っていたので、自分のお抱え医師を持っていたのだ。

静山は入浴後、米ぬかで念入りに体を磨かれ、髪を乾かされ、襟足や鬘を剃られたあと、綸子の夜着を纏わされた。今までに嗅いだことのない甘く爽やかな香りが、夜着から香る。

これは、いったい何だろう？

化粧はごく薄く施され、結髪から降ろし髪となった。鏡に映った自分の姿を見る。

静山は『大丈夫だ』と肯いた。

大丈夫、素顔に近いほど、わたしは美しい。

母に似てきた容貌に少し恥ずかしさを感じたが、母の思い出は裳羽服津の存在にすぐ変わった。

『さあ、しっかりしろ！あかり。お役目本番だ。今日は何も細工はしない。武家の娘として、上様の寵愛をいただく努力をするだけ』

「月島さまがおいでになりました」

部屋子が言うと同時に、黒地の打ち掛けを着た月島が静山の部屋に入ってきた。

「どんな様子だ？」

「ご指示どおりご用意が整いました。大変美しゅうございます」
部屋子の娘が自慢げに返事をした。

座っている静山を立て見下ろしていた月島は、静山に立ち上がるよう命じた。

「うん」

少し距離を置いて静山を見た月島は満足げに頷いた。

「やはりそなたは薄化粧のほうがよい。本当はいつもそうしてればよいのだ」

そう言う月島は、今夜はやけに厚化粧であった。

肌が見えぬほど真っ白におしろいを塗り眉も薄かった為、何かグロテスクな風体であった。（それが大奥高位の本来の化粧であったが）

不意に月島は静山の髪に手を入れた。

「指示どおり、髪は八割乾かしたただけだの」

そのまま静山の後ろに回って、止め紐を解いた。
ふわり、と髪が広がった。

「ここからはわたくしがする。皆、下がってよい」

部屋たちは、一礼をすると、衣装や道具を持って出て行った。

再度座るよう指示された静山は膝を折った。

椿油が入った壺や道具を身元に寄せた月島は、慣れた手つきで髪に

付ける油と香油を調合した。手の平で温め、静山の髪に手を入れた。

「髪油は、まず髪の内側からつけ、そのまま毛先に滑らす。毛先も少し多目に付けるが、着物に触れる場所ゆえ沢山つけてはならん。そして手ぐしで何回も梳く」

手ぐしで髪 of 性質を確かめながら、油の量を調節していく。

「やや少ないくらい of 状態でつげ櫛で梳いていく。すると調度よい手触りとなる。もし油を均等に付け、そのまま櫛で梳くとベタツとして野暮ったく、触った時気持ち悪いのだ」

褥経験しとねのある月島だからこそその氣遣いである、と静山は分かった。結髪とは違った手入れの方法だった。

否。

これは月島独自の方法であろう。

蒸留法で作られた香り油を見たことがなかった静山は、非常に驚き惹かれた。これを、薬として術として使うことは可能ではないかと。

香り油は今という精油。静山の予測は外れてはいなかった。

甘いお香に似た香りのほかに、微かだが蜜柑のような香りがした。これは夜着にかかっていた香りと同じだった。

「そなたは若いので乳香だけを纏うより、少し爽やかである香りが入っている方がよい。蜜柑と同じ種の香油を混ぜてみた。どうじゃ少し軽くなつたであろう？ 香木では出せぬ香りだ」

「いい香りです」

香油のことを聞きたくてたまらなかった。が、それ以上に月島に髪

を触ってもらう感触が心地よく、うつとりした感覚に浸ってしまっ
た。

「大体こんなものか。触れてみよ」

手入れが終わったのを確かめさせる為、静山に髪の状態を確認させ
た。

「柔らかくてしっとりで……それでいてさらさらしています」

適度な水分、油分、自然な手触り。

このような髪の状態は初めてだった。

『なんて月島さまの知識と技術はすごいのだろう』

静山は改めて月島という人物に強く惹かれた。

月島は何度も髪を広げては、手を離し髪の上に空気を入れた。

羽毛のように、髪がふわりと微かに頬にあたる。鼻腔の奥にはうつ
とりする香。

それは官能的であり、空気から体全体を愛撫されているような感じ
であった。

「上様は、お気に召すと思うぞ」

月島は慈しむように言った。

その言葉が静山を現実に戻した。

一瞬、沈黙が降りた。

「静山？」

一点を見つめたまま固まってしまった静山は、状況を理解しようと
していた。

「はい。わたくしの為に月島さま自ら、しつらえてくださりお礼のしようもございません。精一杯お役目、務めさせていただきます」
深々と頭を下げた。

月島に会うといつも調子が崩れてしまう。お役目を忘れて自分に戻ってしまいそうになるのだ。そのギャップに心が分裂しそうだった。

將軍の閨ねやとは完全に開かれたものだった。

同衾どうきんする女人と將軍の両脇おしきには、御伽坊主おとぎぼうずと他の御中臈おちゅうろうが控え、常にふたりの情交・会話を聞き、次日に御年寄に報告する義務があった。御伽坊主とは剃髪した女の坊主のことである。

それだけでない。

隣の御下段の間では、また他の御中臈と御年寄が宿直として寝ていたのである。

そんな中、將軍・家賢いえよしは御小座敷にゆっくりと入ってきた。
御下段の間（寢室の手前の部屋）で頭を下げている月島を見て、家賢は一瞬ぎよっとした。

静山の後見でもある月島がいるのは当然であるし、他の日も何度も宿直をしてきたのも分かっている。
しかし、今日だけは居てもらいたく無かったのだ。

「……………」

家賢は御上段の間に入った。

「顔をあげよ」

白い夜着に着替えた静山は、静かに面をあげた。
その名の通り、夜に冴える静かな湖のような表情だった。

美しい。

だが、それだけではない。

体の奥底、いや、もっと根源的なものから発せられる、熱いものが
静山にはあった。

意思の強さなのか、情熱的な感性なのか、聡明なる意欲なのか。す
べてのものがないまぜとなり存在感を感じさせていたのだ。

「落ち着いておるの」

「とんでもございません。喜びで胸がいっぱいでございます」

家賢は静山の髪に手を入れた。

そのまま、裾に手をすべらせる。

「完璧じゃ……」

囁くような小さな声で家賢はつぶやいた。
ふたりとも思っていることは同じだった。

「そなたのようなおなごの心を射止める者とは、どのような人間で
あろうの」

静山の表情が一瞬だけ崩れた。

「例え將軍といえど、人の心までは好きに出来ぬ」
そのまま家賢は静山の横に腰を下ろした。

「人間には質というものがある。身分には全く関係なく生まれつき
備わっている質は、どうあがいたとて手に入らぬのだ。無い者にと

つては眩しい程に心惹かれるのに、自分を顧みて、その差に愕然とさせられる」

表情は変わらなかったが、家賢の胸から張り裂けるような思いが伝わってきた。

「静山、そなたは余と質が違ふのだ。うまく言えぬがその「上様」

静山はさえぎった。

「何を仰せにございます。ほんの小娘ごときに、天下の將軍さまが劣るなどありようもございませぬ。いいえ、例え將軍さまでなからうと家賢さまは聡明で努力家で心の綺麗な方だとわたくしは思っております。質が誰かに劣る、などと、幻想でござりまする」

ああ、月島さまならもつと気の効いた事が言えるのに、静山は齒がゆかった。

だが、家賢は驚いた子供のような顔を見ると、じつと静山の顔を見た。

「そのような事を言われたのは、初めてだしばらく沈黙が降りた。

「武家の男子は強うあること、聡うあること、御家を栄えさせること、を旨としておるので、心が綺麗であることに大きな価値があるなど気づかなんだ」

「辞氣を出して、斯に鄙倍に遠ざかる。見ていれば分かります。上様が人を誹謗中傷されたり悪し様に言われたりするのを聞いたことはありません」

「それは徳であるのであろうか。ただの意気地なしではないのか」
「いいえ。もしそうであるなら曾子が間違っていることになります」

「はははっ。言うの」

静山も笑った。

そのまま家賢は静山を引き寄せた。

家賢の緊張が解けた空気が感ぜられた。

「久しぶりに心が温こった。礼を申すぞ」
ゆっくりと静山はうなずいた。

家賢の影がしずかに静山に重なった。

隣の部屋では月島が、まんじりともせず二人の会話を聞いていた。

異国と時期將軍

冬至が過ぎると大奥は、ほつとできる時期となる。

あと半月もすると、年末のすす払い、畳換えなどバタバタと忙しい行事に突入する。

冬の高い空と、黒い厚い雲が北風に、どんどんと流される日のことであつた。

月島は遊玄からの手紙を読んでいた。

？先日預かりし物、本性にて候？
と、一言だけであつた。

『やはり……京おしろいで間違いなかつたか。では、なぜつくば屋なる小間物屋から、わざわざ物を買つた？ 何かあるはずだ』

「月島さま、佐賀藩主、鍋島斉正さまがおいでになつたそうでございます」

墨越が控えから声をかけた。

「分かつた。すぐに行く」と申し伝えよ」

鍋島斉正は当時の藩主としては機才で、藩学校を作つたり、自ら蘭学を学んでは蘭癖大名と呼ばれるような人物であつた。

佐賀という土地柄から外国との交易の重要性も早くから熟知しており、幕末に向かい近代化に向かい大きな役割を果たしていくのだが、それはもつと先の話である。

月島と知り合ったのは、斉正が藩主をついで五、六年たった頃であつた。

蘭学好きな月島を喜ばせようと家賢いえよしが、斉正に会わせたのである。

それ以来、気が合ったふたりは時折文を交換し、お互いに何かと情報を手に入れては、国の安否を憂うといったことまで書きつらねていた。

「斉正さま、お久しぶりでございます。ご健勝であられましたか」

役人らと会談する御広座敷は、いやに暑かった。囲炉裏が、過剰に置いてあつたからだ。

「ん。月島どの、久方ぶりじゃの。いや相変わらず美しい」
が、少し痩せたようだと、言おうとして止めた。そんなことは月島が一番分かっているはず。大奥御年寄ともあろう立場、気苦労が多くない訳がない。

藩主を継いで十一年。斉正は二十八歳。

少し細めの切れ長な目、ハの字の眉がどこか可愛らしさを感じさせた。

すつと伸びた鼻と顎の形は、育ちのよい品のよさを現していた。

だが、この凡庸な外見とは裏腹に、その中味は明晰で鋭利であることを月島は誰よりも知っていた。

「これからわしは国元に帰り申す。その前に年末の挨拶を兼ねての、月島どのの顔を見ておこうと思つたのじゃ」

「それは、それは。このようなばの顔を見てとは、ご酔狂な。道

中、どうぞお氣をつけくださりませ」

「ばばなど、思ってもみぬことを」

斉正は大仰に笑った。

それより、と斉正は周りを見渡して、声を潜めた。

その真剣さと空気を感じて、月島は立ち上がって斉正に近づいた。

「いま大奥で家賢さまの、ご寵愛を一身に受けられているのは、靜山どのというお方であり、その靜山どのが月島どの付きと聞いておるが、確かであろうか？」

「今のところは……そうですが。それが何か」

「いや」

一度斉正は口をつぐんだ。

「お世継ぎの事を何か聞いておらぬか。上様は、家倅さまを、どう思っておられるのか」

月島の顔つきが変わった。

眼光に光が点り、唇がくいつと上がった。

「上様は未だ決めかねておられるようです。お心うちでは家倅さまに継いでいただきたいと思っておられるようですが」

「この状況で、そんな事を言っておれん」

音に出ない声で、斉正は強く言い放った。

冷静な顔で月島は受けた。

この先を続けるよう促す表情であった。

「そなたにも何度か文で書いたが、わが藩近海に、この数年頻繁に

異国船が出没するようになった。昔は幕府との取り決めを守っておったのだが、色々な国の船がやってくるようになって、近頃では横暴なふるまいが頻発しておるのだ。

大型船が漁場を荒らす、勝手に陸に上がり商売をする、地元の者と騒動をおこす、など収集がつかぬ。しかし、最も困っていることは、脅迫めいた大砲を撃つたりすることなのだ」

切れ者で行動家の斉正でさえ憂う自体であることはすぐに理解できた。

「あの力を見せつけられると、この国の武力ではもう全く歯がたたぬ。何でも言う事をきかねばならぬ、と思わされるのだ。……そんな状況を知らず、幕府の者は寝ぼけたことばかり言いおって、真剣に対処しようとせぬのだ。いや、誰ひとり出来ぬ、と言うのが正しいのだが」

斉正の言いたいことは分かった。

「そんなにその大砲とやらはすごいのですか？」

「ああ、大筒の数十倍はあるだろう。それが数十と船に設置され船上から、海へ玉をぶっぱなすのだ。どかーん、海の水が、どばーん！！ と十丈（約30メートル）ほども立ちあがる」
「十丈も？」

「地響きものすごい。地震のようにドドドドと音がしたかと思うと、津波のような波が岸へ押し寄せるのだ。海で一発撃つただけであれだ。あの玉が陸に向かって何発か打たれたら、小さな山など

ひとたまりもあるまい……」

「なんという」

月島は恐ろしさの余り口を手で被った。

そのように恐ろしい破壊道具が存在するとは…… もし、そんなものを使う戦が起これば、この世は地獄ではないか。「ぴすとり」という自動短筒が存在することは知っていたが、大型兵器を実感したのは初めてだった。

暑いはずの御広座敷で、ぶるると月島は震えた。

「どうすればよろしいのか。その事、当然上様はじめ老中もご存知でありましょうが……」

言ったあとで無能な人事を思い月島は首を振った。この難局に対応できる柔軟な頭の者は誰ひとりいなかった。

「してじゃ」

「どうされますか？」

「今、この危機に気づいて真剣に動いておるのは幾つかの藩だけだ。薩摩、長州、水戸、黒川、そしてわが佐賀……」

黒川藩？

月島の中で静山の出身に結びつき何かが琴線に触れた。

「皆、それぞれに幕府に異国船対策を言上しておるが遅々として進まぬ対応に、とうとうしびれを切らしたのだ。暗愚な幕閣連中ではどうにもならん。」

あやつらは異国が攻め込んできたなら、幕府も大奥も藩も、もちろん朝廷さえもなくなってしまふ、という事実を分かっておらんだ」

「幕府も大奥も？」

「朝廷もだ」

齊正は律儀りちぎに追加した。

月島にとっては実感がわかなかった。

連綿と続いてきた、この大和の国が属国になってしまふということが。それはすべての基盤が崩れ去る、ことを意味していた。

「わが日本は神国ですぞ。神風が吹いて蒙古も退散したではありませんか」

「では、なぜ大砲を神風は吹き飛ばしてくださらぬのか」

その通りだ。

東インド会社という組織が、アジアを侵略しつつあり、隣の清国がエゲレスと戦争をして大敗したのを、知っていたはずだ。

日本は大丈夫であろう、などとどうして思えよう。

「では、いったいどうすればよいのです？」

「圧倒的に強い将軍が、とにかく今は必要だ」

月島はうなずいた。

老中や若年寄の言動に翻弄される将軍では困る。
自ら意思を持ち、この難局を乗り越えられる家臣を揃える。

二百年の太平は終わったのだ、とはつきり理解出来る人物が必要であつた。

「田安家の徳川 慶匡よしまささまを推していただきたい」

「田安家の徳川慶匡さま？」

「慶匡さまは、若い頃から全国を放遊されてきた方で見識も広い。学問好きで頭が固いだけの学者かぶれでもない。実践主義者だ。こういった異例の経歴の持ち主でないと、前例のない出来事には対応できぬ」

「慶匡さまは、次期將軍としてのお話、お受けになっているのですか」

「打診はしたが、ご本人は何とも言われぬ。こういったことは危険であるからの。だが、ご本人も外国の脅威は何よりも憂いておられるのだ。実際、異国船や異国人を知っておられるのだ」

思わず「はあ」と、小さなため息をついてしまった月島だった。

今の家賢に自分の言葉が届くかどうか、分からなかったからである。

実際、靜山への寵愛が深いのは確かであつたが、のめり込むのを堪えている、一歩引いて崇めている、といった感があつた。

その上、家倅を押しつけて、田安家の人間を跡目にするなど、家賢の中では論外な話であらう。

『せめて、家倅さまがいなければ、まだ話は可能であるが……』

「月島どの、そなた家倅さまがいなければ、と思ったであろう」
ぎくりとする月島に、再び声を潜めて斉正は迫った。

「そう、憂うな」

斉正はにやりと笑った。

何か手を打ってあると言うことだと、月島にはすぐに分かった。

恐ろしい男。なんという切れ者であろうか。

「家倅さま以外の方が跡目となられたとて、上様がご隠居されるとはまず思えませぬ」

「それは、その時よ」

月島は気が抜けた。

さんざん脅かしておいてこうだ。

しかし、確かに時期將軍の決定のほうで、すでに將軍となっている家賢よりも大事な点ではある。

「そなたは頭もよいうえ、やり手である。ここまでの話を聞いておれば、どう動くはそちらにお任せする。家倅さまのことは、こちらで何とかするゆえお気に召されるな」

「そんな言葉だけでは、あまりに勝手にござりまする。それではこちらはどこまで上様に言上申し上げたらいいか、一向に分かりませぬ」

「いいや、そなたは分かっておられるはずじゃ。……時期じゃ。時

期をみて、そなたは上手に上様のお心を動かされるよう動けるはず。お願いじゃ、この日本がこのままでは異国の属国にされてしまうのだ」

それは月島にもとつても、じつとしていられない事実だった。

「分かりました。何とかできることからやってみますゆえ」

「頼みましたぞ」

心からホッとした様子で、斉正は破顔した。

「ああ、忘れておった。こちら、月島さま御用達、三条屋から仕入れた化粧品と、長崎より仕入れた香油をお持ちした。これで、いっそう美貌に研きをかけてくだされ。あまりに美しくなったら、もうわしなどにはお会いしてくれぬかもしれぬので、そこそこにしてくだされ」

三条屋の化粧品、月島専用の粘土おしろいは特注品である。

また、香油は珍物で、外国から取り寄せないければならない。

細かに好みを調べてみやげにするなど、斉正は女の心を掴む腕も一級であった。

反面、美しさに磨きをかける道具、つまり月島を通じて静山にもたらされるはずということが分かり、任務の重責も感じた。

「かすていら、も沢山お持ちしたゆえ、部屋の皆で分けてくだされ。そして何よりプリムローズ」

そう言つて斉正は手を叩いた。

控えから、御付きの者が桃色鮮やかな花が咲いている鉢を持ってきた。

「これは南蛮でプリムローズと呼ばれる、さくら草の一種だそうだ。この鮮やかさと華麗さは、艶やかな月島どのに、一等似合うと思うての。お持ちしたのじゃ」

「これは何と美しい…」

薔薇に似た中ぶりのプリムローズが、鉢に可憐に咲いていた。南蛮風に艶やかで華麗であつたが、どこか品があつた。

「今日いただいた中で、最も嬉しゅうございます。心が満たされます」

「その花だけは、純粹にわしの気持ちじゃ。すまぬの…」

少し頭を掻きながら照れる様子が、斉正の憎めないところだつた。

『全く得な性分のお方じゃ』

月島は素直にこの斉正の均衡感覚が好きだつた。

『これからの人間はこうでなければならぬ。人を動かすのは何より心が大事だ。こういったお方がいる限り、まだまだ日本も捨てたものでない。暗い側面ばかり考えるのは止めよう』

不意の縫合術

鍋島斉正にもらったカステラを部屋子たちは、きゃっきゃっと喜んで食べていた。

静山の部屋子も呼んだので、いま、隣の静山の部屋は無人のはずである。隠し物を調べるのにいい好機だ。

密かに自室をでた月島は、静山の部屋に向かった。

「ん？」

今誰かが静山の部屋に入っていたように見えた。

かいどろ
掻取を着ていなかったので、御端下の者であるように思えた。

『手癖の悪い御犬であるうか』

障子の隙間から覗くと、やはり棚のあたりを探っている。

がらり！

月島は障子を開け放った。

「そなた、ここで何をしていやる！」

「はっ」

息を飲んで見返しているのは御末とおぼしき少女。

年は十七、八といった所であろうか。

「そなたどこの」

そこまで言いかけて月島は棚の先にあるものを見て驚愕した。

小物を入れておく小箆筥。

その前部分が、そっくりそのまま引き上げる形で開け放たれていた

のだ。

各段ごと引いて開閉は出来ない。つまり、カラクリ細工の小箆筥であった。開け放たれた小箆筥の中身は棚があり、懐紙に包まれたものが沢山入っていた。

『こんな所に隠してあったのか！』

少女は何かをぎりりと考えているようであったが、一瞬のうちに懐から懐剣を出した。

「見られたからには、仕方ありません」

「誰かつ！」

月島が叫んだと同時に少女は月島に襲いかかった。

一撃目はかわした。
しゅん！

そのまま、横に懐剣が振り回される。
避ける。

少女は攻撃を止めない。

「ああっ」

懐剣を避けきれないと思った。

その瞬間。

動きが止まった。

静山が。前に…いた。

少女は起こった出来事が理解できないまま目を見開いていた。

「おけがはございませんか？」

静山は月島の肩に手を置いた体勢で優しく微笑んだ。

「あああ、あかりさまっ」

「騒ぐでない山吹」

低い声で静山が凄んだ。

「この方を傷つけることは許しません」

山吹と呼ばれた少女と月島は茫然とするしかかった。静山は左手を背中にまわし刺さった懐剣を確かめた。刺さった部位の下側を静山は押さえた。

「静山……」

「大丈夫です」

痛みをこらえながら静山は荒い息をした。

「障子を閉めてください、月島さま」

恐慌状態であったが、月島は言われた通り人影を確かめ障子を閉めた。

「山吹、まっすぐにゆつくりと懐剣をぬいて」

「でも」

「大丈夫だから。そんなに深く刺さっていない。……それと布」
「布か」

月島は部屋の和箆笥に駆け寄った。血、血を止めたり拭いたりできるサラシ……か何か……

ない。風呂敷があつたので数枚手に取って戻った。

「月島さま、山吹が懐剣を抜いたと同時に、傷口を布でしっかりと押さえてください」

「わかった」

山吹が懐剣を抜くと同時に静山はグツと腹筋に力を込めた。
「うつつ」

力を入れたのは出血を抑えるためであつたが、みるみる打ち掛けは血で染まつた。

「だめじゃ静山、御匙医おさじいを呼ぼう」 *御匙医：大奥づきの医者
風呂敷で押さえていた月島は半泣きになりながら叫んだ。

「いけません。もっと強くもっと強く押さえてください！ 山吹、蒲黄ほうおうを布に塗って、それを傷口に当てて！」
「はいっ」

先ほどのカラクリ筆筥に走ると、山吹は一つの懐紙を取り出した。筆筥からはみ出ていた腰巻を裂くと、懐紙に包んであつた黄色の粉を塗りだした。

「横になるのじゃ」
立ったままで押さえているのは困難であり体力の消耗も激しい。

「その前に搔取と帯を解き、傷口あたりの衣服を切ってください」
「分かった」
傷は左のわき腹、少し背中にまわったところから斜めに六分（約1・8cm）ほどあつた。どうやら帯が防いでくれたらしい。

想定よりも小さな傷口だったので、三人とも少し冷静さを取り戻した。蒲黄が塗られた布をどんどん交換し圧迫し続けた。

山吹があて布をつくり、月島がそれを受け取って押さえるというのを何度も繰り返す。

「山吹、傷の深さはどのくらい？」

「恐らく五、六分（約1・8cm）」

動くとすぐに傷口が開く状態であるのが靜山には分かった。蒲黄の圧迫止血で流れ出るような出血は止まったが、じわじわと出る出血は続いていた。

「靜山、冷水で回りを冷やすのはどうだ？」

月島が急に思い出したように言った。

「いいと思います。怪我をした時、冷たい水でぬぐいで冷やしますので」

「すぐに取りつてまいるゆえ」

月島は圧迫を山吹にゆずると、立ち上がって部屋を出ていこうとした。

が、不意に思い出したようにカラクリ筆筒に向かうと開いていた扉を閉め、そのまま急いで部屋を出ていった。

数個のタライとてぬぐい、大量の紙とサラシ、海綿を月島は用意した。

医者もよほど呼びたかったのだが、靜山の意味を汲み、なんとか思いとどまった。

しかし、人手はどうしても必要だった。
信用のおける墨越とおまつだけは、口止めをし、静山の部屋へ伴わせた。

「なんとということ……」

墨越は部屋に入るなり顔色を変えた。

「うろたえるでない。おまつ、次の間にふとんの用意を。あとで大きな油紙を持ってきてたもれ。ふとんを敷いたら、ここの畳の掃除を」

「はい」

表の間は血で汚れていた。すでに黒く乾いていたので完全には落ちないだろう。

「墨越、静山を奥に運ぶのを手伝ってたも」

「分かりました」

静山を動かすと、傷口からまた血が吹き出てきた。白くなっていた顔色をみると月島はいても立っていられなくなった。

「静山、このままでは死んでしまう、御匙おさじ医いを呼ぼう。皆には分からないようにするから」

「こんな事くらいで死にませぬ。わたしは野山育ちです。大きなケガも沢山してきました。大丈夫です」

静山は薄く笑った。

「ですが……ちょっと試してみてもいいかもしれませぬ」

「何を試すのだ？」

「縫う、のです」

「縫う？」

「傷口を、お裁縫のようにざくざくつと縫えば血が止まるとか」
半分楽しそうに口に出した。

山吹、月島、墨越は顔を見合わせた。静山が混乱のため気が触れたのかと、誰もが思った。

「何をふざけた事を……」

「南蛮かぶれの月島さまでも、ご存知ないのですね。紅夷外科宗伝には、傷口を酒で洗い、そのあと木綿の糸で傷口を縫ってから軟膏を塗るように書いてあります。」

強い焼酎を用意してください。そして針と木綿糸も。ああ、一応白糸で御願います」

静山は笑った。

「そ、そのような事、本気で申しておるのか」

「月島さまは、お裁縫はお得意ではございませんか」

「静山！」

しかし静山の瞳には強い意志が宿っていた。

「月島さま、お願いします。これはあなたさまにしか出来ません」

それは啓示ともいえる、絶対の信頼感だった。？月島には出来る？という。論理的な理由は全くなかったが、なぜか確信していた。

月島は目を閉じた。傷口を思い出す。

「中の肉はどうする」

「どう、思いになりますか？」

「思うに、表の傷口でなく、奥のほうも裂けておつたように見た。そうになると、一段下の肉も一、二針縫うたがよいやもしれぬ。ただし、細い糸と針でじゃ。木綿よりも絹糸のほうがよい気がする」
「では、そのようにお願いします」

「奥を縫うとき、一旦傷がまた開くぞ。そのうえ、開いたままにしておく必要がある。そう、箸か何かで押さえておく人がいる」

「山吹、お願い」

「分かりました」

「表の傷は木綿糸とするがよいのか」

「たしか、そのように書いてございました。……そうです、確か抜糸をするのです」

「抜糸？」

「はい、幾日かして傷が癒えたら糸だけ抜くのだそうです」

「そのような事が可能であるのか」

「ふふふ、また調べてください」

月島は覚悟を決めた。言われたものを用意し、手燭、行灯、囲炉裏を五つほど仕入れた。

「これで、終わりじゃ」

木綿糸を玉留めし鋏で糸を切った。

静山は処置中、一言も声を漏らさなかった。

『なんという精神力』

手燭をかざしていた墨越は靜山と月島のふたりを見て驚きを隠せなかった。

「血が出てきません」

縫合した皮膚を焼酎で拭いていた山吹が嬉しそうに声を上げた。軟膏がないので靜山が持っていたドクダミと馬油をまぜ塗布しサラシを巻いた。

「よう頑張った靜山。もう寝るのじゃ」

「痛うて眠れませぬ。月島さまこそ、早うお休みくださいませ」

「……痛み止めは、あるのか」

「山吹に出してもらいます。もうお部屋にお戻りください」

「分かった。……山吹とやら、そなた御末か」

「はい……」

「では、御末部屋にそなたは今日より靜山の部屋子になったと伝えておくゆえ、ここで靜山を看るのじゃ」

山吹は一瞬驚いた顔をしたが「はい」と答えた。

「墨越、今夜はおまつをここへ泊ませ、何かあればすぐにわたしの部屋に報告するよう申し伝えておくれ」

「承知いたしました」

縁側へ出ると雨が降っていた。なんと寒いはずだ。

少し血に酔った体には、その冷たい空気が心地よかった。

——とにかく、今夜はもうゆっくり休みたい——

異常な緊張が解けた為か、感じるのはひどい疲労だった。月島は自分の部屋へ倒れこむようにして入った。

隠された才能

「困ったの」

万里小路は月島の報告を聞いてため息をついた。

「当分、上様には靜山はひどい風邪をひいたとお伝えください」

「しかし傷跡はどうしますん？」

「考えたのですが、灸が失敗したとするのは、どうでしょう？ ひどい火傷を起こした為、傷が残ったことにするのです。御床は暗いですし、そう分らないと思います」

「分かる分からへんの問題やあらへん。上さんのお氣入りの女人に傷がついた、ということが問題や。わたしらにも責任がかかってきます」

万里小路が強い口調で言った。

「そんなもの、黙っていれば分からないではありませんせぬか」
きつぱりした月島の口調に、万里小路は一瞬ぎよつとした。

「ほんに、傷は分からへんのか？ 懷剣で刺した傷やろ」

「見た限り、上手くいけばかなりきれいに治るでしょう。それに大体、上様はわき腹の後ろまで熱心に触られる方ではございませぬゆえ」

月島はくくくと笑った。

自慢なのか家賢への嘲笑なのか万里小路への嫌味なのか、区別のつかない発言に万里小路は顔をしかめた。

「あんたが言うんやったら間違いないやろ。そっちに任せるさかい。ほんに、せっかく上さんの寵愛が向いてきたゆうのに運の悪い。村岡んとこの笹野とかゆー娘が最近ちよろちよろしてかなわん」
笹野は年寄の村岡が呼び寄せた、若い部屋子であった。

「村岡の姪とか言うてるけど、まあうそやろ。証拠に村岡にちいとも似ておらん。けど、そんな事はどうでもええ。あの笹野とかいう娘自身が問題じゃ」

「はい。男好きする美人でございます。肉づきが良くなかなかそそられます」

「こつちが天女風やと思つて、そつちできおつたわ」

「もう少しでしたね」

楽しそうな月島に万里小路は不審がつた。

「なにが、もう少しや」

「ご存知ないのですか」

「だから、何がや」

「静山は御床も達者です。笹野がどういった素性の者かは分かりませんが、その気になれば上様の体を望外に喜ばすのも、さほど難しいものではありません。単にそうしなかったのは上様がそれほどお若くないのと、それをそれほど望まれていない、と考えたからですよ」

何という自信。

自分の部屋づきが負けるはずがないと思つてゐるのだ。

「そら、あんたが御床の作法まで教えたら、他の者は勝たれへんや

るな」

「わたくしは、そのような事いたしません。静山のことはわたくしより万里小路さまの方がご存知なはず」

万里小路はぐっとなった。

女しのびが特殊な体の技術を持っているとは聞いていた。

それが、あの静山だとしても実感できなかったのに、月島には分かったのだ。

「風邪は止めて、貧血がひどい事にしましょう」

「は？」

「本当に出血しましたし。静山は血が少ない病。そのため少しの間床入りはむずかしい、としましょう。うまくいけば上様の情けもひけますゆえ。美人薄命は世のならいでありますし」

「何という」

もはや口が出せなかった。

「それより万里小路さま、今回の件に関しては大きな貸しでございますよ」

自分が殺されかけたこと、と、静山の素性を知っている万里小路に対する牽制だった。

はあ、と万里小路はまたため息をついた。

「分かってる。で、何が望みや」

「しばらくはわたくしの好きにさせてもらいますゆえ、お目こぼしを」

「どうせ好きにしてるやないの。それだけでええんか」
「もちろんにございます」
艶やかに笑うと月島は頭を下げた。

可憐なプリムローズが一輪、枯れかかっていた。
山のような見舞いの品に埋もれながら、静山は物憂げだった。

「上様のおなりでございます」
その言葉のすぐ後に家賢が静山の部屋に現れた。ふとんから身を起こし立ち上がりうとした静山に「よい、よい、そのまま」と家賢はたしなめた。後ろには月島らが付き従っていた。

「どうじゃ？ 様子は」
「はい。おかげさまで少しよくなったように思います」

「うん、まだ顔色が幾分白い。御匙医は色の濃い野菜や動物の肝を食べれば元気になると言っておったぞ。食べておるか」

「上様、静山どのは苦手な肝も頑張ってお食べになっております。ほんに素直な方でございます」
月島が口をはさんだ。

「ふふふ、怖い御年寄が付いておれば食べぬとは言えまい」
「上様」
とがめる言葉と同時に月島は笑った。

家賢は口端だけあげ静かに微笑んだ後、尋ねた。
「静山、何か欲しいものはないか？ すぐに用意させるぞ」

「いいえ、上様からは、もう沢山お見舞いの品をいただいております」

「では、何か芸でもさせようかの」

「いいえ」

首を振っていただけの静山の目に不意に意思が宿った。

「……どうした？」

「……月島さまの舞いが見たいのです」

一斉に皆の目が月島に注がれた。

狼狽したのは家賢だった。

「月島？」

凍りついた表情をしていた月島は口を開いた。

「何を言うのです。わたくしは踊子ではありませんぞ」

「静山、踊りが見たいのであったら踊り師匠に舞わせようぞ。そうじゃ、囃子方も一流をそろえよう」

「いいえ」

震えるように静山は目を閉じた。

「失礼なことを申し上げました。踊りは結構にございます」

静山は深々と頭を下げた。

どう言っていていいか分からなくなった家賢は、また来ると残し、部屋を後にした。

—どうして静山は月島の舞いが素晴らしいということを知っている

のだろう。どこぞで聞いたのか――
家賢は忘れていた胸の痛みを思い出した。

そう、月島は軽やかに、情熱的に……また叙情をたたえ、陽気で、
艶やかに舞った。

あまり感情や欲求を持たないように見える月島が、舞を舞っている
時だけは別人のように生き生きしていた。

御三の間にいた月島が、家賢の目に止まったのはその舞の才ゆえだ
った。

＊御三の間……武家の子女の勤める一番下クラス、掃除
や雑用、踊りなども披露した。

格式ある踊り元などに言わせると型破りが過ぎると不評であつたが、
誰が見てもその活力には惹きつけられた。そんな舞手だった。

探り

「上様？」

ぼうつとしていた家賢は、自分を覗き込んでいる藍色の瞳に引き込まれた。

月島だ。大奥女中は將軍を部屋まで見送るのが礼儀だった。

「どうされました？ ご気分がすぐれませんか」

「……」

甘やかで懐かしい香が、月島の肌の下から漂った。
不意に家賢の中で何かがはじけた。

月島の手首を掴むと、自分の御子座敷まで一気に連れ込んだ。

「誰も来るな」

月島部屋の女たちは動揺していたが、それ以上は追ってこなかった。

急くように月島の着物を脱がすと、畳の上で全身をまさぐり吸いあげた。

よほど飢えていたのか事が終わるのに数刻もかからなかったが、それで終わりではなかった。何度も何度も求められ、とうとう月島は氣を失ってしまった。

ふっと気付いたときは、家賢の腕の中だった。

「気付いたか」

「うえさま？」

「大丈夫か……もう少しで御匙医を呼ぶところだった」

「大丈夫でございます」

御匙医と呼ばれると、他の御年寄の耳にもはいる。それは嫌だった。肌襦袢をはおりながら不意に今、自分と家賢が二人きりであるのに気付いた。

『そうだ、今なら聞きたいことが聞ける』

月島はふわりと家賢を後ろから抱きしめ、囁いた。

「上様、最近わたくし新しい御札を手にいれましたので何か祈^{きとつ}祷しようと思っております。何かよい願いごとはございませんか。大変によく効く御札だそうです」

「そなたが言う御札なら、よく効きそうであるな」
会話の間も月島は家賢の頬を指先で愛撫する。

「はい、大変によく効くと評判にございます。特にまつりごとに最適だと言われておりますが、わたくしは上様の健康をご祈願するのがよいと思っていますのです」

「健康はもう十分に他でやってもらっておる。それより、そのようなことをされると……」

家賢に再び月島の体を触れつつ戯れた。月島はそのまま話しを進める。いつも味気ないセックスをさせられている家賢は、自由になつて気も大きくなっていたのか、ついに口をすべらせた。

「じつはオランダ国王より国書がとどいての」

「国書？」

「そうなのだ。それが困った内容で……そうじゃ、そなたの意見を聞けばよかったのじゃ」

家賢は小姓を呼ぶと、さっさと国書を取りにやらせた。

蘭語から訳された内容を読んで月島はうなった。

それは世界情勢を説き、鎖国政策を廃止することが得策であると述べられており、開国を勧める内容だった。

「異国は蒸気船を作る技術を持っている、とありますが、船にも動力がついてあるということでしょうか。わたくし、蒸気機関車という鉄の車が走っている絵は見たことがあります、船は知りませんでした」

「鉄の車の絵こそなぜすぐに余に見せなかった」

「本物か空想画が分かりませんでした。まさか、そのような鉄の車が存在するなど。後で上様にはお持ちいたします。ええっと、開国について、でござりますね。蒸気船が本当であれば」

「蒸気船は本当だ。ただ、清国をやぶった話や、植民地の拡大云々はどうも話が大げさに書いてあると、老中たちは言うのだ」

「そうでしょうか。ずっと交易してきた蘭国が、今更大げさに書く理由があるでしょうか。しかも国王直筆です」

「それが問題なのよ。あちらに返答せねばならぬ」

「開国の勧め、あくまで勧めですので、お茶を濁しておくことは可能でしょう。本題は強い将軍がしっかりと国をまとめていけるかどうかです」

「では強い将軍とはどのようにするべきか」

「まずは国の防衛力をあげるべきかと。しかし、そういった新しい政策は必ず古い体制に阻まれ進みません」

「そうじゃ、そのとおり。金がないの、前代未聞だの遅々として進まぬ」

「ですので、しっかりと上様の意見を通すことが必要になってきましよう。それに、お世継ぎ体制も整えておかれることが大事かと。今後の幕府は異国問題を避けて通れませぬゆえ、お世継ぎの方にも異国対策を十分に学んでいただかねばなりません」

「はあ、それが問題じゃ」

憂鬱そうに家賢は顔をそらした。家俵が出来ないことは分かりきっていたのである。

「月島、そなたが子を生んでくれたなら家俵の跡目は形ばかりにして、その子を家俵の養子とし跡継ぎにする。そなたが産んでくれた子なら聡いに違いあるまい」

「力不足で申し訳ございません」

月島は深々と頭を垂れた。

「もう少し頑張ってくれぬか」

それは床入りをせよ、との意味である。しかし年寄りである自ら規則を破るわけにはいかない。それは家賢とて分かっていた。

月島は申し訳なさそうに目を伏せた。

「まあよい。今回の懷妊することも考えられるのでな」

「上様、そのように悠長にしておられませぬ」

「余とて……分からぬのじゃ。異国対策など、どこにも教えもない。周りのものは口を揃えて鎖国することが祖法だと言う。少数の変人

とも言われるものだけが開国を勧めている。これでは、鎖国でいくしかないであろう」

「少数の変人ではありませぬ。幾つかの藩主は開国も念頭においておりまする」

「そなたは開国派なのか」

「いいえ。開国すれば恐らく国は大混乱に陥るでしょう」

「では鎖国でいくのだな。」

「……はい。ですが、出来るだけ防衛力を高めるよう力をそそがねば」

「分かっておる」

完全に今までどおり鎖国でいけるとは思えなかったが、家賢にはこの意見が限界だろう。

結局、世継ぎのこともあれ以上は言えなかった。

『この先は鍋島斉正の動きを見てからでも遅くない（つまり暗殺計画）』

そんな恐ろしいことを考えつつある月島を家賢は抱きしめてきた。ゆっくりと揺らしながら甘えるように口を開いた。

「むずかしいことはもうよい。せつかくそなたと居るのだから。何か膳でもこちらに運ばせようぞ」

「上様ご注文すると、やってくるまでに半時はかかってしまいま

す。わたくしの部屋に用意させましょう」

月島は妖艶に笑った。

それぞれの役目

「よかった、それほど傷は分からぬようだ」

抜糸を終えた月島は、うつぶしている静山の背中 of 傷を確認した。

「……………」

「どうした？」

「傷など治らなくてもいいのです」

月島は目を見開いた。

側で片付けをしていた山吹やおまつの動きも止まった。

「何を言う」

「わたくしが傷ものになったら、月島さまの経歴にも傷がつきますか」

少し黙りこんだ後、月島は静山の体に静かに襦袢はちまきを掛けた。

「なぜ無言なのです。なぜわたくしをお避けになるのです。ややこしい女だからもう係わり合いになりたくないのですか。目も合わせてください。…それならいつここから追い出してくださいませ」

静山は今にも涙がこぼれそうな目で、きつと月島を見あげた。

おまつはちらりと月島を見ると、山吹を連れて部屋を出て行った。

しばらく無言で座っていた月島は小さく息を吐いた。
「すまぬ、わたくしが悪いのじゃ」

確かに事件以来、月島は靜山を遠ざけていた。カラクリ棚や山吹の存在を知ってしまつてから、どのように扱つてよいのか分からなかったのだ。怪しい女人が家賢の寵愛も深いということも、年寄りとしては混乱する。

それ以上に別の気持ちもあった。

「わたくしは自分の気持ちが分からぬ。そなたに対してどう接していいかも分からぬ。こんな思いは初めてだ。そなたを愛しく思う気持ちとそれを齒止めしなければならぬ、という思い、それがないまぜになつておる」

靜山は襟元を持つたまま少し顔をあげた。

愛しく思う気持ち？

その言葉に靜山の心は高鳴った。

「本当にござりまするか？」

「本当じゃ。だから困るのじゃ」

「わたしは困りません。お慕いしてるのです」

靜山は襦袢を跳ね除けて、月島の腰に抱きついた。みずみずしい肌が露出した。

「いたっ！」

月島は顔をしかめた。

「月島さま？」

異変に顔をあげる。下腹部に何かあったようだ。

「す、すまぬ。……少しどいてくりやれ」

月島は苦笑いして、靜山の頭をやさしく撫ぜた。

じつと観察するような目で見ていた靜山は、上半身裸のまま驚くべき速さで起き上がった。

「失礼いたします！」

言うが早いか、あつという間に手は月島の裾を割って、恥骨や秘部のあたりを確かめた。信じられない非礼に月島はしばらく何が起こったか理解できなかった。

「何をするのじゃ！ やめよ」

「これは……」

手についたのは血の混じった帯下たいげだった。

* 帯下＝お

りもののこと

「いつからですか。御匙医には見せたのですか？」

語気も荒く靜山はせまった。

「……二日ほど前からじゃ。すぐ治る」

必死で秘部を隠しながら後ずさった。

「いけません。放置しておいたら」

「交わったあとはいつもなのだ」

「え」

観念したように月島は打ち明けた。

「上様に所望されたのじゃ」

静山にはすぐに理解できなかったが、部屋子たちがなんとなく様子がおかしかったことを思い出した。

「本当は辞退せねばならぬ立場なのに、大きな声で言えぬ」

何だか静山は悲しくなってきた。

月島の体では、床の相手をすることは無理なのだ。奥の仕事の総責任のうえ、夜の相手までは荷重すぎた。

「お願いでございます。わたくしの薬を使ってくださいませ。きつとよくなりますゆえ」

「ん……」

静山の薬は信頼していたのか、月島はすぐにうなずいた。

「もう、あまり無茶はしないでくださりませ。わたくしから上様に申し上げます」

「それはダメじゃ」

「いいえ。体を壊しては元も子ありません」

「体を壊してでも、しなければならぬこともあるのだ」

「それは何ですか」

「それは……大きな願いのため」

「大きな願い？」

「それは、そなたにとっての？お役目？と同じようなものかもしれ

ぬ

——お役目——

裳羽服津である身。静山にもその重さは分かっていた。そう。水み戸となりあき為昭に命を賭してもやりとげる、と誓ってきたのだから。

「だから、上様にはだまっておいてくれ」

じつと見つめ合うしかなかった。不承な気持ちであつたが、月島の言うことは分かった。しかし、月島のいう大きな願いが何かは想像できない。

「分かりました……」

そのまま着物でくるむように月島を抱きしめた。

「もう少しこのままでいさせてください」
大切に包んで癒したかった。

月島はいいようなない安心感をじつと感じていた。重い鎧が無くなつていくような感覚だった。

静山には、なぜかすべてをあずけられる気がした。

魂の片割れのように。

月に舞う

数日後、江戸城に激震が走った。

家賢の跡継ぎ、家倅が倒れたのだ。御匙医の見立てでは毒物を飲まされたのではないかと言うことだったが、依然として詳しいことは不明であった。

母親であるお美津の方は半狂乱となり寝込んでしまった。大奥では華やかなしいことは一切禁止となり祈祷の日々が続いた。

家賢の奥泊まりも当分はないとのことであった。

静山は夜の庭で池に映る月を見ていた。

今回の事件に龍才たちが関わっているような気がして胸騒ぎを押さえることが出来なかったのである。大奥に上がってから裳羽服津衆たちからの文はいつさいなかった。

水戸からの指示として、寵愛を受けよ、との大まかな指令がくるものの、手紙はこちらからの一方通行がほとんどである。

大きな海に一人放り出されたような気分だった。家族もなく、情報もなく、不安なまま、誰も知らない場所で囲われたまま一生過ごすこと。

―なんとつらく孤独であろう―

皆、このような思いをしているのだろうか。お宿下がりが叶わぬ者たちは、だからあれほど上様の寵愛を競い、贅沢をし権力を欲し、人を貶めずにいられないのだろうか。

静山は胸元から笛を出した。唯一、母からもらった形見だった。唇に当てると息を吹きいれた。中音から始め旋律を奏ではじめた。

もの悲しげな音色に入り込む静山―あかりは目を閉じた。冷たく澄んだ空気にのせて、どこまでも笛の音はしみいった。

―いまだけは…… いまだけはこの音色と共にいよう―

笛に入りこんでどのくらいたつたろう。

不意に気配を感じて静山は振り返った。月明かりの中に髪を下ろした月島が立っていた。

「なんとという美しく悲しい音色じゃ」

「……」

「心が苦しいくらいに震えた。そなた、笛ふきか」

静山は少し目を伏せた。

「そなたわたしが舞えるとなぜ分かった」

「中指に扇の指だこがあります。それほどになるには毎日、相應の練習をなされていなければなりません」

バサッ。

月島は持っていた扇を広げた。銀地に金の月がかかった舞扇だっ

た。

「わたしに合わせられるか？」

そのまま月島は扇を返すと腕を前に出し構えた。

「お身体は……」

月島は答えず、視線を固定し舞いに入る気を放った。静山は、その気に引き込まれたまま月島の姿を見据え、笛に息を入れた。

能「松風」の一場面の形から入った舞は、どんどん形を変えた。羽のように空を上昇したかと思うと、海の波のようにうねり落ちていく。

胸が高鳴るほど躍動しかと思うと、月の映った水面のように静かになった。

月島は自由に舞った。静山は寄り添うように奏でた。

「なんて、なんて気持ちいい――

いつしかふたりは微笑んでいた。互いの瞳を見て。

躍動し、躍動し、このまま上昇して…

「お止めください！」

手行灯てあんどんを持った墨越が歪んだ顔をして立っていた。

「このような夜更けに、いくら月島さまとて見つければただでは済

まされませぬ」

「心配のし過ぎじゃ」

扇をたたみながらすねたように答えた。

「大奥では只今過分な歌舞お囃子は禁じられております」
「過分だと申すのか」

「このような時期に相応しくない、と申し上げているのです」
月島はふう、と小さくため息をついた。

「静山、帰ろう。冷気が傷にさわる」
「はい」

静山は胸に笛をしまった。

嫉妬の怒りに燃えた墨越の目が痛かった。

―でも、やはり月島さまは素晴らしい舞手だった―

ふたりで協奏した興奮を、静山は押さえることが出来なかった。その余韻は官能的で耐えようもなく気持ちが悪かった。月島も同じだった。

―もっと舞いたい。静山の笛に合わせて―

墨越に分らないように、そっと熱い息を吐いた。

再会

家倅いえやちは小康状態を取り戻した。

大奥でも快気祝いと称して各部屋で歌舞や祝いの会が催されていた。

しかし月島はイライラしていた。

夜の年寄り会。議題は、大奥への経費削減を阻止するべし、であり、皆が皆、どうやって今のままの贅沢を続行できるかどうか、だけを口々に議論していたからだ。

―異国がわが国を狙っているというのに、何と悠長な―

いつだって大奥の女たちは改革というものを頓挫させてきた。大名たちは貧窮し商人たちに莫大な借金をしている一方、そのつけを百姓に負わせようとして一揆も頻発している。飢饉も起こり深刻さは増すばかりであった。

「皆さま、どうしてそう伝統にこだわるのです。少しずつ行事の規模を小さくしたとて、不都合はありますまい。今は江戸の町まで打ち壊しがおこっています。このまま放っておけば、もしかや、ということもあります」

「もしかや、とは？」

夏川は口をとがらせて月島を睨んだ。

「江戸城にまで暴徒がやってくると言うのですか」

「かもしれませぬな。そんな時、幕府の役人の数が少なく、我々を守る事が出来なかったらどうしましょう」

「十分な数のお役人が江戸城にはいるではありませんか」と、村岡。

「給金もともに払えぬようになった幕府では、お役人の気概は自然、落ちておりまする」

おっとりしてみえる美津波瀬でさえ信じられないといった顔で反撃した。

「月島さまは、役人たちが江戸城を見捨てる、というのですか。ありませぬ。大体、この江戸城に町民がやってきたとて千や二千では落ちませぬぞ。神君、家康公が作ったお城ですから」

「そういった問題ではありませんか。下々へのまつりごとが上手くいっていないと、いずれは我々にもそのつけが回ってくる、と申し上げているのです」

「なぜ下々の生活と我々の生活が関係するのでしょうか。我々が商人たちに金を落としてやれば、そのぶん下々の者たちにも資金が回る、のが筋ではありませんか」

「実際にそうなっていないから問題なのです。商人たちは我が懐に沢山の利潤を入れますが、下々には雀の涙ほどしか与えなければどうなります。」

また、田舎との格差は増すばかりで農民たちの貧窮はひどくなっております。ひとえにこれは、貨幣経済が自給自足の土地経済を破壊したからではありませんか」

「だからって、わたしにそれをどうすることが出来るの。大奥が
俵約したからって、その農民らが救われるという話にはならんやろ。
農民の話は藩のまつりごとのせいや」

万里小路さえもいやな顔で反論した。月島は心の中で、大きなた
め息をついた。

これでは、全く話が通じない。

正月に向かうこともあつてか、外の雰囲気は少しつきつきとして
きていた。

遠く近くに女中たちの騒ぐ声が聴こえる夜。

御池のあたりで、静山は笛の練習をしていた。

―もしかしたら月島さまが来てくださるかもしれない―
淡い期待を胸に、笛を吹いていた。

ほー、ほー、ほー。

三度のフクロウは裳羽服津衆の合図であつた。

静山は御池周りに生えている一本の松の木に目を移した。

「ここだ、あかり」

音にならない声は龍才だった。

素早く廻りを見渡して静山は松影に近寄った。

「どうして龍才さまがここへ？」

「おまえに会いたくて来た」

「どうやって！」
なんという危険であろうか。家倅毒殺未遂以降、警護は厳しくなっている。

静山、こと、あかりは青くなった。

「昼間に運ばれた衣装の長持ちに隠れていた。ここへは山吹が案内してくれた」

あたりを見渡してみると山吹は見当たらない。

「山吹は？」

「周りを見張っている」

はあ、とあかりは一息ついた。

「何かあったのですか」

「お役目が、もう少しかかりそうだと伝えに来たんだ」

意味が分からなかった。

「おまえが裳羽服津を離れて四年以上になる。今の状況が分からぬと困るのではないか」

それはそうだ。あかりはうなずいた。

「そなたからの文は水戸の殿で止まっておるので、俺らにも詳しいことが分からぬ。……こっちは家倅さまの事でな」

「では毒薬を仕込んだのは」

龍才はじつとあかりを見たあと、強くうなずいた。

「しかし結果は失敗だった」

袁羽服津衆の失敗は、水戸藩の失敗でもあり自身を危うくさせる。

失敗したしのびが許されるはずなかった。

「お、お咎めは？」

「俺は死ぬ覚悟だった。が、殿はお許しにならなかった。死んで詫びるなど許さぬ、生きて役にたつてこそつぐないだと申されて。今のところ証拠が一切ないので、お殿さまも溜飲を下ろされたのだと思う。なにより……」

龍才は一息入れた。

「お殿さまは、強制隠居させられての」

「え？」

みとなりあき
水戸為昭が強制的に隠居させられたのは、過激なまでの尊王思想と下級藩士による軍事力の強化に幕府が驚異を抱いたからだった。

「だが、家倅さま暗殺はまだあきらめてはおられぬ」

「では、再度？」

「ああ。でも、わしらを使うのではなく他の方法を探しておいでじゃ」
「他の方法？」

「それは分からぬ。同じ方法では足がつく可能性もあると言われて……他藩の殿さまたちと相談されておるようだ」

「では袁羽服津のお役目はまだ決まっていらないのですね」

「そうだ」

あかりは悲しそうな顔をした。

「本当に家倅さまの命をいただく必要があるのでしょうか。天真爛漫に過ごされているだけですのに……」

「それを決めるのは我らではない」

しのびに判断は必要ない。

それは分かっていた。

だが実際に見る家倅は子供のように純真で無垢な人間であった。命が助かったと知った時、あかりは心から嬉しかったのだ。

その家倅を殺す？ お役目だから？

また胸に何かが詰まったような感覚が起こった。

「あかり」

龍才が優しく名を呼んだ。

「気にやむな。これは言わねばよかったな。俺は失敗ばかりしてる」

愛情を感じさせる龍才の声に、あかりは懐かしい暖かさを感じた。あかりにとって家族は裳羽服津であり親方であり龍才だった。その近い感覚は、安心感とホッとさせるものを持っていた。

「少し顔を見せてくれ」

龍才は蝋燭に火をつけ、あかりにかざした。

「なんと美しい。……本当の姫のようだ。いやそれ以上だ」
「もう夜ですから、化粧もとれておりましょ？」

本当は月島の好みに合わせて薄化粧にしていたのだが。

「いいや、とても美しいぞ、あかり。やはりそなたは、そうでなければ」

「何がそうでございますか」

あかりは笑った。

いつか龍才は、贅沢な御殿女中のようにならねば、とあかりに言った。

「これでは上様もご執心になれるはず……やはりあの噂は嘘だな」

「噂？」

「上様がおまえの他に心奪われている女性がいるとかいう話だ。おまえが上がる前の話であろっ」

あかりは微笑んだ。

「いいえ。大奥はやはりすごい所です。綺麗な方が大勢おられます」
「本当か？信じられぬ」

「見目麗しい上に教養も高く歌舞の才も素晴らしいのです」
誇らしげに語るあかりに龍才は少し疑問を感じたが、嬉しそうな顔をしていたので安心した。

「顔見て少し安堵した。大奥は特殊な場所ゆえ、あかりがどうしておるかずっと気になっておったのだ。親方も口には出さぬが、おまえの事を恋しがっておる。サエや勘介も」

懐かしい名前はあかりの顔を緩めさせた。

「何か欲しいものはないか」

あかりはふるふると頭を振った。

龍才の顔を見られただけで十分だった。

「龍才さま、もう来ないで下さい。見つかったら命はありません」

「守りが手薄な道を」

見つけたので大丈夫、と言いかけた時だった。

何か悲鳴が聞こえた。

そして匂い。長つばねの方からだ。

「あかりさま、火事です！」

山吹が駆けてきた。

御対面所棟の向こうから、白い煙がもうもうと立ちあがっていた。

「あれは、一の長つばね！！」

月島たち御年寄の居所は一の長つばねにあった。

「月島さまあ！」

あかりは駆け出した。

大火

「火事にございます！火事にございます」

その声に、いつせいに年寄たちは立ち上がった。老女詰め所は、松の御殿奥にあった。

「どこからじゃ！」

万里小路は廊下を駆けてきた女中に叫んだ。

「東の一の長つばねあたりからの出火でございます。既に一の長つばねは半分以上が焼けております。現在、東の御錠口、二のつばねにも引火、こちらも危険でございます。すぐにお逃げください」

「なんと！」

真つ青になったのは夏川と村岡だった。一のつばね東に自室があったのは、その二人だった。

「御対面所の廊下からお庭に出て、その後中奥へと逃げよ。我らが行って御錠口を開けさせねば。中奥におられる上様も危ない。急がなくては」

万里小路は震える声で指示した。

「中奥には後で参りますので先にお行きください」
「月島！」

走りゆく月島を部屋子の墨越だけが追いかけた。

― 静山…… おまつ、山吹―
部屋子たちの安否が気かりだった。

一の長つばねの端廊下までくると、きな臭い匂いと煙、遠い悲鳴が渦巻いていた。

足元が熱い。火は床下を這ってきているようだった。
七、八間進んだあたりで、月島は足を止めた。熱気と火の勢いが強くなり命の危険を感じた。

「もうだめです！逃げましょう」
墨越が叫んだ。

「こつちじゃ」

月島は廊下から庭へ飛び降りた。

少し先にある自分の部屋に目をやると柱や支柱は残すものの、すべての空間からは火がぬらぬらと舌を出していた。

「静山ー、おまつー、山吹ー」
絶叫しながら部屋へ走り寄ったが誰も答える者はいなかった。

『みな逃げたのだろうか』

その時だった。

屋根が崩れ落ちてきた。

火の粉を振りまきながら真っ黒なものが、自分に向かってきたのが、はつきりと見えた。時間が伸びる。

―避けられない―

その瞬間、月島はふつとび、したたかに背中を地面に打ち付けた。

さつきまでいた場所に、ガラガラと屋根が落ちてきた。

再び顔を上げると

墨越はいなかった。

かわりにあったのは燃えさかる火。

火……火。

何も。

聴こえなかった。

御池の庭を横切り、御対面所に近づこうとした瞬間、あかりは手首を掴まれた。

龍才だった。

「だめだ、あかり！」

「離してくださいっ！」

「この勢いじゃ危険だっ」

「離して！」

あかりは大きくもだえた。何度ももみ合い、龍才はついに当て身

をしてあかりを失神させた。

そのまま肩にかつぐと走りだした。

―そうだ。逃げるんだ―

遠く、遠く……

龍才はひたすら火から、江戸城から遠く離れることしか頭になかった。

一方、山吹はあかりが龍才に助けられるのを見届けると、火元に向かった。

女たちが悲鳴をあげながら、転がるように逃げていく。月島らしい人影を探すが見つからない。

火の勢いが一番強いのは、やはり一の長つばねだった。

庭から近づくのが精一杯。東側の火勢が最も強かったが、今や一の長つばね全体に燃え広がり、火の海となっていた。

がらがらと木材が落ちている。

「月島さまあ！」

何度か叫んでみたが、煙の勢いで声も響かない。息が苦しい。

ごほっ、ごほっ。

目が痛くて涙が出てきた。

―もう無理。逃げよう―

命の危険を感じ、山吹が逃げようと後ろに下がったとき何か柔ら

かいものを踏んづけた。

月島だった。

ところどころに火傷を負っていたが息はあった。山吹は焼けた打ち掛けを脱がせると、月島を背におぶった。

先ほど静山といった御池まで来ると振り返った。

もうもうと煙をあげた大奥は、火に照らされ不気味に明るかった。風の向きと、建物の構造、土地の高さから、火がどう広がるか推測する。

山吹はしばらく考えた後、月島を背負ったまま西の桔橋はなはしに向かって歩き出した。

逃避行（前書き）

第四章

逃避行

目を覚ましたあかりは飛び起きた。

どこにいるのか分からなくて辺りを見回す。

暗いが何となく見える。質素な住居はどこかの町家が旅籠はたごのよう
だ。

隣の布団の中で龍才が眠っていた。

自分を無理やりこんな知らない場所へ連れてきたのだと思うと腹
がたった。

『こんなトコいてられない』
着物を探す。

「どこへ行く」

ぎよつとして龍才の方を見た。

暗闇の中でもじつと見られていることが分かった。

「大奥に帰ります」

一刻も早く帰って月島の安否を知りたかった。

「帰ってどうする？ また籠の鳥になるのか」

龍才が何を言っているのか分からなかった。お役目を放棄せよと
いうのか。あかりは、着物を着る手を休めなかった。

「あれだけの火事だ。おまえが死んだとて不思議はない」

「言われている意味が分かりません」

あかりは顔を歪めた。

「あかり」

龍才は体を起こした。

「お役目を捨て、俺と一緒に生きていかぬか。どこか小さな田舎で過ぐせば、おまえと二人なら何とかなる」

あかりの動きが止まった。

「龍才さま……」

『まだわたしの事をそれほど想っておられたのか』

「いけません龍才さま。抜け忍は一生狩られます。それに……親方たちを見捨てる事が出来るのですか」

「覚悟のうえだ」

低くはつきりとした声で龍才は答えた。そのような事あかりに言われるまでもなく分かっていた龍才だった。

「俺はな……ずっと迷っておったのだ。忍びとして生まれたこと、生きること。お役目の為ならどんな不本意なことでもやってきた。だがな、本当にそれでよいのか？」

俺たちは、たまたま忍びの里に生まれたただけなのに、そうやって操り人形のように生きていく事が正しいのか」

あかりは息を飲んだ。それは何千、何万と考えて答えの出なかった問いである。

「そう思っておった時、火事が起こった……これは天の采配ではないかと思った。おまえと俺、ふたりで生きよ、と」

あかりは龍才の眼をじつと見た。
少し夜が明けてきていた。

「例えそうであっても、今のわたくしには出来ませぬ」

「なぜじゃ！ 俺が嫌か？」

「いいえ」

「抜け忍狩りが怖いのか？」

「いいえ」

立っていたあかりは龍才の前に正座をした。

「龍才さまは、わたくしの兄上さまではござりませぬか」

龍才は一瞬、雷に打たれたように衝撃を受けた。

『なぜ知っている？』

全身の血が凍り付いていくような寒気を感じた。

「何をいつているのだ？」

「親方と一緒に住むようになって、父上さまであろうな、と感じたことが何度もありました。親方が母の形見の刀と同じのものを、肌身はなさずに持っているのを見た時、わたしの直感が間違っていたことが分かりました」

「そんなことは知らない」

龍才は信じたくないかのように首を何度もふった。

「龍才さま。申し訳ございません。一緒には行けませぬ」

「だめだ、あかり。もう、お役目など終わりだ。大奥は焼けてしまったのだから」

その言葉に、あかりはハッと現実にかえったが、我を失っている龍才は気付かない。

「たとえ大奥が焼けたとしても、大奥そのものがなくなったわけではありません。もう、いかなくてもは」

立ち上がったあかりの手を龍才はつかんだ。

「いくな、あかり。今を逃すともう二度とも自由になれぬぞ」

「すみませぬ。龍才さま。たとえ妹でなくても、わたくしの心は、龍才さまに差し上げることはできません」

それを聞いた龍才の顔は、以前にも見たことがあった。めおとになつてくれと言われて、つき押した時の、その表情だった。

「誰か、好きな者がおるのだな」

あかりは視線を落とした。

龍才はうなだれるようにだまりこんだ。

そんな龍才を振りほどくように、あかりは髪と小袖を整えると障子を開けた。二階から見た景色は、そこが街道沿いの旅籠であるのを教えてくれた。

龍才は馬でここまで来たのだろう。冷気が入ってきて上半身を包み込んだ。旅籠で見ると豪華すぎる打ち掛けだったが、防寒のため裾からげをして羽織った。

「馬をお借りします。お助けいただきありがとうございます」
頭を深々と下げると、あかりは部屋を出ていった。

階段を下りていく足音。

龍才はそれを、じっと聞いているだけだった。

雲庵

江戸城本丸、大奥から出火した火が完全に鎮火したのは三日たったからのことだった。

幸い城下に燃え広がることもなく本丸を四分の三、焼いた程度で食い止められた。

將軍は居城を西ノ丸に移し、本丸にいた女たちは西の丸と二の丸にある大奥に分かれて過ごすこととなった。

が
城では依然、混乱状態が続いていた。

反面。

郊外に逃げていた町人たちは火が治まると、あつと言う間に戻ってきて、すぐに元の生活を始めた。

江戸っ子にとって火事は大惨事であつたが頻回に起こるものでもあつたので、いちいち気にしてはいられなかった。

それよりもお城が、今後どう再建築されるかというほうが気になる。税が課せられるのでは、普請に人手がかかるので仕事口が増えるのでは、材木問屋が儲かるのでは、などなど、噂があちこちで飛び交った。

そんな師走の半ば。

神田にある診療所、雲庵くもあんに笠をかぶった二人ずれの女性がやって

きた。

日も暮れた、夕七つ半（午後五時頃）のことだった。

「雲才さま、山吹でございます」
うんさい

真つ暗になった土間入り口から声をかけた。

「なに山吹とな」

玄関の奥から柔和な顔をした初老の男が顔出した。

町医者らしく剃髪せず、中肉小背、深緑の綿入れの上下を着ている。

「おまえ、無事であつたか。今までどこへ行つておつたのだ……ん？ そちらの方は？」

山吹の後ろに隠れるようにしていた女性は、ゆつくりと笠をはずした。

夜目に白い顔が現れた。

「小夜、と申します」
こよ

落ち着いた低い声。線の細い美女に似つかわしくないその声は、女性の知的な部分が現れていた。

「雲才です。この辺りで医者をやっております。まま、そこでは寒い。お上がください」

薬草の匂いが家中に漂っていた。

ふたりは奥に通されると、座敷に腰を下ろした。

「薬があるのであまり暖を入れておらんです。寒くて申し訳あり

ません」

急いで炬燵に火をいれ、火鉢を近くに持つてくる。

「こちらはすぐに開業出来たのですか」

山吹は小夜を座らせると、お茶を入れている雲才を手伝いながら聞いた。

「ああ、城下は被害がなかったのな。一時は荷車にありつたけの薬剤をつんで逃げたんじゃが、すぐに帰ってきた。しかしまあそれからが忙しい忙しい。逃げる時けがをしたやら、心の病が出たやら言つて沢山押しかけてきての」

「そうですか……」

山吹は少し黙った。

「今日うかがったのは、小夜さまを診ていただきたくて来たのです」
「うん」

暗がりで見えた時は分かりづらかった小夜の顔。その顔にあったのは火傷だった。右こめかみから頬にかけて薄い赤い跡があった。

「ずいぶんと治っている」

「はい。しかし跡が残らないか心配で。すぐに冷せなかったのです」

雲才は行灯を取つて、小夜の火傷の様子をじっと見た。

「もう痛みはありませんな」

「はい」

「この様子じゃ後ひと月くらいで赤みも引くでしょう。跡は徐々に消えると思われます」

「よかった！」

山吹は大きな安堵の息をついた。

「後でいい薬をお出ししよう。それを貼っておれば、きれいに治るでしょう。その上でお化粧をしたらほとんど分かりません」

「ひと月、ずっと貼っておく必要がありますか」

小夜は尋ねた。

「外出する時は外しても構いませんが、なるべく長い時間貼っておくほうがいいですな。あと陽に当るのもよくありません」

小夜は何かを考えるような目の動きをした後「はい」とうなずいた。

「他の部分は大丈夫ですか」

「あの……その事なんです」

山吹が小夜の代わりに口を開いた。

「小夜さまは火事後、お心が弱られて……記憶も混濁し、ご自分のやられていたお役目に自信が無いと申されているのです」

「ほお。食欲はありますか」

「食べることは出来ますが……もともと食が細い方なので判断がつきにくうございます。それにすぐにお疲れになってしまわれます」

「夜は眠れていますか」

「あまり眠れません」

今度は小夜が答えた。

「氣鬱きうつの症状が出ておりますな」

「どの位で治りますでしょうか」

小夜が不安気に尋ねた。

「早ければひと月ほどで軽快する者もありますが……この病は個人差が大きいのです。大事なことは焦らない、ということです。お薬を飲んでゆつくりとしておくことが必要です」

「そんな……」

小夜と山吹は信じられないといった表情をした。

「大奥御年寄がそんなに長く休めません」

山吹はつい口を滑らせた。

「本当にそうですか？」

大方の予測がついていた雲才は驚きもせず尋ねた。

「確かに幕府の御役目は大事であらう。しかし、あなたがいなくても仕事はまわっております。そんな事、聡明な小夜さまは分かっておられるであらう。」

その上でお焦りなのは、御自分の役職が無くなること生きる場所が無くなることに対する、どうしようもない不安なのではありませんか」

「その通りでございます」

「しかしです。ここでは引くことも大事な時期に来ているのではないのでしょうか」

「引く？」

「そうです。先陣を切って進むことだけが大事なのではありません。」

引いて自分の中に入る時期も必要なのです。人間は障害がないとなかなか立ち止まれませんからな」

「頭では分かるのです」

「頭で考えめさるな。これ、山吹、薬湯をすぐに煎じて差し上げろ」

「はい」

山吹が立ち上がり隣の部屋へ出ていった。

「最近は記憶もはつきりしません。今までこんな事はありませんでした。こんな事ではお役目など絶対に出来ません。だからといってわたくしには他に何も出来ないのです……」

小夜はつらそうに息を吐いた。

雲才は何度もうなずいた後こう言った。

「分かりました。二三日こちらで集中的に療養される必要がありますな」

「それで治るでしょうか……」

「良くなると思いますぞ」

につこりと笑った雲才の顔を見て、小夜は迷子が母を見つけた時のような安心した顔をした。

「山吹と一緒にしばらく泊まっていきなされ」

混濁する記憶

薬湯を服用した後、小夜は療養所となっている二階で深い眠りに落ちた。

「大変だったの。何があったんじゃ」

雲才は孫と話すように優しくに静かに山吹に尋ねた。思わぬ優しい言葉に、山吹はうつすら目に涙を浮かべた。

「気づいた時、大奥は火の海でした。わたしは月島さま、今は小夜さまと呼んでおりますが……月島さまを猛火の中で見つけました。気を失って倒れておられました。」

とつさに火から逃れる為、わたしは江戸城から月島さまを連れて抜け出しました。そのまま春日通りを上がり護国寺ごこくじの裏を回り、雑司ぞうしが谷に行きました」

「雑司が谷は將軍家の御鷹狩御用地おたかがりごようちではないか？」

「はい。その為、木も少なく飛び火の可能性が低いと思われたのです。それに……人目につきたくなかったのです」

「大奥の上役女人は江戸城から出てはならぬとなっておるのです」

「その通りにございます」

「雑司が谷の、どこにおった？」

「付近の農家に金目のものを渡しておいてもらいました。御用地近くの農家は鷹狩りの用向きを事づかったりしておりますので武家の者への対応も慣れておりました」

「大奥の者とは気づかれなかったか」

「恐らく。城下の火事から逃げてきた旗本の奥方と名乗ってはおきましたか……大奥が火元という噂が耳にはいれば分かりません。かたく口止めはしてきましたが」

雲才はふうつと息をつくと茶をすすった。

「しかし、どうしたものか……あの調子では小夜さまは御年寄の仕事など出来んじゃないだろう」

「はい……先ほどは申し上げなかったのですが、火事のおり月島さまづきの部屋局へやづぼねが月島さまの身代わりで亡くなったそうなのです。目の前で。時々は思い出されるのですが、普段はその記憶を消しておしまいなのです」

「それで記憶が混濁しておるのか……辛すぎる現実を忘れるため取った防衛手段だな」

山吹は深く肯いた。

「最初気がつかれた時は、月島さまと呼んでも反応がなく『わたくしは小夜です』と言われて……どうしようかと思いました。大奥にあがる前の記憶に戻ってしまっていたのです」

その頃の月島の様子を思い出すだけで山吹は、胸がいっぱいになった。

そこには大奥御年寄の威厳もなく、ただ哀れな少女がいただけだった。

「大丈夫じゃ。二三日ただ食って寝ておれば体が元気になる。そう

すれば前向きに考えることも出来るようになる」

「そうでしょうか」

今まで状況から考えて雲才の言葉は楽観的すぎるような気がした。

「あいな、山吹」

雲才は微笑んで諭した。さと

「一足飛びにはようならん。じゃがな、ああいった患者には周りの者の愛情がなによりも必要なのだ。そなたはそばに居て『大丈夫です、わたしがそばにおります』と言い続ければよいのだ」

その言葉に山吹は急に顔色を変えた。

「あかりさま！」

山吹は口を手で押さえた。

「あかり？」

泣きそうな顔のまま山吹は黙り込んだ。

「あかりがどうした？ 死んだのか？」

山吹は首をぶるぶると振り否定した。

「では生きて大奥におるのだな？」

また山吹はぶるぶると振った。

「では、どうしたのじゃ？」

「……分からないのです。龍才さまがあかりさまを連れて大奥から逃げられたことしか見ていないのです」

雲才は渋い顔で黙り込んだ。

龍才のあかりに対する想いを知っていた。そして、龍才の妹だといふことも。

何か嫌な予感がしていた。

一方。

山吹は『愛情が薬』と言われ、あかりの事を強く思っていた。

月島さまに必要なのは、あかりさまの愛情では？

ふたりが強く惹かれあっているのを知っていた。

しかし……

今の小夜さまに、果たしてあかりさまが分かるのだろうか……

恐ろしい疑問が沸いていた。

死んだ月島

山吹らが雲庵を訪れたよりも、数日前にさかのぼる。

江戸城の平川門に血相を変えた女人が現れ騒ぎになった。

質素な旅装束、草履はいうに及ばず脚半までぼろぼろ、であるのに自分は大奥の御中臈である、万里小路さまに会わせると言っている。聞かない。

門番たちは疑っていたが、やつれ汚れていても女人の容貌がいつもの美しかったので、もしか、とも思い、万里小路^{までのこうじ}まで取り次ぐことにした。

あかり、こと静山であった。

「あんた……何ちゅうことをしはるんや」

万里小路はあまりにストレートな静山の行動にこめかみを押さえた。

「大奥から出ただけでも大問題なのに、真正面から江戸城に入ろうやなんて。あんたを預かってるわたしにもお咎めが及ぶんやで」

静山は平身低頭するしかなかった。
だが、どんなお咎めも平気だった。御中臈から御末になろうとも大奥にいられば、それでよかった。

「しかしまあ、よう無事やった。あんたやったら上さんをお慰めで

きるかもしれん。……ともかく早よ、風呂に入って着替えといで」

「あの……月島さまは御無事でしょうか」

いの一番に聞きたかった事だ。

万里小路はついつと後ろを向くと

「その話はまた後ほど」

と話を避けた。

静山は嫌な予感で真っ青になった。

「お願いいたします。お教えください」

「そんな姿で月島に会うつもりですか？」

そうまで言われては、着替えるしかなかった。

西の丸の大奥は勝手が違うので万里小路付き部屋に一から十まで従う。

久しぶりに身体を身ぎれいにし、旅のほこりを落とした。

やがて部屋はひとつの部屋へ静山を案内した。

上段に大きな仏壇が配された部屋。

万里小路は座って手を合わせていた。

「こちらへ」

自分の隣を開けると座布団に座るよう促した。

静山は黙って従った。

「これは、月島の位牌」

万里小路はひとつの位牌を指し示した。
白木に小さく字が彫ってあった。月やら秀やら女やらが入っている。

——なんだ……これは……——

静山は理解できなかった。

「うちらと一緒に逃げておればこんな事にならんかったです。あの子おは愛情が深いから火事やて聞くと、長つばねの部屋子らが心配で駆けていったんや」

万里小路はそう言うと、涙をこぼした。

「一の長つばねはひどい火事やったから、遺体もよう分からん。一緒に行った墨越ものうなったみたいや……そやから、あんたもてっきりのうなった思てましてんで……本丸大奥では三十人以上の女中が焼け死んだり不明になってます」

説明する万里小路の言葉を静山はまともに聞くことが出来なかった。

「わたしが見つかったということは月島さまも生きている可能性があるってことですよね」

「そう思いたい……でも一の長つばねに駆けていくところをわたしらはつきりと見てましたんや。火元や。助かる可能性はほぼない……それに月島はわたしらに言いました、中奥に後で行きますから、てな。でも中奥に來た形跡はなかった」

「そんな事ありません。死んでません！ 死んでません！」
静山は絶叫しながら首を振って否定した。

万里小路は辛そうに下を向いた。

「月島さまは生きています。きっと他のところにおられます。……
そうです。どこか他のところに」

何度も繰り返えすと静山は気が触れたように立ち上がり「こんな
ものっ！」と位牌を壁に投げつけた。

そして

どさりと倒れた。

検分

「気づいたか」

靜山が目を開けると家賢いえよしが座っていた。周りには万里小路や部屋子がいた。

「上様……」

「よう戻ってきてくれた。月島もそなたも焼け死んだと聞いて……余はもう生きているのが嫌になっておったのじゃ。ほんによう戻ってきてくれたの」

家賢は目に涙をためて靜山の手を取った。

「上様、月島さまは生きておられます」

その言葉に周りの者は動揺した。

月島の死を信じる事が出来ない靜山は未だ錯乱している、のだと。

「そなたの気持ちは分かる。余も未だに月島が死んだなど信じられぬのじゃ」

「そうです、生きておられます。上様、わたくしを本丸大奥に行かせてくださいませ」

家賢は目を白黒させた。

——焼け跡に行きたい、と言うのか——

静山は床から、がばりと身を起こした。

「お願いいたします。どうか……お願いいたします」

頭を床につけて懇願した。あまりに必死さに誰も口を開くことが出来なかった。

家賢はしばらく考えた後、口を開いた。

「分かった。そなたが思う通りにすればよい。……余も、一緒に参ろう」

「上様！」

万里小路が顔色を変えた。

「火事跡は危のうございます」

「この城の主として焼け跡を確認するのは当然の義務だ。まだ出火の原因もはっきりしておらんのであろう」

「いいえ、上様に何かあつたらどうされます」

「その時は阿部らが何とかしてくれよう」

阿部とは老中首座・阿部正宏あへまさひろのことである。二十五歳で老中についたやり手であり、万里小路とも懇意である。

しかし今、家賢の身に何かあれば次期將軍は家倅いえさちに決定してしまう。それは避けたかった。

「いけません上様。まだ火いが完全に鎮火しておらんかもしれません」

「なら火消しを待機させておけばよい。静山、体がよくなったら言

うのじゃ」

「もう大丈夫でございます。今から行けまする」

——静山、何を血迷っておるか——

万里小路は叫び出したかった。

静山に急かされて、家賢もすっかりその気になっていた。もともと月島の死を信じたくないのは家賢も同様である。

ふたりの素早い行動に万里小路は止める術もなく見送るしかなかった。

静山の執念の行動に家賢は茫然と付き従うしかなかった。

一の長つばねの検分は言うに及ばず、中奥、遺体の状態までも念入りに行ったのである。

目を留めたのは遺体であった。

十七体の遺体は炭のように黒くなったもの、半分焼けたもの、外傷が少しだけのもの、など色々な状態であったが、その大きさはまちまちだった。

普通の女なら目をそらすだろうゾツとする遺体も、静山にとっては何でもなかった。とにかく必死だったのである。

身元不明の遺体は八体。衣服の一部が分かるものが三体。全部、月島に該当しない。

残る五体は真つ黒の炭状で、月島と体格がよく似ているものが一体だけとなった。この一体は一の長つばねから発見されていたので月島のものとも思える。

「こちらの御遺骸ごいがいのそばに何か落ちてませんでしたか」

「さあ……柱か何かの下敷きになっておりましたので落し物といひましても」

屍回収係しかいけいは首を振った。

「この御遺骸は一体だけあったのですか？ 近くに他の遺体があったりは？」

「いいえ、この一体だけです」

——この遺体が月島さまだとしたら一緒にいた墨越どのの遺骸がないのはおかしい……それに山吹はどこへ逃げた——

火事だと駆けてきた山吹が、生きているのは確実である。よしんば月島を助けにいつて死んだとしても、大柄の山吹に該当する遺体もなかった。

大体、身軽で聡い山吹が、あれくらいの火事で死ぬなど考えられなかった。

——月島さまは山吹という。そして、どこかへ逃げた——

これが、静山の出した希望的答えだった。

「どうだ、静山？」

家賢は不安気に静山の顔をのぞきこんだ。

「……分かりません。しかし、一の長つばねで見つかった御遺骸は大切な方の者と思われれます」

墨越か月島。

どちらかの遺体である可能性は大きかった。遺体が墨越あつても静山にとっては衝撃的な事実である。墨越とも、昨日まで話したり笑ったりしていたのだから。近しい人が、こんな姿になってしまうなど、到底信じられない。

「どういうことだ？」

「この御遺骸は、月島さま、あるいはその御つきの墨越さまのどちらかである可能性が高ございます」

それを聞いて家賢と静山は、悲痛な面持ちでじっとその遺体を見つめた。

「これがもし墨越だとしたら、月島はどこかで生きているかもしれぬのだな」

「はい」

静山はしっかりうなずいた。

そう信じていた。

ふたりは腰を下ろすと強く手を合わせて遺体を拝んだ。

——どうして、こんなことになったのですか。墨越さま——

胸が痛かった。これが墨越であるなど信じられなかった。

家賢は真つ黒な物体が月島ではないと思いたかつたし、靜山は墨越の軀とも信じたくなかつた。が、状況から考えると、そうもいかない。月島か墨越、大切な人であることは間違いない。

「この遺骸を丁寧に葬らせよ。そして四十九日間、読経をあげ続けるのだ」

家賢は立ち上がって命令した。
そして決意していた。

江戸城中、いや江戸中を探しても月島を見つける。

一方の靜山は、山吹の行方を探ることにした。

――もはきつ裳羽服津との連絡をどう取るか――

山吹が窓口だったので、裳羽服津との糸が切れてしまっていた。

黒川藩の養父・横井、ひいては水戸の為昭なりあきから裳羽服津に連絡を取ってもらうしかないのか……あまりに遅々とした道だ。

靜山はじっと考え込んでいた。

心の平安（前書き）

第五章

心の平安

茶店の椅子に腰を下ろして小夜はひとりの男の子を見ていた。

まだ、五、六歳であろうか。

すりきれた木綿のかすりを着て、他の子供たちが出店のおもちゃを買ってもらうのをじっと見つめていた。

今日は縁日である。小春日和に、楽しい音曲の音色と、物売りの声、ガラガラと天井鈴を鳴らす音……

『陽乃輔よつのすけはどうしているのだろう』

小夜は弟のことを思った。弟の陽乃輔は気も弱く、頭も少し弱かったので、いつもぼうつとしていた。そんな弟に父はいつも辛くあたたか。父の期待にこたえられない陽乃輔は、どんどん自信をなくしていった。

小夜は弟にこれ以上プレッシャーを与えないため、自分がしっかりと家盛りたてようと考えていた。それは自然にそうになっていた。だから大奥に入っただ。それと、もうひとつ理由があったのだが。

火事の後、実家には小夜は焼け死んだ、と知らされていた。小夜からの仕送りもなくなった今、頼りない母と弟はどうなったのか。

だが、今の小夜は、実家の生活にまで考えが回らなかった。ただ、記憶の奥にある陽乃輔が、目の前の男の子と重なっただけである。

「あ、泥棒！」

その声に我にかえった。

おもちゃをじつと見ていた男の子はおもちゃ屋から品物を奪うと走って逃げだした。すぐに大人に追いつかれると、万引きした商品を取り上げられた。失敗である。

「なんてことしやがんだ、このガキ！」

店主は子供の頭をゲンコツで叩いた。

「うわーん」

大声で子供は泣き出した。

「泣いたって許されやしねえ。やい、てめえの親はどこにいるっ」

「うわーん」

「言わねえんなら、お奉行所につきだすぞっ！ 泥棒は打ち首だからな！」

真っ青になった子供は、しゃくりあげながら答えた。

「お、おいら親はいねえ……あ、あんじゅさましかいねえ」

「あんじゅさま？」

「みよ、妙安寺みょうあんじの庵主さま……」

そう言つと庵主さまが恋しくなつたのか、余計に泣きだした。どうやら親無し子の子である。

妙安寺は、孤児院のようなことをしている尼寺だった。

「仕方ねえなあ……妙安寺のガキかい」

親のいない不憫さ、泥棒はいけないことだというしつけ、どっちを優先させるか店主はとまどっているようだった。

「この子のことは、お任せくださいませんか」
小夜は思わず立ちあがっていた。

「わたくしが、その妙安寺まで連れて行きます。もちろん、泥棒したことも庵主さまにお伝えしてしかつてもらいますわ」

「あ、あなたは……」

引き込まれるような雰囲気店主はぼつとなった。あまりに場違いな美女である。本当はひとりで出歩くと山吹にしかられるのだが、今日は雲庵が忙しかったので、近所を歩くことだけは許してもらえたのである。

「通りすがりの者です。ぼつや、ちょっとそこで待ってらっしゃい」
小夜の優しそうな声と綺麗な顔に安心して、男の子は言われたとおりの場所に行き立ち止まった。

こっそり男の子の欲しがっていた商品を店主から購入すると小夜は、男の子の手をとり、わらべ歌を歌いながら歩きだした。

ぶらぶら、ぶらぶら……

リズムよく振られる手の感覚は楽しく、時折、小さな手できゅつと握られる感覚に胸が熱くなった。

妙安寺は、神社からすぐにあつた。子どもの足でも十分歩ける距離。
離。

中から出てきたのは、初老の尼僧と、小夜と同じくらい年の尼僧のふたりだった。

「本当に申し訳ありません。三太は普段とてもいい子なのですが…
…このような事のないよう、よく言ってきかせます」

初老の尼僧は妙安、若いほうの尼僧は春心といった。
奥では十二、三人ほどの孤児たちが手習いをしていた。

「こちらは三太が欲しがっていたコマですが……ひとりだけに渡さないほうがいいでしょうか」

小夜は遠慮がちに尋ねた。

「まあ、買っていただいたのですか」

「あまりにもじつと見ていたので不憫で。最初は、もう泥棒をしない、と言えば、これをあげるつもりだったのですけど。他の子たちのぶんが……」

「ありがとうございます。もし、いただけるのならコマは皆で使うことにします」

妙安はにつこりと笑って、コマを小夜から受け取った。

妙安は子供たちに小夜からコマをもらったのでお礼を言うように促した。小さな子供たちは歓声をあげて小夜の周りに近づいてきた。
三太は小夜の臀部にまわりつく。

「あのね、おばちゃん、おいら字書けるよ」

「ほんと？」

「うん。あのね、見て見て」

三太は手習いをしている年長の子供たちの部屋へ行くと、墨をとって字を書き出した。

「あたしのも見て！」

「あたしのも」

そう言われた小夜は、すっかり妙安寺で時間を過ごしてしまった。

失火の犯人

江戸城では、月島と山吹の人相書きが手配されることになった。

これを町奉行所に配りこっそりと探索してもらうのである。大奥女中の失踪事件なので、あくまで内密に、との指令であった。

心もとない方法に静山は、ぎりぎりとするしかなかった。そんな中、待ち望んでいた裳羽服津衆からやっと手紙が届いた。

要約するところである。

- 一、裳羽服津は山吹の消息を知らない。火事で焼け死んだ訳ではないのか。
- 二、山吹の拠点は江戸神田の雲才の屋敷、診療所・雲庵であった。
- 三、雲才へ山吹および月島という年寄りの消息を尋ねてみる。
- 四、上様の更なる寵愛を受けよ。多少強引な手を使っても可。

以上、四点であった。

山吹の行方は裳羽服津でも知らないようである。それよりも山吹が死んだと思っていたなどおかしな内容である。山吹自身が裳羽服津との接触を断っているのか、はたまた連絡できない状態にあるのか。

だいたい龍才が報告していないのが変である。なぜ火事に関して詳しい報告をしていないのだろう。

『まさか、あのまま、抜け忍になっっていたら……』

静山は首を振った。龍才のことまで考えるのは止めた。

とにかく、神田に雲才の診療所があることが分かったのは収穫であつた。

『そこから情報を得てみよう。それにそこから薬も手に入る』
火事で焼けてしまった為、薬の調達に困っていたのだ。

「静山さま、大変にございます」

おまつが血相を変えて、部屋に入ってきた。急いで手紙を袂たもとに隠した。

「なんじゃ」

「火事の火元が月島さまのお部屋だと言われております」

「なんだと」

静山は顔色を変えた。

「火が一の長つばねから出たのは間違いない。その出火部屋は月島部屋だともつぱらの噂で……」

「誰がそのような事を」

「どうやら村岡さまの部屋子たちが言っているようです。けど、夏川さまも絶対に関係しております。火元に近かった東側の部屋の方々は自分たちに責任が及ぶのを恐れて、月島さまに責任をなすりつけたのです」

死人に口なし。よしんば月島が死んでいないとしても現在大奥に
いなければ反論も出来ない。

「卑怯な……」

静山はこぶしを握ってぶるぶると震えた。

「表のほうもその噂を聞いて、近々我々にお取り調べをするのと」と

「取り調べ？」

「月島さまの部屋は全員、老中指示のお取り調べを受けるというのです！　なんという屈辱」

おまつは顔を被って泣き出した。

静山は黙りこんで考えをめぐらせた。

「村岡さまの後ろには水野さまがおられる。その取調べをされるのは水野さま配下か？」

その言葉におまつはハッと顔をあげた。

「はい……確か水野さまから出た話のようです」

「水野さまは敵対している阿部さまが月島さまと入魂こころいそにしておられたゆえ、その阿部さまを陥れるのに月島さまを火元とするのが得策とみたのであろう」

「そんな……不道理な。実際は村岡さまか、夏川さまのお部屋から出火したのではありませぬか」

「事実など意味はないのだ。何事も政りごとが関わっておる」

おまつには静山に既視感を感じた。

この感じ……

そうだ、月島に似ているのだ。

「こうなったら戦うしかあるまい」

静山の目はまっすぐ前を向いていた。

「月島さまの名誉と、我々の潔白を守るため」
「どうするのですか」

「まずは上様に潔白書^{けっぱくしょ}をお出しする。我々が潔白だという内容を書くのだ。そのうえで、もし取り調べを行うなら公正におこなうよう水野さまだけでなく他の方々にも参加いただく旨もお願いしよう。阿部さまにも会わねばな」

「そ、そうでございますね」

「それで終わりではない。どうにかして早急^{きんす}に金子を作らねば……それも大きな金額だ。
実家に言って送ってもらうが……時間がかかる。わたくしはいま大きな金子を持っておらぬのだ」

静山は頬をついてじっと考えた。

「あの……月島さまの金子を少し使ってはいけませんでしょうか」
「どういふ事じゃ」

「わたしは、時折月島さまから大きな金子を入れたり出したりするよう仰せつかったことがあります。そういう時は、いつも駿河町の両替店で金子を出し入れしておりました」

「越後屋か。しかし出すには月島さまの手形がいるであろう。どうする」

「月島さまは預かり手形を分散させてお持ちになってました。一番出し易いのは……寛永寺です」

静山とおまつは目を合わせて大きくうなずいた。

「本当は、月島さまのお金は使いとうないが……」
静山は少し浮かぬ顔をした。勝手に月島のものを使うのは気が進まなかった。

「きつと月島さまはお許しくださいます。いいえ、きつと静山さまと同じようにされたと思います」

おまつは熱情を込めて言った。

「……そうじゃな。それに、実家から金子がきたらすぐに月島さまからお借りしたぶんはお返ししよう」

おまつは深く肯いた。

——月島さまは静山さまを疑っておられたが、わたしは、この方を信じる。こんなに月島さまの事を真剣に慕っておられるのだから——

山吹が月島に傾倒するように、おまつも静山を深く信頼した。
入れ替わった二組が、それぞれの試練に向かおうとしていた、

砲術師範の男

年も押し迫ったある日のこと。

妙安寺の子供たちに剣術を教えている中年の男に小夜は目をやった。

「あの方は？」

高位の武士だが、目が大きく知性的でそれでいて人なつこい雰囲気があった。

「幕府砲術師範の江川太郎左衛門さまです
春心が穏やかに答えた。」

「庵主さまのご親戚なので時折、ああやって男の子たちに剣術を教えに来てくださるのです。お忙しい身の上なのに、気晴らしだ、とおっしゃってくださいって」

「幕府の砲術師範……」

小夜は西洋流の大筒の話进行出した。

老中の阿部や鍋島藩の斉正が言っていた異国船対策のことだろうか。

春心には砲術が何か分かっていないらしかった。

「江川さまは緒方洪庵先生の門下生でもあられるので、医術の心得えもあり、わたくしどももよく助けていただいております」

剣術の練習が終わると江川は春心の出すお茶を飲むため部屋に入

ってきた。

「小夜さんには子供たちに学問を教えてもらっております」

小夜は近所に住む出戻り女であるという設定になっているので、そのまま江川に紹介された。

「子供たちに学問を教えるのはとても大切な事です。失礼ですが、あなたはどこで学術を？」

単刀直入に聞く江川に小夜は少し面食らった。

「わたくしは一通りの読み書きは習いましたが、女ですから特定の師について習ったことはございません」

「小夜さんは手習いの本をちよつとお読みになっただけで、すっかり理解されるのです。それを子供たちには上手に教えてくださるので大変助かっております」

春心があわててフォローした。

「それはすごいですな」

「ええ、本当に。漢語もすらすらとお読みになるし、算術もお得意なのですよ」

「江川さまは緒方洪庵先生に西洋医術をお習いになったとか」

「春心さまはどこまでわたしの事をお話しになったのやら」

江川は苦笑しながらお茶をすすった。

「緒方先生は信念を持った方でしてね、全国から新しい学問を修めたい熱い若者が沢山集まってまいりました。そこでは毎月試験があって、それに三ヶ月連続で主席を取らないと上級に上がれないので

す。

しかし肝心の蘭和辞典は一冊しかない。新参者は先輩が使い終わる夜半にならないと貸してもらえなかったので大変でした」

「ハルマなら、長崎から取り寄せられなかったのですか？」
思わず小夜は口を滑らせた。

その頃、蘭和辞典はハルマと呼ばれていた。江川は一瞬驚いた顔をした。

「ハルマとは、よくご存知ですね。しかしハルマは入手するのが非常に困難なのです。高価ですし。ハルマをご存知なら、よくお分かりだと思いますが」

江川はにつこりと笑った。今まで安易に手に入っていた辞書のことを考えると、小夜は少し後ろめたい気持ちになった。その貴重な辞書を火事で焼いてしまったことも。

「しかし、これからはエゲレス語です」
江川の声に力がこもった。

「エゲレス語？」

「ええ。砲術や海術にはエゲレス語が多く使われています。きっとエゲレスが技術の先端を走っておるからでしょうな。日本もいずれは追い越すため、もっと研究せねばなりません」

「江川さまは、エゲレス語と和語の辞典をお持ちなのですか」

まだ直接和訳した辞書を見たことがなかった小夜はたずねた。

「いいえ。英蘭・蘭英辞書が洋学所に一冊あるだけです。いちいちエゲレス語から蘭語に、それをまた和語になおすのは大変なので、自分なりにエゲレス語からの和訳を作ってみたりしておりますが……しかし、時間がかかります」

その言葉を聞いて小夜は小さくため息をついた。

自分も読む本の範囲であつたが英和帖を作っていたからである。それもすっかり焼けてしまった。

「小夜どのは語学に興味があるのですかな」

「いいえ。ただ、少しエゲレス語の本を読んだことがあるだけです。その資料をすっかり無くしてしまったのが惜しくて……」

「なんですと？」

今度は本心から江川は驚いた声を上げた。

あわてて湯のみを茶托に返すと、小夜に向き直った。

「ど、どちらでエゲレス語を勉強されたのです？」

「え？」

「どんな本を読んだのですか」

矢継ぎ早に江川が小夜に質問した。

「わ、わたくしが読んだのは、エゲレス語の詩や心学のような本です」

「それはどういった内容です？ 蘭語から訳されたのですか？」

「はい。内容は……色々です。詩は心を打つ叙情的なものや風刺もありましたし、心学は小難しく人間のあり方について書いてありました。」

心学は単語が難解で訳がなかなか進みませんでしたけど、詩のほうと同じ単語が繰り返し返して出てきますので理解しやすかったです。」

分かった単語は江川さまのように自分なりに和訳をして帳面に書き記しておりましたが……もう、手元にはありません」

「なんと……」

江川はあっけに取られながら内容に興奮したようであった。

「あなたは……何者ですか、どこでエゲレス語を習ったのですか」
「あ……」

通常の意識状態でない小夜は、口にしてはまずい事がこの時はコントロールできなかった。何も言えず氣まずそうに下を向いた。

「え、江川さま、小夜さんは雲庵というお医者さまに縁ある御婦人です。多少、異国の知識があったとて不思議ではございますまい」

春心が小夜に助け舟を出した。

「いいえ、町医者者の範囲を超えておられますよ。小夜どのほ」

江川はじつと小夜を見つめた。

「わたくしは……詳しくは言えませんが、お金に困らない生活をしておりました。そこで、ちょっとした手習いとして外国の知識を仕

入れただけです。おなごのわたくしに学問を修める術はありません」
そう言われると、実際にその通りなのでそれ以上は追求できなかった。当時の女性が一流の学問を身につける術は無いに等しかったのである。

「あまり追求すると、もう妙安寺に来ていただけなくなりますな。いや失礼。……実際エゲレス語には相当困っておるもんで、思わず力が入り申した」

頭を掻きながら少し恐縮した様子に江川の人良さがにじみ出た。幕府、高位の役人にはあらざる態度である。

けれども江川は感じていた。

小夜の非凡な才能と、利用価値と危うさを。

——まだ誰も習熟した者はいないエゲレス語を多少なりとも知っているこの女人、
何者であるか、果たして使えるのか——

それが一番知りたいことであつた。

異例の出世

同じ頃、雲庵では雲才と山吹が深刻な顔をして二通の手紙を前に黙り込んでいた。

一通は裳羽服津の炎才から、一通は靜山ことあかりからの文である。

どちらも山吹と月島の居場所を尋ねてきている。山吹にとっては、月島である小夜の容態が落ち着くまで大奥に知らせたくなかった。大奥に知らせると、必ず月島は連れ戻されてしまふ。それは自由になれるかもしれない機会を逃すことだ。

また、あかりだけに知らせる、という手も考えたが、それも悩むところであった。あかりはきっと必死で月島を探しているだろう。あかりの心情を考えると山吹の心は痛んだ。

だが、記憶の混濁した小夜となった月島が、あかりを認識できるかどうか、も分からなかった。墨越につながる記憶を呼び覚ましパニックになる可能性もあった。

最近はやつと外に出かけていつて明るい表情も見られるようになっていたのである。

大きな刺激を与えなくなかった。

「とりあえず、あかりに小夜どのの無事だけでも知らせてはどうじやろ。あやつも心配しとる」

雲才が山吹に提案した。

「……もし、お知らせしたら、きっとあかりさまは大奥を抜けてでも、月島さまに会いに来られます。そうなつては、あかりさまのお役目は破綻、そして月島さまの病状もどうなるか分かりませぬ」

「だから、じゃ。あかりには小夜どのは無事であるので安心しお役目を果たすよう、知らせるのじゃ。決してこちらへ来てはならぬ、と」

山吹は大きなため息をついた。

「それで納得されましょうか」

「納得するもせぬも、あかりはきつちりと忍びであることを認識せねばならん」

雲才はいつになくきつい声で言った。

「あかりは、一旦お役目を引き受けたのだ。途中で放棄することは許されん。だから、大奥を抜けて出るなどあつてはならぬのだ。わしがきつちりと話をつけてやろう」

雲才はすつくと立ち上がった。

「年が明けたらつくば屋として大奥へ参内する。そこであかりに会おう。山吹、そなたはあかりの元に帰らず、このまま小夜どと一緒に居るとあかりに伝えてよいな？」

山吹は大きくうなずいた。

正月があけて江戸城では新年の行事が続いていた。

年末に火事があったため華やかさは押さえられていたが、各藩からは『火事見舞い』と称される献上品も加わった為、貢物の係りは多忙を極めていた。

大奥もまた正月は忙しい。

特に御年寄りは出番が多いので月島の不在は大きく目立った。必死で村岡たちが盛り上げようとしていたが、家賢をはじめ、御台所代わりのお美津の方たちの違和感は無くなることがなかった。

改めて月島の存在感の大きさを皆が感じていた。静山は咄嗟に笛の演奏を願い出た。月島のいない寂寥感に耐えられなかったのだ。

家賢は許可した。

笛の音は明るく澄み渡り多くの者に感動を与えた。それは家賢に静山の更なる寵愛に拍車をかけた。

ぎりぎりと見ていたのは、村岡と村岡の姪、笹野だった。近頃の閨ねやへの指名に笹野の名が増えてきていたからだ。

「今度、あんたさんにお部屋を与えるよう、上さんに言われました」
万里小路が静山を呼びつけたのは二十日正月が終わってからすぐの事だった。

「……部屋を？しかし……」

「分かってます。あんたさんは、お子も産んでませんし、お部屋の条件にはかなっておりません。けど、上さんにとってあんたさんは特別な存在です。ただの御中臈にしとくには不本意や、と申されました。これは大変なことですよ」

「……………」

「なんや？ あんまり嬉しそうやないな」

「お部屋をもらったら、表の方たちと話すのに有利になりましようか？」

「そりゃ、もちろんや。けど……………なんぞしたいことでもあるんかえ？」

静山は答えずにじっと黙り込んだ。

「……………大奥総取締りのほうが有利ではないですか？」

万里小路はぎよっと目をむいた。

「ここでお部屋をもらうより、大奥総取締りになるほうが有利ではありませんか？」

「何を考えとるんや、あんたは。お子も生んでないのに部屋さまと同等の扱いを受ける、いうのに大奥総取締りになって何をしたいんや」

「わたくしは、月島さまの汚名を注ぎたいのです。それには表の方の協力が必要なんです。老中の水野さまは村岡さまと結託して、火事の責任を月島さまに押し付けようとなさってます。そんなの……許せません」

静山は激しく首を横に振った。

「あんたは、どこまで月島のこと慕うとるんか……………」
万里小路は大きいため息をついた。

「よう聞きや。あんたさんがお部屋をもらう、いうのは、村岡側へ

の大きな牽制なんや。上さんもそれを承知でそう言いなさったんや。上さんも月島のことをかばいたい思うてはる。けど奥のことを表まで巻き込んで、どうこう言うつのも避けたいんや」

「けどもう実際は、水野さまが安部さまを落とすために大奥の事を利用してはありませんか」

「だからこそ、や。もと月島部屋やったあんたがお方さまになれば、失礼な聞き込みはなかなかできん。あんたさんにとつたら、月島の潔白が晴れな、納得できへんかもしれんけどな、ここは大奥や。」

長くしぶとく生き残ったぼうが勝ちなんやで。結局それが月島の潔白を後々証明することになるんや」

さすがは万里小路。現大奥総取締りは大層しぶとかった。

「分かったな。あんたさんが部屋殿になるのは月島にとつてもええ話なんや。村岡側はきつと邪魔してくる。条件にかなわん、言うてな。けど、そこで負けたらあかん」

静山は肯いた。

「あんたのお役目を忘れたらあかんえ。水戸、黒川藩が何て言うてあんたを送り込んだか……忘れたらあかん」

万里小路の重々と言い渡す言葉は、ずっしりと静山の肩にのしかかった。

——上様の更なる寵愛を受け、幕府改革を進めるよう進言すること

水戸藩は、水戸学という独特な思想があった。

天皇の伝統的権威を背景にしながら、幕府を中心とする国家体制の強化によって、日本の独立と安全を確保しようという考えである。

しかし、幕府の力は弱体化し、それに幻滅していた水戸の藩士たちは過激な主張をするようになっていた。そのため為昭は幕府に疎まれて隠居させられたのだ。

静山にとって、水戸藩の思想を具現化するなど考えもしなかったが、権謀術中の大奥で忍びの任務を遂行するなど、もはや幻のように思えた。

状況は悪くなかった。しかし静山は孤独だった。

山吹もいなくなった今、自分と忍びを結びつけているものは何もない。たった一人で、何をしろ、というのか。

月島の名誉を守る、という生きていく目的がなくなると緊張の糸がぶつりと切れそうだった。

その夜。

冷たい月を見上げながら静山は泣いた。

『生きていると信じたいが、本当に月島さまは、この世にいらっしやるのか。もし、もうおられないとしたら……わたしは、もう生きていけないかもしれない』

お部屋殿など何の意味もなかった。大奥中から羨まれる身分が手

に入ったというのに、愛する人を失った悲しみの前には、すべてが
幻だった。

つらかった。胸が締め付けられる。

死ぬほど月島に会いたかった

呼応

小夜は目を覚ました。

誰かが激しく自分を呼んだ気がして。

『……………そう……………』

覚えのある感覚。

先ほどの感覚を反芻する。

「ああ、静山だ」

小夜は目を見開いた。

その瞬間すべてが戻ってきたように感じ、同時に胸が締め付けられて肩で深呼吸をした。

「小夜さま？」

隣に寝ていた山吹が異変に気づいて体を起こした。

「どうしました？」

「静山が呼んでおるのだ」

その言葉に山吹は固まった。

「なにか……………泣いておる」

そう言つと、再度大きく息を吐いた。

「あか、静山さまに、何があったのです？」

「わからぬ。だが、胸が締め付けられるのだ。わたくしに会いたが

つておる」

小夜は自分の胸に手をあてた。
苦しかった。

山吹が冷えないように小夜の肩に上着をかけた。

「……帰らねばならぬ」
小夜はつぶやいた。

「まだ、だめです」
山吹はきっぱりと言った。

「あんなに靜山が呼んでおるのに、か」
「靜山さまには月島さまがこちらにおられる事をお知らせします。
今度、雲才さまが大奥へ行って直接、靜山さまにお目にかかってく
ると言われていました」

「まだ知らせていなかったのか？」
驚きとも怒りとも思える瞳で小夜は山吹を見た。同時に自分がす
っかりと靜山のことを忘れていた事も思い出した。

「わたくしは……今まで何をしておったのだ」
「ご病気だったのです。いえ、まだ治っておりません。だから、あ
かりさまの事は言わないようにしております」

「あかり？　それが靜山の名か？」
ふたりはじつと目を見合わせた。しばらくして山吹は観念したよ
うに目を伏せた。

「はい。靜山さまはあかり、と申されます。育ったのは筑波山のあ
る村で……わたしとは同じ村の出身です」

「密命を帯びておるのであろう。そなたたちも因果な宿命よの」

ずいぶんと前から見破っていたであろう小夜の言葉に山吹は何も
答えなかった。

「だから、靜山はあんなに苦しんでおるのではないのか？ そなた
もいなくなつて、たった一人……つらくないハズがなかるう」

山吹は息を飲むと唇をかんだ。

「墨越の墓前にも行つてやらねばならん……」

あれ程恐れていた墨越のことも小夜はただぼそりと言った。山吹
は表情が凍るのを感じたが小夜が淡々としているので、どう対応し
ていいのか判断しかねた。

「この先どうしたらよいものか」

それは誰にも分からなかった。ふたりしてじつと考えていたが、
どうやってもいい考えが浮かばなかった。

「冷えまする、お布団にお戻りください。こういつた事は夜考える
といけません。明日になったら、じっくりと考えましょう」

「けど、夜に泣いている靜山が哀れだ」

「だったら、わたくしどもで靜山さまに念を送りましょう。お布団
に入つて『わたくしどもはあかりさまをいつも見ております』と愛

しい気持ちを唱えるのです」

「そんな事が出来るのか？」

意外そうな顔をして小夜は山吹を見た。

「月島さまが静山さまが泣いている、とお感じになったのに、反対が出来ないはありません」

山吹は笑って小夜を布団に戻すと夜具を整えた。

それからふたりは目を閉じると、じつと静山に念を送った。

少しだけ胸が温かった。

夢だったのか。

月島がじつと包んでくれていたような気がする。そばに山吹もいた。

朝、静山が起きるとおまつが真っ赤な目をして泣いていた。

「夢に月島さまが出てきてくださったんです……内容はよく覚えていませんけど、夢の中でわたしはとても嬉しかったです、ああ、月島さま、生きておられたんですね、ずっと待っておりまして……でも目を覚ますと……お姿はなく……」

おまつは襦袢の袖口を目に当てると号泣した。

「何を泣く。月島さまは生きておられる、だから夢で何かを伝えようとなさったんじゃない」

胸元から懷紙を出すと、おまつに手渡した。あわてて、その懷紙

で涙と鼻水を拭くおまつ。

「わたくしの夢にも、昨夜はちゃんと出てきてくださった」

「静山さまの夢にも！　して、どんなお姿で」

「……姿は……ない」

「はあ？」

おまつは目を丸くした。

「姿はないけど感じるのじゃ。月島さまの空気というか気の個性があるであろう？　そうそう、山吹もおったぞ」

「山吹……もですか？　して、ふたりは何と？」

「だから……勇気を持て、そなたたちは一人ではない、ということじゃ」

「はあ」

理解出来ないおまつであったが、なんとなく静山の肯定感には元気をもらえるところがあった。このところふさがちだった静山が久しぶりに明るい。それだけで、おまつは嬉しくなった。

部屋へや殿としてあがるのだ。お方さま、静の方となるのだ。

——どうぞ、どうぞ上様の寵愛が潤おしいものでありますように——

おまつは祈った。

月島の叶えられなかった威光を、静山には一身に受けてもらいたかった。

將軍といえど

午後から靜山は、家賢いえよしの散歩に随伴することになっていた。

「そなたにあやまらねばならん事がある」

冷たさに映える椿を背に、綿入れを着た家賢は振り向いた。

「月島の探索を中止にすることになった」

「そんな……」

靜山は真っ青になった。

「火事で死んだ者の四十九日も過ぎ、不明者の探索も区切りをつけるよう嘆願が出ておる」

「それは水野さまや村岡さまからですか？」

「町奉行所、普請奉行所ふしんからだ。町方は日々の業務が多忙だと言われている。大体、江戸城でいなくなった不明者を町方で探すのはおかしい、と。言われてみればもっともじゃ」

「しかし、わたくし自身、火事のおり小者に背負われて城下にまで逃げましてございます」

「……それを言うとかぶ蛇だ。本来、奥の女人は焼け死んでも門外に出てはならぬ、と言われているくらいなのだ。したが、それはあまりに非情ということで、そなたの場合も大目にみられておるのだ」

靜山は唇を噛んで下を向いた。

「普請方からは、本丸奥の再建が遅れると言われている。不明者が

見つからないからといって長つばねの再建がいつまでも出来ぬとあっては困るのだ」

はあ、と家賢は大きなため息をついた。將軍といえど自由に出来ることは何もない、その無力さについたため息だった。

「せめて月島の名誉だけは守ってやらねばならぬ。余は寛永寺より最高の戒名を月島に授けることにした。ゆえ、誰も火事の責任を負わすことはできぬ」

「上様……」

静山は目に涙を浮かべた。

「すまぬ……それで許せ」

家賢は静山の肩を抱き寄せた。それが家賢に出来る精一杯の愛情なのだと……静山はよく分かった。

——月島さまは死人になってしまった……大奥での居場所が無くなってしまった——

荣誉に満ちた大奥御年寄りの座を、静山は守ることが出来なかった。

「本当は余も信じておらんだ。月島が死んだ、など、そう思わないと家賢も正気を保てなかった。」

「きつと月島はどこかで生きておる。そして、いつか我々に会いに来る。……余は、そう信じておる。それまで、そなたと一緒にいたいのだ。せめて……本当の側室としてそばにいてくれ」

家賢は抱いている手に力を込めた。
静山は嬉しかった。

使命としてではなく、ただの女として本当に必要とされたことは無かった気がする。また一步、家賢との距離が近づいた気がする。

しかし、静山は知らなかった。

一步抜き出た寵愛は、嫉妬と羨望のただ中だと。そんな己が身を守らなければ、あつという間に底に沈んでしまうのだと。大奥が将軍と特定の女人の気持ちだけでやっていける場所でないことを。

粉雪がちらほらと降りだしてきていた。

「よし」

大奥へ持っていく小間物を点検しおえた雲才は、大きくうなずいた。

明日あかりに会って、月島と山吹の無事を伝えしっかりお役目に励むよう、諭すつもりだった。

どん、どん、どん、どん！

玄関戸を叩く音がした。日も暮れてだいぶたつのに急患であろうか。

「誰じゃな」

「雲才さま……龍才です」

消え入りそうな声だった。

「なにっ」

急いで戸をあけると、雪崩れるように龍才が倒れてきた。肩や腕が切られている。出血が多い。

「山吹！ 来てくれ」

玄関戸を急いで閉めると雲才は叫んだ。

山吹と小夜があわてて顔を出した。

「奥の処置台に運ぶのを手伝ってくれ」
「分かりました」

達成感（前書き）

第六章

達成感

雲才と山吹が処置台に龍才を運ぶ間に、小夜はありったけの行灯あんどんや火鉢に火をつけ診察室に持ってきた。棚をあけて布を探す。

「肩から背中への傷が深い。こっちから手当てしよう」

「けど右腕も肉が口をあけています」

山吹が叫んだ。

「切られた両側の皮膚をきつちりと合わせて……何か貼りつけておくものがあればよいのだが……」

小夜が周りを見渡した。

「卵の薄皮がある。あれを全部使いなさい。右から三番目一番下の引き出しじゃ」

言われたまま乾燥した皮膜を取り出す。水に浸し、次々に雲才に手渡す。

「うつつ」

出血と痛みのため龍才は意識が半分無くなりかけていた。

「次は肩だ」

背中の右上から左下に向かって三寸半（10cm）ほど切られていた。肩甲骨があるためそこで刀が止まったのか、一部白いものも見えていた。

「うつつ……」

山吹がうめいた。今まで気にならなかった血の匂いに酔う。

「出血がひどい。血が止まらねば死ぬぞ」

「小夜さま、縫えませんか」

山吹がとつさに尋ねた。

雲才は驚いた顔で山吹を見た。

「縫う？」

「はい。糸と針で傷口を縫うのです」

「いや、その前にこの中からの出血を止めねば傷口を縫ってもだめだ」

小夜は何かを思い出すかのように真剣な眼差しで傷口を見ていた。

「中からの出血……」

骨膜や血管が切れている為、下からじわじわと溢れてくる血を見て山吹も押し黙った。

「山吹、線香を用意して火をつけてくれ」

山吹は合点がいかない顔をした。

「そうか、焼くのかな」

雲才が叫んだ。

小夜はうなずいた。

静山が刺された後、読んだ外科の本に、焼いて止血する方法がのっていたのを思い出したのだ。雲才はしのびの術として、もともと焼き止めという止血方法を知っていた、が、それはあくまで皮膚の外傷用としてだった。現在ではレーザーがそれにとって代わっている。

山吹は急いで奥へ走っていった。

山吹が返ってきてからの小夜の行動は素早かった。

焼酎で消毒をすると、出血している部位を確かめて線香の火で焼いていった。

龍才はとつくに意識がなくなっていた。

「雲才先生、カイロを沢山作ってこの方に当ててください。出血のため体温がどんどん下がっております」

「お、おお」

小夜の補助をしている山吹は手が離せないため、雲才が外回りを受け持った。

「もう…これでいいか」

血が出てこない。大丈夫なのか分からなかったが、よしとせねばならなかった。皮膚の縫合を終えると、腕の縫合に入った。

小夜の額に汗が光る。最後に膿み防止のドクダミが塗られ厚く包帯をして処置は終了した。

雲才は龍才の脈を取った。出血したため弱々しかったが、死に脈は出ていなかった。呼吸もしっかりしている。カイロのおかげで体全体も暖かった。

「ふっ」

どっと疲れが出て雲才は椅子に腰を落とした。

「大丈夫みたいですネ」

小夜がじつと龍才の顔を見ながら言った。

「ああ、やれやれじゃ。一時はもうダメかと思った。あの様に深く斬られておつて助かることは、まずない」

「ここまで歩いてこられたので、背中が影響して歩けぬようになるとは思いませんが……右腕は使えぬようになるやもしれません」

「ん……」

雲才はうなるしかなかった。

忍びの長ともなる龍才の利き手が使えなくなるかもしれない、その重き試練。

一方で小夜の今回の活躍に驚嘆していた。大奥の年寄りがなぜ、ここまでケガ人を処置する腕を持っているのか。

「小夜さまは、どこで縫合の技を修得された？」

小夜と山吹は意外そうな雲才をかえり見た。

「雲才さま、小夜さまはあかりさまを一度縫ったことがあるんです」
「なんと、それは大奥でか？」

二人は肯いた。

山吹は、小夜があかりを縫合したことの顛末を話した。

「状況はそうじゃったとして……素人が人間の肉を縫うなど並みの度胸ではない。いやはや……小夜どのはすごいお人じゃ」

「前回より腕が上がりましたね」

山吹が笑った。

「そろそろ医者として開業できるやもしれぬ」
小夜はくすりと笑った。

その顔を見て山吹はハツとした。

『そつえば火事以来だ。月島さまがお笑いになったは』

心に灯りがともった気がした。

顔をゆるませながら山吹はその後、テキパキと後片付けをした。

追隨する影たち

「では行つて来る。帰りは少し遅くなると思うんで戸締りを忘れんようにな」

次の日。

雲才はつくば屋の商材の入ったつづらを背負うと出て行つた。大奥のあかりに事の詳細を報告するために。

そんな雲才を少し離れたところで見ている男たちがいた。

四人の町衆姿。まだ若い様子の彼らはうなずき合つと雲才の後をこつそりつけはじめた。

そんな事を知らない山吹と小夜は、落ち着かない様子で雲庵の玄関に入った。

果たしてあかりはどう反応するだろう？ 考えると気が気でなかった。

「小夜さま今日は妙安寺の日でしたね」

「本日は休みにさせてもらう。龍才どのも気になるゆえ」

「私が診ておりますので、どうぞお行きください。子どもたちに新しい歌を教える約束だったのでしょう」

「しかし……」

「雲庵はお休みですし……龍才さまも私と二人きりのほうが何かと気を使わずに済みますゆえ」

「そつまで言われては行かぬ訳にはいかぬな」

小夜は苦笑すると妙安寺に行く気持ちを固めた。

『いい気晴らしになろう。静山のことをずっと思い煩っているより子どもたちと居るほうが気も紛れるだろう』

支度をすると小夜は雲庵を出た。真冬の寒さがきりりと身に染みだが、空は青く高い天気であった。

雲才の庵と妙安寺はほんの五五〇間（一キロメートル）ほどしか離れていない。往来の人々を観察しながら歩いているとすぐに着いてしまう。大奥に入ってから外もままならない身分だった小夜にとっては町は何度見ても楽しめるものが溢れていた。

「小夜どの！」

ふいに野太い声で呼ばれた。往来を振り返えると砲術師範の江川太郎左衛門が駆けてきた。小夜のもとまで来るとはまずむ息をしたまま矢継ぎ早に質問した。

「これから妙安寺に行かれるのですか」

「はい」

「拙者も今から行くところだったのです。ご一緒してよろしいかな」
「ええ。もちろんです」

江川は小夜の荷物を受け持つと肩を並べて歩きだした。

「あれからしばらく妙安寺に来られなかったのですね」

「あ、はい。少し忙しかったものですから」

「そうですか」

そのまましばらく無言のまま歩く。

再び口を開いたのは江川だった。

「あの、今日は少し時間をいただけませんか。あ、いや、子どもたちに教えた後でかまわないのです」

「何か？」

江川は気まずそうに目をそらす。そして「んん……」と、うなづいた。何か言いにくそうである。それを見て小夜はくすつと笑った。

「分かりました。今日は子どもたちに歌を教えた後、お話を伺います」

「いや、かたじけない」

江川は照れたように視線を下に向けたまま頭をぺこつと下げた。

高位の砲術師範が一介の女人である小夜にここまでする理由はふたつしかない。ひとつ、小夜に惚れている。ひとつ、エゲレス語をはじめとする外国語関連の相談。

小夜は二番目の理由であろつ、と推測した。

あーあ……

前回のハルマ云々の口を滑らせたのは失敗だった。小夜は少し重い気持ちで妙安寺の道を歩いた。

ひゅん！

飛んできた光りものを雲才は一瞬で避けた。間髪入れずに町衆姿

の男たちが出てきて雲才を襲う。

「やはり、忍びか！」

雲才の身のこなしを見て男のひとりが叫んだ。

江戸城の門前。門番の取り次ぎを待っている間に男たちは雲才に飛びかかった。

雲才の最期

「そのつづらの中身を見せよ」

がっしりとした体格のよい男が短刀を持ったまま鋭い目で睨んだ。
雲才は何も答えずじつと間合いを測る。

『四人にはどう考えても勝てぬ……ここであかりに嫌疑がかけられる訳にはいかぬ』

「分かった。今、つづらはずす」

雲才は背からゆっくりとつづらを下ろす。地面に着くか着かないかの瞬間に、がっしり男に向かってつづらを投げつけた。

「そらよっ！」

その一瞬、男たちの体勢が崩れた。雲才は投げつけた男の横を突破して……——としたが、すぐ隣の男が雲才の行く手を阻んだ。

冷酷な目だった。

雲才と一瞬目を合わせたが、そのまま喉を刃で切り裂いた。

「ぐはっ！」

血煙を吐いて雲才はどつと倒れた。

「何やってんだ隼人^{はやと}！ 殺したら何もならんだろっ」
がっしり男が叱責した。

「こいつは吐くくらいだったら死ぬ。それがしのびだ。……雲庵と、この男が取りつぎを頼んだ者の名が分かれば問題ない」

隼人と呼ばれた若者はフイツとそつぽを向いた。

「ふん」

リーダー格だったがっしり男は面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「小矢太そいつの身ぐるみを確かめろ。長吉と隼人は門番の口を割らせろ」

リーダーは他の三人に命令した。

「つくば屋が殺され、おかしな男がわたくしの名前を聞いていったと？」

血相を変えた門番が靜山に事の真相を知らせのは、それからすぐの事だった。男たちは口を割らせた門番をわざと生かしておいたのである。

「そ、それで、つくば屋はどうなった」

「門前に喉笛を切られて倒れておりました」

——雲才さま——

あかりは目をカツと見開いたまま固まった。隣にいたおまつは倒れないかと心配したが、あかりはそのまま息を吐いた。

「つくば屋の亡がらはどこにある」

「平川門の庭に運ばれたと聞いております」

じつと黙りこんだあかりは、ぐっと門番に迫った。

「そなた、その二人の男たちを見たのであろう。どんな風貌であつた」

「わ、若い町衆姿でありましたが…しのびであつたやもしれませぬ。相当な手だれです」

「しのび…」

あかりは何かを考えるような目をしたあと人相を尋ねた。

「ひとりには眼光暗く整つた顔だち、年は二十四、五かと。もう一人は面長でやや垂れ目がち、年はやはり同じくらいであります」

「言葉になまりなどなかったか」

「いいえ。江戸育ちかと見まごう口調でありました」

はあ。

これでは分からない。

江戸城門前で起こつた殺人事件。あかりは窮地に立たされたのだ。門番は、表の役人にも同じことを言うだろう。

いくら大奥は治外法権とはいえ、あかりにとって不利であるのは変わらない。重い気持ちになりながら雲才の遺体の検分に向かつた。

目は閉じられていたが、喉を鋭利な刃物でパクリと切られた雲才を見た瞬間、あかりは激しい慟哭を感じた。

『これは、ひどい。なぜこんなことに……』

医術の師匠でもあつた雲才。あの温和でやさしい顔は、もう二度と見られなくなつてしまったのだ。涙をこらえながら手をあわせ、全身を確かめた。

『雲才さま、何か手がかりは、ありませんか？』

奥歯の奥まで確かめたが期待していたものは何も出てこなかった。門番が言う手荷物のつづらは持ち去られたのか無くなっていた。

あかりは、悲しみとは別の、つまり事件と関連する胸騒ぎを感じた。こんな時、誰にも相談できないのはなんと不安なものか。

そうだ！

『つくば屋の根城、雲才さまの診療所が神田にある、と手紙にあった。そこに誰か裳羽服津の者がおるやも』

あかりはつくば屋の住居記録を調べるよう御使番に言い渡した。

よしんば記録が見つかったとしても真実の住所を書いているとは思えなかったが、神田と雲才と診療所という情報があれば何とかなりそうな気がした。

大奥にはもどらない

小夜はじつと二冊の技術書を見比べてみた。

ひとつはオランダ語で書かれた鉄の精製方法、一方はイギリスのライフル砲の取扱説明書であった。

幕府の最重要機密である。

他言しないこと、を約束に小夜にその書類は公開された。

「どうであろう?」

何も発しない小夜に江川はややじれていた。

「よく分かりませぬ。ライフル砲は後ろから砲弾を入れて撃つ方法が書かれておりますが、これはあくまで撃つ方法です。この書だけでライフル砲の作り方は分かりませぬ」

「うーん、やはりな」

この時代、日本では前から砲弾を入れて打つ大砲しかなかった。後ろから入れて使うライフル砲は、次の弾を込める時間が短縮できたのだ。

「蘭語の書は鉄の精製方法がかなり詳しく載っているようですので、こちらを参考にまず炉を作りその鉄で簡単な大筒を作ってみてはいかがでしょう」

「そちらはもうだいぶ進んでおる」

小夜は驚いた。既に鉄が精製できる炉があるうとは。

「自宅の庭に小型の炉を作って鉄を熱し鑄型に流し入れるところまではしたのだが、実際に試用しておらなので耐久性はまだ不明なのだ」

「なんと既に実験段階であるとは」

鍋島藩の斉正から以前大筒の話聞いた時はその威力に無力感を感じていたが、江川の精力的な行動を知って少し希望が持てた気がした。

「江川さま、わたくしで出来ることがありましたら、どうぞお使いください。この国が少しでも強くなれるようお手伝いしたいのです」

江川は深くうなずいた。

「小夜どのには、ライフル砲の説明書をまず訳していただきたい。その後、構造を我々と一緒に解明してください」

「分かりました。けど、辞典が今手元にはないのです。見たところ専門用語がかなり入っておりますので……わたくしには分からない言葉が沢山あります」

申し訳なさそうに小夜は目を伏せた。それを聞いて江川もしばらく考え込んでいたが、不意に何かアテがあるかのような表情になった。

「では次の機会に拙者がお持ちしよう。蘭語訳で期限つきだがよろしいかな」

「もちろんです、よろしく願います」

高まる気持ちで小夜は頭を下げた。

——そうだ、このままやられる日本ではない——

その為に自分に出来ることがあるかもしれないなんて、わたくしは幸運だ。大奥にいて古いしきたりに振り回されるのは今や本意ではない。

この時、小夜は決めたのである。

もう、大奥へは帰らない、と。

冷たい土と愛しい人

思ったより遅くなってしまった。

時間はまだ宵の口であつたが冬の日の暮れは早い。寒風吹きすさぶ神田の町を小夜と江川は急ぎ足で歩いた。雲庵の門前まで来ると江川は別れを言い去った。

「小夜です、遅くなってすみません」

戸を何度か叩き声を張り上げてみたが、中から応答はない。

『寝ているのかしら』

開かないと思いつつ戸を引くとするりと開いた。

『?!』

小夜は違和感を感じた。

ひんやりとした室内は奥の部屋まで真っ暗である。

「山吹ー帰ったぞ。どこにおる?」

中に入るのがためらわれたため声を張り上げた。返事は無くしんとしたままだ。意を決した小夜は持っていた提灯をかがげ、ゆっくりと奥の部屋に進んだ。

玄関のすぐ横の部屋は患者の待合である。その奥が診察所。今は龍才が寝ているはず。だが龍才の姿はなく布団が大きく乱れたまま、部屋には多くの足跡が散乱していた。

『これは...』

小夜は真つ青になった。

大きく開け放たれたふすま、その向こう部屋に小夜は信じられないものを見た。

それは杭で心臓をひと突きにされている山吹の姿であつた。

「ひっ」

畳に達するまでつき刺された杭につながれた山吹は呪詛のオブジェのように見えた。小夜がかろうじて提灯を持つ手を保つことが出来たのは、壁に紙が貼り付けられているのを見つけたからだつた。

密教の札のような文字だつた。小夜には全く読めなかつたが不気味でたまらない。

恐ろしくなつて家から飛び出た。

人どおりがない冬の町を、草履も履かずに小夜は駆けた。

後ろから呪いの黒い影が追ってくるような気がして必死に逃げたのである。

「あっ！」

小石に足をとられて上半身からどつと倒れた。

倒れたまま後ろを振り返つたが、何も追いかけてなどこない。

ほうと息を吐くと恐ろしさと悲しさがこみあげてきた。

『いったい何があつたのじゃ、山吹』

涙があふれて止まらなかった。

『どうしてこんな事になる……大奥にいたらこんな風になることな

どありえなかったものを。どうしてもわたくしは出てきてしまったのか』

ボロ布のように倒れている自分を顧みて後悔が全身を被った。今や世界でたった一人になってしまった。姉妹のようだった墨越も死に、たった一人の味方だった山吹も無残に殺された。

『やはり、神も仏もおらぬ。もうどうしてよいか分からぬ』

しんと冷える土は、小夜の体温を容赦なく奪おうとしていた。

そのまま気が遠くなりそうだった。

『このまま眠れば死んでしまう……起きなければ』

そう思っているのに精も根も尽き果て急速に意識が無くなるうとしていた。夢の中に静山が出てきて、ふわふわと笑いながら暖かい葛湯を差し出してくれた。

『ああ静山……体が温まるぞよ』

豪華な部屋には火鉢が焚かれている。

静山は優しく笑っている。

——いい気持ちじゃ——

「何かおりまする」

ひとりの女が声を上げた。

通りを曲がったところで黒い影が倒れているのを見つけたのだ。
「行き倒れでございましょう。なるべく離れて通りましょう」

道案内をする中年男が提灯を持っている。近づくにつれ、ふたりは警戒をしながらも倒れている影をじっと見た。

「女性のようです。少し声をかけてみましょう」
女が男に提案した。

「いけません。物取りかもしれません」
「このように寒い中、倒れているだけでも命取りです」

命をかけて物取りをするなど考えられなかった。女の決意を知って男はとまどいながらも倒れている影に近づいた。

「これ、もし」
男は影の肩をゆすつた。

「ん……」
何とか生きているようだ。

「このような所に倒れてどうなされた」
提灯の明かりをその人物に当てた。

その瞬間、女は息を呑んだ。
「ああ」

弾かれたように倒れている小夜の肩を抱き上げた。
「月島さま」

青く閉じられていた瞼がゆっくりと開いた。
小夜は不承な顔をして女を見上げた。

「静山？」

「はい、静山です」

「これは夢か……わたくしは死んだのか？」

「いいえ、死んでなどおりませぬ」

あかりは泣きながら小夜を抱きしめた。

「やっと……やっと会えました」

あかりは小夜の体をしっかりと抱いた。

『もう離しませぬ』

強くきつく抱きしめたその体は

柔らかく細く、そして冷たく悲しかった。

肌のぬくもり（前書き）

第七章

肌のぬくもり

「寒い……寒い、寒い」

小夜の唇は紫色でがちがちと歯が鳴った。
低体温になっていた。

布団に寝かしつけたものの自力で体温を上げられないのだ。

あかりはお種たねに頼んで火鉢を持ってきてもらったが、小さな炭火ではなかなか室温を上げられない。

意を決してあかりは衣服を脱ぐと布団の隣にすべりこんだ。
「絶対に死なせませぬ」

小夜の腰紐を解くと肌と肌を重ねた。密着するほど体温を上げることが出来るはずだ。ぞくりとするほど小夜の体は冷たい。しかし放すことは出来なかった。

『すべてわたしの熱を差しあげます。だからどうか……どうか死なないで』

あかりは目をきつく閉じると、小夜の頬に唇をつけた。

どれくらいだったのだろう。小夜の血潮がほんのりと暖かくなつた気がした。縮じこまっていた筋肉も緩んで唇に赤みが戻った。

あかりは安堵した。皮膚を隔ててはいたが、ぴったりと重ねていたため、どこまでが自分の体かが分からなくなっていた。お互いの血さえ交換しあっているように感じる。

——このまま、こうしていよう——

緊張がとけると急に眠気が襲ってきた。そして、小夜を抱いたまま眠ってしまった。

「ここはどこじゃ」

小夜は目が覚めると部屋を見回した。もう外は明るかった。

「気がつかれたんですね」

何かを思案している風だったあかりは相好を崩した。

起き上がる小夜に半纏をかけやりながら答えた。

「こちらはお種さん、って方のお家の二階です。お種さんは女髪結い師で、頼りになるおかみさんなんです。わたくしも昨日の下男げなんの源平を紹介してもらったんです」

小夜は昨夜あかりと一緒にいた初老の男を思い出した。しかし、大奥にいたあかりがなぜ女髪結い師や下男と懇意なのか分からなかった。

「いま、暖かい白湯とおかゆを持ってまいりますね」

「静山」

小夜が何かを話したそうにしたのをあかりはさえぎった。

「大丈夫です。こちらにわたくしや月島さまがいることは誰も知りません」

そう言っただけだと階段を下りていった。

その間、小夜はふいに何かを思い出していた。

ずっと自分のそばで包みこんでいてくれた存在――暖かく安心で、

それでいて甘酸っぱいような…

『そうだ。静山であつた』

しっとりした肌の感触が思い出された。

素肌を合わせて抱き合うのは何ともいえず気持ちよかった。
「おまたせしました」

明るく膳を運んできたあかりを見て、小夜はちよつと気まずそうに顔をそらした。

おかしなことを口走ってしまいそうだった。

大奥にいるおまつは、落ち着かなかつた。

あかりことお静の方が出ていってもう半日になろうとしている。
下働きの娘に化けてお宿さがりの名目に出ていったのだが、いつ敵方の年寄りにはれるか分からない。考えただけで肝が縮こまりそうだった。

「もし、村岡さまや他のお年寄りが来られたらどうします？ いいえ、お年寄りならなんとか仮病でも誤魔化せますが、上さまが見舞いでもしたい、言われたらどうするのです」

「流行性の風邪ゆえ上さまに感染つては一大事、見舞いはご辞退申し上げる、と言えばよいのじゃ」

「そのように上手い具合にいきますかどうか」
出ていく時の会話を思い出しておまつは気が重くなった。静山の

大胆さは月島以上である。門前殺人の事件も控えている今、いつ誰が取り調べに来てもおかしくないのである。

「あああ、早く帰ってきてください……お静さま」

おまつはウロウロと部屋の中を歩きながら手を合わせた。

実際、大奥からひとりで出たあかりは、町を案内してくれる人が必要なことに気づいた。

知り合いのいない者にとっても、そこは江戸、口入屋くちいれやなど人を斡旋してくれる場所に事欠くことはなかったが、いかんせん信用がおけなかった。

そこで考えたのが、女髪結い師だった。

彼女たちは情報通であり、女性ならではのネットワークを持っているだろう、と推測したのである。髪結い所に入ったあかりは、そこで店で一番のやり手と思えるお種を発見したのである。

案の定、お種は面倒見のよい中年女性であつたし、ひと財産を築いていたらしく持ち家さえ持っていた。その二階に気前良く、小夜ともども泊めてくれたのである。それには何より、あかりの渡した多額の金子も効いていたが。

「火事後、どうされていたのですか」

ひと段落ついた後、あかりはどうしても気になっていたことを聞いてみた。

小夜はあかりの眼を見つめると、はあと息を吐いた。
「何から話せばよいのやら……」

そう言ったあと、今までの顛末を話し始めた。

風魔の狙い

「俺がつけられていたとも知らず、雲庵に來たせいで……」
山吹の亡骸^{なきがら}を前に龍才は声を震わせた。

「ケガをしていたのです」

無表情のままサエは答えた。

ここは雲庵。小夜があかりと出会った次の朝のことだった。江戸に出てきていたサエと勘介は、とある長屋で暮らしていたのだが、朝早くに龍才から不意の文を受け取ったのだった。

×と雲の絵とが描かれた文。それは死人あり、雲庵に來い、ということだと、ふたりはすぐに分かった。

ふたりは山吹の殺された現場を見た。激しい衝撃を受けたが、呪詛と悲嘆に泣きながら山吹の遺骸をきちんと整えた。

そして今、布団に寝かせたところであつた。頭元にはささやかな枕飾りをこしらえた。

＊枕飾り＝香炉や口

―ソク立てなどを置いた机

「風魔のやつ、絶対に許せねえ……」

「勝手なことするんじゃないよ、勘介。親方の指示を待つんだ」

「だって山吹があんな目に合わされて黙つてろつて！ あの紙はあきらかに俺たちへの挑戦だろっ」

「だから余計にあんな挑発にのっちゃならない。雲才さまとも連絡がつかないのに」

山吹の殺された現場にあった紙。
それは真言の呪詛文字で、最後には？風？の一字が刻んであった。

風魔——を表している。

風魔一族は元は北条家のしのびであつたが、江戸幕府が開かれてからは直轄の主を持たず、ながれに近い形で存在していた。

だから風魔ということが分かつて、その雇い主が誰なのかは不明である。動くのがやつの龍才が逃げおおせたのは山吹が囷おとことなつてくれたからだつた。

風魔の四人もそれが分かつていて山吹ひとり殺し龍才を逃がした。龍才の背後を知るためである。

「俺たちの正体がいづらに分かつたかどうかは分かん。けど、俺がいづらから逃げられん事は確かだ。だったら、もうここから動く必要はない。それに……」

龍才は雲才と小夜のことが気になっていた。

二人が何も知らずにここに帰ってきたら危険だ。雲才はまがりなりにもしのびであるので自分で何とでもしよう。一番の気がかりは小夜だつた。

昨夜は帰ってきたのだろうか。

「もう風魔は襲つて来ぬと？」

サエが荒らされた部屋を見て皮肉な口調で尋ねた。

「我らの正体が分からねば再度、襲ってきても不思議はありません」
「しのびを正面から襲って口を割らせるなど不可能な事は風魔も分か
かっておよう。あいつらも我らも、ここからは腹の探りあいとなる」

「家倅君いえさちきみの命を我らが狙っているのを知っておる、とすると、それ
を阻止したい者……が裏にあるということか。まさか將軍家そのも
のという訳ではあるまい」

勘介がそう言ったあと、しばらく沈黙が流れた。

「もちろん將軍家も含まれるだろうね。だけど、それならお庭番か
伊賀者を使うはず……まあ後腐れのない風魔を使う意味もないでは
ないでしょうけど……」

「俺には將軍家が動いていると思えん。……それより今は我らの方
が不利だ」

龍才は苦々しい表情でうめいた。

「この雲庵に我らの正体を現す手がかりが残っているとは思えませ
んが……万一あやつらに知られておつたらどうするおつもりです？
我らの正体が分かれば、自然お館さまの正体にも気づきましよう」

サエの言うとおりだった。裳羽服津は筑波を根城としているので、
その直轄である水戸藩が浮かぶのは自明であつた。

「俺が死んでこの一件が片付く、という問題ではもはやなくなった」
龍才は血の気のない青い顔でつぶやいた。まだ傷も癒えぬ重傷者。
その身に対して過酷すぎる状況であるのをサエは気づいた。

「龍才さま、後はあたしと勘介で考えますゆえ、どうぞお休みください。いい考えが浮かんだらすぐに龍才さまにお知らせします」

そう言つと無理やり龍才を布団に追いやった。

『そつえば雲才さまはどこへいかれたのですか？ 状況みて姿を隠しておられるのでしょうか』

いっとう声を落としてサエは龍才に尋ねた。龍才が眠りにつく前に雲才のことだけは聞いておきたかった。

その質問に龍才は言いにくそうな顔をした。

『雲才さまは……大奥のあかりに会いにいかれたまま戻られていない』

サエの耳元で龍才はささやいた。どこで聞き耳をたてていられるか知れないからだ。

『あと、ここで山吹たちといっしょに暮らしていた小夜という女がいるのだが、昨日、妙安寺に行つたまま姿が見えん。帰つたところに風魔に出くわしたか、山吹の死体を見たか……いずれにしろ行方不明だ』

その話を聞きサエは合点がいった。

ずっと龍才の様子がおかしかったからだ。危険な雲庵にいることにこだわったのは、色々な人間がまだ絡んでいるからだ。

雲才、あかり、そして小夜という女人。

ふたりだけの時間

「だめじゃ 靜山、あそこに行つては危険じゃ。呪いがかかつておるのじゃ」

小夜は雲庵に行くというあかりを必死で制した。今でも暗闇でみた串刺し血まみれの山吹と、恨みに満ちた護符を思い出しゾツとした。

「大丈夫でございますよ。わたくしはこう見えても呪い返し術を持っておりますし。山吹をそのままにはしておけません」

それは小夜とて同じ気持ちであつた。火事からずっと一番身近にいて助けてくれた愛しい山吹。それを思っただけで涙が出てきた。

「だけど一人で行くのは絶対にダメじゃ。山吹を殺した奴らがまだおるかもしれん。わたくしも一緒に……」

「いいえ。月島さまは来てはなりません。これは我々が一族の問題なのです」

きつぱりとあかりは言いきつた。今までそのような口の聞き方をした事がなかったあかりの迫力に小夜は飲まれた。

「だが、怖いじゃ。そなたまで失つたら、もうわたくしは生きていけぬ。墨越も山吹も……皆いなくなつてしまった」

「月島さま」

あかりは膝に置いている小夜の手をとった。

「大丈夫です。わたくしもやつと月島さまにお会いできたのに死ぬ

つもりはありません」

ふたりはじつと見つめ合った。小夜はあかりの首に手をまわして抱きしめた。

「絶対に死んではならぬ」

「……はい」

幸せそうにあかりは答えた。小夜はあかりの髪を何度も撫で、そのままあかりの頬をなぞった。美しい丸い頬を感じながら胸が熱くなってきた。

あかりは気持ちよさそうに目を閉じている。深いまづげがかすかに動いた。

小夜はそのままあかりの唇に口づけた。永い時を埋めるかのように、ふたりはお互いを味わった。深く、深く、何度も。

あかりの左肩の着物を外そうとした時、小夜の手をあかりが止めた。

「いけません。お体にさわりまする」

「もう大丈夫じゃ」

「いいえ。月島さまは死にかけたのですよ」

「こんなトコで止めるほうが、体に毒じゃ」

その言葉にふたりは顔を見合わせると、ぷつ、とふき出した。そのままあかりは小夜を押し倒した。

「だめでございます。わたくしが、おぶさっておりますゆえ、もう月島さまは動かせぬ」

二人は嬌声を上げて笑いながらもがきあつた。
あかりに押さえられた四肢を、小夜はどうしても自由にすることが出来なかった。

「わかった、わかったから手を解いてくりやれ」

あかりは小夜の手を自由にすると、そのまま小夜の体軀をぎゅつと抱きしめた。小夜は、大奥にいた頃より少し肉がついたようだった。それでも十分に細かったが、外での生活のほうがストレスが少なかったようだ。

「わたくしが、お守りいたします」

「うん」

満たされたように小夜は目を閉じてうなずいた。

「わたくしもそなたを守りたい。だから大奥へ帰る」

耳元でささやかれたその言葉にあかりは驚いた。

「え」

「そなたをひとりあの魔窟で戦わせるわけにはいかぬ」

あかりにとってはもちろん、大奥のすべてを知りつくしている小夜にとつても、状況が生半可でないことが分かっていた。

「いいえ。戻ってきてはなりません。先ほども申しましたが、月島さまは火事の出火元とされているのです。もし生きて戻ればどんなお咎めがあるか分かりませぬ」

「それは大丈夫じゃ」

小夜には何か算段があるようであった。

あかりはじつと小夜の顔を見つめた。もちろん、あかりとしてはずつと小夜と一緒にいたかったから大奥に帰ってきてもらいたかった。だが、それは再び激しい戦いに駆り出すことだ。何より、小夜には大奥勤めは向いていない。

「まだ、いけません。月島さまのお体では」

「そなたがいるので大丈夫じゃ」

いたずらっぽく小夜は笑った。

「いいえ。もう少しだめでございます。その代わりわたくしが月島さまに文を差し上げます」

「文？」

「はい。月島さまが大奥に帰るころあいを整えます。だいたい、月島さま、どうやって大奥に帰るおつもりだったのです？」

そう問われては、小夜はぐっと黙った。

「そなたイジワルじゃな」

すねた顔でふくれる小夜はなんとも可愛らしく、あかりは小夜の唇をちゅっ、とついばんだ。何度もお互い口づけを繰り返すと再び火がともりそうだった。

「次はいっぱいいたしましょう」

「そなたは本当にイジワルじゃ」

あかりに組み敷かれて手足の自由の利かない小夜はうわずる声でつぶやいた。

なんとかあかりの下から手を出せたので、お返しをするように目一杯あかりを抱きしめた。

「絶対に迎えをよこすのじゃぞ」

考えることは、山のようにある。
だけど、今は

温かいふたりだけの時間を共有していたかった。
それが何よりも大切なことだった。
小夜は目を閉じた。

雲庵で待つ

あかりが雲庵に現れたのは昼過ぎのことだった。

裏口から影のように出現したあかりに気付いたのはサエだった。
「なぜ、ここにそなたが？ 大奥を抜けてきたのか？」

肯いたあかりは、薄暗い室内で笠を脱いだ。

「サエはどうしてここへ？ 龍才さまは？」

「龍才さま……は奥で休んでおられる」

——あかりはどうして龍才さまがここにいると知っているんだろう

「今朝、龍才さまに勘介ともども呼び出されたのさ」
不承ながらもサエは続けた。

四人は龍才の寝ている部屋へ集まった。青白い顔していたが、無事であるらしい龍才の顔をみてあかりは胸を撫で下ろした。

小夜からもケガの状態を聞いていたが実際に会うまでは不安だったのだ。

「山吹は？」

いの一番に聞きたかったことをあかりは口にした。

「死んだ」

龍才がきっぱりと言った。

「遺体はきちんと整えて、妙安寺で弔ってもらった」

沈痛な面持ちで経緯を説明した。

「それで……その……」

「山吹が殺されていたのは、この部屋だ。我らは忘れん。串刺しにされた山吹のうえに俺は寝ている。山吹の無念を俺の中に取り入れるためだ」

思いつめた龍才の言葉にあかりはどう言っていいたか分からなかった。あの小夜こと月島でさえ、おののいた遺体状況である。だが、その恐ろしさより、龍才たちには、怒り、恨みのほうが大きいのだ。

「これを見よ」

山吹の遺体といっしょに貼ってあった紙を龍才はあかりに手渡した。

「これは……密教で使うような文字に見えますが」

「呪の護符だ。これが山吹の遺体と一緒に壁に貼ってあったのじゃ。だから、我らだけで風魔を片付けねばならぬ」

——呪いが裳羽服津一族に及んでは困る——

そういうことか。

あかりは納得した。

「今、風魔と言われましたが、ここに？風」と書いてあるのがその証ですか」

「そうだ」

「その風魔たちは若い江戸風の町衆ではありませぬか」
「なぜ知っている」

あかりは一呼吸置いた。

「雲才さまが江戸城、平川門の前で殺されたのです」

「なんだって！」

三人は驚愕の表情を浮かべた。

「二十四、五歳の江戸風の若者が二人、いえ、本当はもっと多いのかもしれない」

「四人だ」

龍才はすかさず訂正した。暗闇の中で二度も奴らと対峙したのだ。

「きやつらは雲才さまがわたしを呼び出したのを知っています」

「それで大奥を抜けてきたのかい」

サエがいぶかしげに尋ねた。

「ええ……」

自分の窮地を何とかしたい為に、裳羽服津の誰かに連絡をつけたかったのだが。今や自分に近しい裳羽服津の四人が窮地に立たされている。何とも複雑な様相を呈していた。

「これからどうされるのですか」

あかりは龍才に尋ねた。

「雲庵で風魔が来るのを迎え撃つ所存だ。どのみち俺はこの体で動けん」

「後、ちよつと……雲才さまが面倒みていた小夜つて人が、ここに帰ってくるかもしれないのも気になってるんだよ。龍才さまは」

勘介が面白そうに口を開いた。

「えっ」

「なんでも女だてらに医術の腕が、かなりすごい人なんだって。ね、龍才さま」

「オマエはどうしてそう余計なことを……」

「大丈夫です」

あかりが口を開いた。

三人は驚いてあかりを見た。

「小夜さまは、安全なところへお移しました。こちらには絶対に近寄らないように言いわたしております」

「お、おまえ小夜どのと知り合いだったのか」

「はい」

あかりはにっこりと笑った。

暴かれた秘密（前書き）

第八章

暴かれた秘密

なんと運の向いてきたことか。

大奥年寄り・村岡は飛び上がりたいような心地であった。

なぜなら、姪の笹野が懐妊したからだ。その日のうちに笹野は大方さまと呼ばれるようになり、南向きの部屋さえ賜った。

『大奥筆頭にいつとう近かった月島も死に、笹野が懐妊したいま、次の大奥総取締りはこのわたくしじゃ』

冬も終わりに近づいたうらかな午後、村岡は水仙の香りを胸いっぱいの味わった。

そんなある日、村岡は、ある饗宴きやうえんに呼び出された。

「ほんに、老中首座復帰おめでとございまする」
「ん」

上座には満足げな表情の水野忠訓みずのただくにが居た。五十歳の誕生日を迎えただばかりの水野は、細身で神経質そうな男であった。

「一時はどうなることかと思っただが、わしにもまだ運が残っておつたらしい」

政変にあい、老中を解任された水野だったが、再び老中の主席に返り咲いたのだ。

「何をおっしゃいまする」

「火事の再建費用を集められなかった首座の土井が失脚になったおかげだ。ほんに、何が幸いするか分からぬ。まあ、それはそなたの

おかげでもあるの」

水野は、嫌味たらしく、ふふふ、と笑った。一の長つばねからの出火を言っているのである。江戸城本丸を焼いた火事は、村岡の部屋からの過失であつた。

「せっかく政敵である阿部さまひいきの月島部屋の過失に出来そうでしたのに……」

「ふん、大奥が絡むとロクなことがない。じゃがの……あの何とかいう側室、色々あるのがわかつてきたぞ」

「お静の方ですか？」
「そうだ」

折にふれ、水野にはお静の方となつた静山の邪魔くさをばやいていたのである。

水野は手を二度叩いた。奥の障子のがらりと開くと、がっしりとした体格の男が黒装束に身を包んで控えていた。

「平川門の前で殺された小間物屋と、側室お静の方の関係をお話しろ」

水野が低い声で命じた。

「はい。お静の方さまは、どうやら家倅さま暗殺を企んでいたしのびの一味かと」

「なに、しのびじゃと？」

村岡は顔色を変えた。

「はい。小間物屋を大奥からの連絡に使っていたのは確実にございます。しかし、一味はどうやら孤立しているらしく、今のところ家いえさち

倅さまを新たに亡き者にする計画は立てられていない様子です」

「どうしてそうだと分かる？」

村岡はなじるように言った。

「一味の根城をずっと伺っておりますが、動きが全くありません。誰かに連絡をとった様子もありません」

「いったいそこには何人くらいおるのじゃ」

「女ひとり、男ふたりの三人です。静の方を入れると四人であります」

「たった四人かえ」

拍子抜けしたように村岡は笑った。

「四人であつても油断はなりません。しのびであればたったひとりでも……」

男が全部を言い終わらない間に村岡が口をはさんだ。

「そんなことより、お静の方が、家倅さまの命を狙っている大逆賊の一味とは……とんでもない秘密じゃ」

「で、あろう」

満足そうな顔をして水野はうなずいた。鬼の首をとったかのような表情で村岡は立ち上がった。

「ほほほ、この切り札。なんと使つてやろう」

「落ち着かれよ、村岡どの」

「水野さまはどうされるおつもりですか」

「どうもせぬ」

「どうも？」

怪訝な顔で村岡は水野を見た。

「先ほども言ったとおり大奥は下手に手を出せば、こっちに火の粉が飛んでくる。こちらは切り札としてお静の方の身元を知っておればいいだけだ。だいたい、まだ何もハッキリしたことは分かっておらんのだ」

「しかし、家倅さまの命を狙った連中と分かっているではないですか」

「背後も分からぬでは、小者をあげたとてどうする。捕まえたとしても口を割るとは思えん」

水野があごをしゃくると、黒装束の男は障子をパタンと閉めた。しのびの周到な行動をみて村岡は、じっと考えた。

——あのお静の方がしのびであるとすれば——

「お静の方は黒川藩出身と聞いておりますが……お静の方の大奥入りに関わっている万里小路さまも何やらありそうでございます」

「ほう」

よく気付いた、という顔をして水野は肯いた。大奥の背後には各藩の思惑が渦巻いている。

「わしも黒川藩を少し調べてみたが、ほんに金に困っておるようじや。そんな藩が多額の金子きんすのかかる大奥にどうやって娘を入りこませる？」

「藩のどこから金山きんざんでも出たのでしょうか」

「そう都合よく金山が出たら黒川藩は借金をすぐに返しておるであらう。村岡どの、お静の方は間者じゃ。貧乏藩がそういった組織を持てると思うか？ 恐らく、取引であろうな」

「取引？」

「どこその組織か藩かは知らぬ。したが、黒川藩の窮状を肩代わりする代わりに、間者の身元として取引されたのであるう」

「いったいどの誰がそのようなことを……」

答えが出ないのは分かっているもつぶやかずにはいらなかった。

「村岡どの、万里小路どのもお忘れめさるな。静の方の後見を最初から買って出られているからには白とはいえまい。万里小路どのと静の方に共通するものを調べるのが早道であろうな」

その言葉に村岡は深くうなずくのだった。

そうだ。万里小路は何か知っている。そして、何かを企んでいる。しかし、いったい何を？

村岡にとって邪魔な静の方と万里小路がいなくなれば、大奥総取締は手に入ったも同じである。

みずのたたくに
水野忠訓は村岡を動かそうとしていた。しかし、動かなくても損はしない。

コントロールがききにくい女の園は、下手に手を出すと何が出てくるか分からない。それならばいっそのこと野心に燃えた村岡に好きにやらせたらほうがい。責任は村岡が持つてくれるのだ。

水野忠訓は慎重であつた。

江川の考え

小夜はやはり大奥に戻ることを決意した。

あかりは手紙を待て、と言ったが、何より情報が手に入らない立場には耐えられなかった。

——しかし、どうやって帰る——

一介の町の女となった今、誰が自分を大奥の御年寄り、などと認めよう。

しばらくたって思い浮かんだのは、鍋島なべしま斉正のことだった。

『彼に相談すれば、何とかなるかもしれない』

そのためには、まず佐賀鍋島藩の江戸上屋敷の場所を調べるところからだった。

『お、ここだ。やましたしもんない山下御門内だよ、こりゃ』

奉行所の下っ端役人は、大仰な声をあげた。

鍋島藩の上屋敷は江戸城の外堀ぞいにあつた。さすが、大大名である。小夜は書いてもらった地図を持って奉行所から出るところで、不意に声をかけられた。

『小夜どのではないか』

それは江川太郎左衛門であつた。

小夜にとって何とも時機の悪い再会だ。

「ずっと探していましたぞ。家のほうに行っても、ずっと留守で」

「申し訳ありません」

気まずい思いから目を合わせることが出来ない。江川は、一瞬で何かを感じ取った。

「今から団子でも食べに行きませんか」

そうだ。江川には、きちんと断らねばならない。

「……はい」

小さいながらもハツキリとした声で小夜は返事をした。

江川太郎左衛門は、簡易な軽食も出す料理茶屋に入った。

そこは個室となっており、寄合、饗応から句会や暮会などの用途に使われていた。上流階級の女性としての生活しか知らない小夜はキョロキョロしながら後に続く。

「めずらしいですか」

「はい」

江川は慣れた様子で注文をすると、話を切り出した。

「いやー なかなか翻訳が進みません。やはりエゲレス語から蘭語に直して、また和訳するという作業が二度手間で……」

「あの、そのことですが、江川さま」
「ん？という顔をする江川。」

「わたくし……その、翻訳のお仕事が出来なくなりました」
「なんと」

何かあることを予測していた江川はさして驚くでもなくそう言った。

「本当に申し訳ございません。もちろんライフル砲のことは決して他言いたしません」
しばらくの沈黙。

そして

ふう、と江川は息を吐いた。

「小夜どの」

小夜は頭を上げられなかった。

「もし、よろしかったら理由わけを話してくれませぬか。いや、翻訳のことは少し置いておいて。あなたと分かれて何があったのか。どうして雲庵くもあんはずっと休業なのか」

「休業？」

「？しばらく留守にするので休業します？という張り紙が貼ってあったのだが、知りませんでしたか」

「あ、はい」

ふたたび沈黙がふたりを包んだ。小夜としてはどう説明していいか分からなかった。雲庵のことやあかりたちの裏のことは知らないのである。しかし、自分のことなら分かっている。大奥に帰りたい、という意思だ。

小夜は、江川に帰る手立てを相談してみたくなっていた。鍋島齊

正に頼ろうとしたが、本人が国元くにもとから帰ってきているかも不明なのである。協力者は多いほどよいのではないか。

小夜は意を決した。

「江川さま、わたくし、大奥の年寄りでした」

一言ずつ言葉を区切りながらはじめた。それを聞いて江川の目が少し大きく見開かれた。

「年末の江戸城の火事をご存知ですね」

「ええ」

「あの火事でわたくしは焼け出されたのです。もちろん故ゆえあつてですが。一時はもうこのまま町で暮らそうと決意しておりました。ですが、そうも言っていられなくなりました。大奥に帰らねばならないのです」

小さく息を吐いた江川太郎左衛門は、おだやかに微笑んだ。

「あなたさまが、帰らねばならない、と決めたのでしたら、それがよろしいでしょう」

「それが……分らないのです。江川さま、わたくしがどうやって江戸城、大奥に戻ればよろしいでしょう」

その後、小夜が大奥では焼け死んだことになっていること、雲庵で山吹が殺されたこと、それが大奥や幕府の問題と関係あること、などを話した。

「うーん」

江川はうなりながら目をとじた。そして、うなりながらあつちを

見たり、こつちを見たりして何か考えているようだった。

「出来るかどうか分かりませぬが、やってみましょう」
「では？」

小夜は期待で目を輝かせた。

「少し……段階が必要ですがよろしいですか。何しろ、大奥は表からの攻略は全く効きませんからな。ましてや、小夜どのは、失礼、月島さまは死んだことになっておられるのですから、これを覆くつがえすとなると……並大抵ではございません」

「時間がかかりますでしょうか」
「うーん。月島さまの働きによりますな」

「わたくしの？ わたくしは何をしたらよいのでしょうか？」
「翻訳です」
「え？」

意味が……分からない。

「とにかく、こちらの資料の翻訳をしてください。うまくいけば三ヶ月ほどで大奥に帰れるでしょう」
「どういう意味ですか」

江川太郎左衛門はにやりと笑った。

ハメられたあかり

卯の花も咲き終わり、大奥では夏の衣替えにさしかかる季節となった。

衣装は女の見得の張り合いを含んでいたので、呉服屋が出たり入ったり大騒ぎの時期でもある。高級女中たちは数度しか袖を通さない呉服を、何十枚も購入する。

大変な金額だ。商人にはおいしい商売であり、この利権にあずからうと賄賂が横行していた。もちろん、呉服以外でも、同じである。

大奥の異常ともいえる贅沢に、あかりは今もって慣れることが出来なかった。小夜のこと、龍才たちのこと、水戸からの指示、で頭がいっぱいなのに、おまつたち部屋子は、衣装ごときにあれこれとうるさいのだ。

そんな中、突然、村山がたすぎがけ、鉢まきをした女たちを伴って、あかりの部屋に現れた。

「お静の方、上意である。そなたをこれからひったてる」

「ええ？」

おまつたち部屋子は声をあげた。

「そなた、不審なやからと結託して家倅いえさちさま暗殺を企てる大逆賊なり。これより審議に入るゆえ、神妙に縛ばくにつけい」

——しまった！ どこでバレたのであろう。証拠の文はすべて焼いておるが——

「ど、どういうことでございますか。なにゆえ、お方を、そのように」

縄で縛ろうとする女たちに、おまつは割ってはいった。

「お静の方が懇意にしておった？つくば屋？はクセモノの巣窟であつたのが判明したのだ」

「なにか証拠があつたのでしょうか」

おまつがなおも食い下がる。

「もちろんじゃ。お静の方とつくば屋が交わした、暗殺をもくろむ文が発見されたのじゃ」

「そのようなもの、でっちあげにござりまする！」

あかりは声を荒げた。暗殺のことなど書いたことがなかったし、何よりしのびの掟として、文を置いておくことなど決してなかったのである。

「言い訳するとは見苦しいぞ。そら、ひったてよ」

あかりの力を持つてすれば、数人の女たちから逃げることは可能であつたが、様子を知りたかつた。そのまま縄でしばれると大奥の隅にあつた牢に入れられたのだつた。

ハメられたことは確実である。

何度か取り調べを受けるうちに色々と分かつてきた。つくば屋、つまり雲庵に取り調べの手が入つたこと、龍才たちは役人に抵抗して逃げたこと、そして自分の類者として、黒川藩、万里小路まで密

かに取り調べを受けていること、などである。

困った。龍才たちは無事に逃げおおせたのであろうか。せめてもの救いは月島である小夜に類が及ばなかったことである。

静かだった牢の入り口で、なにやら人の言い争う声が聞こえた。
家賢だ。村岡らに着いてくるな、と怒っている。ほどなく一人、牢の前に現れた。

「顔をあげよ」

あかりは、ゆっくりと面を上げた。きりり、とした表情は悲壮感もなく、とまどうほどに美しかった。家賢は信じられなかった。あかりが、暗殺集団の仲間などと。

「どうしてじゃ、どうして余を騙しておった」

「騙してなどおりません」

「では、あの文は何なのだ。そなたの筆跡であつたそうではないか」
「わたくしではありません。誰かが真似て書いたのです」

その言葉のあと家賢は、考えこむようにじっと黙った。そして目をとじて拳をぎゅっと握った。

「余はそなたのその言葉を信じたい。だが、状況がそうはいかん。つくば屋のあるじは平川門の前でしのびに殺されたそうではないか。そついったやからと懇意にしておつた事実は事実ではないのか」

「いつかいの小間物屋の類が、なぜわたくしにまで及ぶのでしょうか。わたくしはただ品物を買っただけ……………いえ」

何か必死で言い訳しているように感じてあかりは黙って下を向い

た。

本当はその通りなのだ。家賢を騙すつもりはなかった。だが、忍びであり密命をおびてきたのは間違いないのだから。

「そうであろう。そなたはただ、小間物屋で物を買っただけなのじや。余もそう申したのだ。だが、周りがどんどんどんどん証拠を出してきて、噂が止められぬ。大奥では、いつそあなたが処刑されるか、ということまで話になっておるのじゃ」

「わたくしが処刑？」

「ああ、静、わしはどうしたらよいのだ」

家賢は顔をしかめると、牢屋の格子をつかんだ。將軍家への反逆は大罪である。このままではあかりが殺されてしまう。よほど取り乱していたのか、一人称が余からわしとなった。

万里小路の思い

「と、とにかく時間をかせごう。そなたの身の潔白を証明するまで……それまで少し辛抱するのじゃ」

「上様……」

あかりは何も言えなくなった。自分の身は潔白などではない。それを信じている家賢いえよしの誠実さに悲しくなった。

「わたくしは大丈夫でございます。上様、そのようにお嘆きになってはいけません」

「そなたは殺されようとしておるのだぞ」

「仕方ございませぬ。それもさだめなら」

「そのようなさだめは許さぬ。このまま死ねばそのほうは大逆賊として語り継がれる。それが余には我慢ならん」

その表情には、生まれつきの誇りの高さがあった。自分に連なる者たちへの誇りでもあるのだろう。

「横井の父にも類が及ぶのでありましょうか」

「今は藩の意向で自宅じたく蟄居ちつきよになっておるそうだ……」

家賢はうなだれるように下を向いた。懲罰は確実であろう。自分への実刑が確定しないことにはどうなるか分からないが、下手をすれば一族として処刑、よくて切腹か。家は断絶であろう。

養父・横井 定利さだとし。ほんの数年であつたが養父となつた男はどうなるのだろう。そして、黒川藩と水戸藩はどうするのか。自分の失態が今になって大きな影響を与えている、という事実こそ恐ろし

さを感じてきた。

「あと万里小路は京にかえすことにした」

「万里小路さままで？」

失脚なのか。

「なぜでございますか？ 万里小路さまはわたくしをただ、大奥に入れてくださっただけです」

「それだけならよかったのじゃが……少し乱心しおったのだ」

「乱心？」

「御台所の墓を荒らしたのだ」

あかりには全く意味が分からなかった。あの冷静で口のたつ万里小路が御台所の墓を荒らす？ 想像が出来なかった。

家賢は、はあ、と大きくため息をつく、よほど疲れていたのか、牢の前に腰を下ろしあぐらをかいだ。

「万里小路が死んだ御台所、教子に京都から着いてきたのは知っておるな。あれは教子の乳姉妹で姉のようなものだ。ふたりは心底に信頼しあっておってな、教子が死ぬとき『京に帰りたい、父母に会いたい』と言うの聞いて、骨を京都に埋めてやろうとしたのだ」

徳川に嫁ぎ、御台所となれば一族の墓に入ることしか許されない。しかし、その話がなぜ自分の事件と関係があるのか、それが分からなかった。

「そなたと類ある万里小路は自分に嫌疑が及ぶのでは、と取り乱したらしい。自分がそなたのように捕まる前に、骨をもって京へ帰ろうとしたのだ」

そう聞いても、あかりはやはり納得いかなかった。そもそも、なぜ黒川藩からの頼みを聞いて、自分を大奥に入れたのか、が分からない。

いや、ちがう。反対なのだ。京都に骨を持って帰りたい、という願いが先だ。もし、自分が御台所の骨を持って帰りたい、としたら、どうするだろう。徳川の墓からは決して出られない。と、すると……大胆な発想しか出てこなかった。

——徳川幕府がなくなればよい——

そうだ。幕府がつぶれれば帰れる。なんという不可能な願いであるか。しかし、それしか出てこなかった。

もちろん、本気で幕府転覆を、しかもひとりで出来るなど思ってもいなかっただろう。が、水面下では幕府の抵抗勢力があり、それを密かに応援することは可能だ。あかりは万里小路の熱い思いを知った。

「あまり気にするでないぞ。万里小路は本当に少しおかしかったのだ」

だんまりと考えこんでいたので誤解を与えたらしい。万里小路のことに責任を感じていると思われていたのだ。

「万里小路さまにまで多大なご迷惑をかけました」

「あやつも生まれ故郷の京に帰れるのだ。御台の髪と共にの。そんなに気に病むな。人のことより自分のことを考えよ。そなた……」

家賢は急に悲しそうな顔をした。そして牢屋の部屋入り口を気にしながら、格子の間からあかりに手を差しのべた。

「手を握ってくれ。そなたを本当に愛しく思っておったのだ。本当に、そなたまでいなくなってしまうのか」

「上様」

あかりは泣きながら手を握った。何度も上様、と繰り返しながら、その暖かさを感じていた。

家賢のことは好きだった。政治的なことがなければ本当に愛せたのかもしれない。

——水戸のお殿さま、親方、あかりは本当につろうございます。お役目は果たせませんでした。死んでお詫びをしたいけれど、それも出来ません——

自害をして、さらに家賢や月島を悲しませること、は出来なかった。

——月島さまは、わたくしの文を待っておられるのに……どうしよう——

この先どうなるか、全く分からなかった。

信念

奉行所の急な手入れに、龍才たち三人は逃げるだけで精一杯だった。

煙幕えんまくを使ってちりじりになった、龍才、勘介、サエの三人はかねてから決めていた集合場所に再び集まった。

それは竹やぶの中の小さな小屋であつた。

「何があつたのだ？　なんで突然、役人が俺たちを捕らえにくる？」
勘介は青い顔をしながら小屋の戸口に張り付いている。外をうかがっているのだ。

「？　結託けったくして不穏な動きをしている？　と役人は言っておつたな。…
…風魔の雇い主が表から指示したのだろうか」
奥にいた龍才は傷口を確かめながら答えた。

しばらくの沈黙。隅にいたサエもじつと考えていた。

「何か……あつたのは確かですね。風魔なら、こんな邪魔臭いこと
する必要ないし……表、表の世界……將軍家？」

「うーん……風魔の雇い主が、それとも、もっと別の政治的な関係
か……」

龍才は頭をかかえた。そしてハツとした。

「あかりが、あぶない」

表の世界で、自分たちを捕らえる動きがあつた、ということは、
？　結託している？　あかりも何がしかの影響を被るはずだ。その考え

をサエと勘介に話す。

龍才は当然、あかりの様子を探りにいく、としたが、それに意を反したのはサエだった。

「危険すぎます。我々は追われる身なのですよ。それなのに、大奥にいるあかりの様子など、探れるはずないじゃありませんか。無謀です。ここは、引くべきです。一旦、引いて、親方の指示を待ちましょう」

「うんうん、そうしましょう。龍才さま」

これには勘介も同意した。冷静に考えれば、こういった緊急事態に動き回るのは危険なのだ。しのびの教えにも反していた。

だが龍才は焦っていた。家倅の件で手入れが入ったとしたら、自分たちは？大逆賊？である。そして、もしあかりが、その一味であると分かってしまったなら、当然、死罪である。

いや、あかりを陥れるほうが真意であつたなら余計、危険だ。その最悪のシナリオがどうしても頭から離れなかった。一旦、裳羽服津に帰って、何かする時間はないのだ。

龍才は目を閉じた。

「おまえたちは、裳羽服津に帰れ」

「龍才さま！」

サエと勘介は声をあげた。

「その通りだ。今は引くのが一番よい道だ。……親方に伝えてくれ。後を継げなくてすまない、と。でも、俺は、俺の生き方のほうを選

「なので、悔いはない、とな」

——死ぬつもりだ——

サエと勘介には、分かった。

そして、止めることは出来ない、と。龍才はあかりと共に死ぬつもりだ。

しのびは情に流されて、冷静な判断を過つてはならない、と徹底的に教わってきた。そんなこと、優秀な龍才には分かっている。ひとの判断ミスが、一族全体にまで影響を及ぼすからだ。

だから、失敗したら自ら死ぬべきであるし、それを？切って？いく関係が何よりも大事なのだ。

だが、あえて龍才はあかりを選んだ。

自分の生き方を選んだ、と言った。それは『決して仲間を見捨てない』ということなのだろうか。それとも、あかりだけが特別で、心中してもいい、と考えているのか。恐らくどちらもだろう。

今回は信念と感情が合致したが、恐らく信念だけでも、動く男だ。龍才は。だから、もし窮地に陥ったのが、あかりでなくても、龍才は助ける道を選んだろう。

サエはふつと笑った。

「龍才さまには負けたねえ」

腕を組むと、笑いながら目を伏せた。バカなことをしている、と思いつつ、龍才に協力しようとしている自分がおかしかった。

小屋の外はざわざわと竹が鳴っていた。

江戸城参代（前書き）

第九章

江戸城参代

汗が出ないように小夜は、ややきつめに伊達締めだてじをしめた。

＊伊達締めⅡ着物下じゅぽんに着る襦袢じゆばんを結ぶ

小さめの帯。

今日は江戸城に参代する日である。

江川太郎左衛門はがわ とうざゑもんは砲術ひょうじゆつの資料をまとめた。その詳しい説明を江戸城ですることになっていた。それに同行するのが小夜である。今回は翻訳者として不可欠な人材として登録してあった。

名前は、にらやまがっこう 葎山月光。

苗字は、江川の治める地、伊豆葎山からとった。月光がっこうは、もちろん月島をもじったものである。

政治の表舞台である、本丸表は男の世界なので、女性である小夜が江川に付き従って歩くのを見ると、人々はぎよつとして振り返った。

中でも、大名クラスは、大奥年寄りだった月島を知っていただけに、真っ青になって立ち止まった。

——なぜ、ここに死んだ大奥年寄りがおるのだ、幽霊を見ているのか——

ふたりは側用人に付き従い、長々と廊下を歩かされた。そして、老中と将軍が会議をする隣の部屋に通され、そこで控えているように言い渡された。

じつと待つ。

異国船対策についての話をしているようだ。リベラルな老中・阿あ部正宏と、過激な保守・水野忠訓は相変わらず対立している。しかし、今回、江川を呼んだのは、水野であつた。

水野は江川を高く買っており、幕府の砲術指南役として何かと便宜をはかつていた。

「江川太郎左衛門と、葦山月光、これへ」

水野の声でふすまがスツと開く。

頭を下げるふたり。

「今回は西洋で最新式と呼ばれる、大砲の……ん？」

ここで水野、以下全員が女性である小夜に気付いた。御前会議に女性が入ってくるなど経験したことがなかったからである。

「申し上げます」

江川が頭を下げたままで声を張り上げた。

「我が隣に控えまするは、今回の翻訳作業にて、強力な力添えをした葦山月光と申す者でございます。是非、上様には格別なるお声を賜りたく、参代いたしました」

「なに？ 女の身で翻訳作業とな」

家賢いえよしがつぶやいた。

「それは、何とも殊勝なことじゃ。顔をあげよ」

小夜は一瞬、息を飲んだが、すぐに意を決して顔を上げた。

「！」

そこにいた全員が固まった。
老中以下、主だった大名たちは、みな、月島だった小夜の顔を知っていたからである。

「そ、そなた……月島？」

真つ青になりながらも家賢が、最初に口を開いた。

——上様、月島さまは生きております——

静の方だった、あかりが、何度も何度もそう言っていた。やはり、あの言葉は本当だったのか。

「月島、いや、そのほう……」
がっこう

「月光にございます」

江川が補った。

「月光には、別室で待つよう伝える」

家賢の声は上ずっていたが、力がこもっていた。

「はい」

月光こと小夜は深く頭をさげて、御座の間をさがった。

側用人たちの異様な空気を背にすると小姓が小夜を個室に案内してきた。

御小座敷。

つまり將軍の私的間に通された小夜は、不思議な気持ちで正座をしていた。ここは中奥、お鈴廊下の向こう。ずっと行けなかった先にいま自分はある。いや、もう今は焼けてしまったか。再建中なの

か。
ぼうと考えている間に、せかせかした足音が聞こえて家賢がやってきた。

「顔をあげよ」
いちいち言うのも面倒なようだった。

だが、小夜は顔を上げられなかった。家賢に不忠を働いたことが分かっていただけからだ。

「そなたは余が、どれほど怒っているか分かっておるうな」

「はい」
長い沈黙がおりた。

険しい目で小夜を睨んでいた家賢であったが、しばらくするとはつと息を吐いた。

「もうよい、顔をあげよ。これは命令じゃ」

ゆつくりと小夜は顔を上げた。しかし、目は伏せたままである。將軍の顔を見るのは無礼にあたったからだ。

「こちらを見よ、と申しているのだ、月島」

小夜は、視線を上げた。澄んだ瞳はさらに深く、だが、どこか輝きを増しているようだった。

「息災でおったか」
「はい」

あくまでも態度を崩さない小夜に、家賢は再度ため息をついた。

「いい加減……元にもどってくれぬか。余はそなたを罰しようなど、露とも考えておらぬ。少し戸惑っておるだけじゃ」

「言つべき言葉がみつかりません」

「どうしておったのじゃ」

「……火事るとき部屋子が危険と判断して、わたくしを江戸城より連れ出したのでございます」

「大奥の女はたとえ焼け死んでも外には出ぬ、という不文律を知っておるそなたが、部屋子の指示に従ったとは思えぬ」

「情けないことに、その時わたくしは意識がございませんでした」

「なるほど。では、その部屋子に褒美をとらせねばならぬの。そなたの命を救ってくれたのだからな」

家賢は冗談っぽく笑った。

「したが、どうしてすぐ帰ってこなんだ。罰を恐れたのか？ いや、そのようなそなたではあるまい」

「本当に申しひらきもございません」

「余はわけを聞いておるのだ。あやまるのは禁ずる。……余が嫌になつた、と申すなら、それでもよいのだ」

「とんでもございません」

小夜は首をふった。

「記憶が……記憶がとんでいたのでございます。しばらく部屋子の知り合いの家にやつかいになっていたおりに、江川太郎左衛門さまに出会ったのでございます」

「なるほど。だが、どうして砲術指南所などで男に混ざつて働いておるのじゃ。そなたは大奥年寄ぞ」

小夜にはどう説明していいか分からなかった。ことは複雑すぎた。

しかし、家賢には複雑であつても説明せねばならないと思った。

「上様」

強い意思を込めて小夜は、家賢の眼をじつと見つめた。

「この日本は危機にさらされております」

「うん」

神妙な顔で家賢も肯いた。

「砲術指南所は日本の防衛に関わる大切な仕事をする場です。異国の言つがままにならぬようにするには大砲の開発は必至でございます」

「もちろんそうじゃ。だが、なぜそなたがそこにおるのか、と聞いておるのだ」

小夜は覚悟を決めた。

「それはわたくしが、異国語が少し分かるからでございます」

「それだけか？」

意味が分からなかった。小夜は怪訝な顔をした。

「……それだけ、とは？」

「なんだ、そうであつたか」

なぜかホツとしたような様子で家賢は胸をなでおろした。

「え？」

「余はまたそなたが江川に惚れこんでおつて、仕事に協力しておるのかと思つたぞ。……あれだけ異国の本を読んでおつたそなたが異国語が出来たとて不思議はない。だいたい異国語が出来ることは（静……から聞いて）知つておつた」

ことは……という言葉と言った後に一呼吸おいた家賢だったが、小夜はそれに気付かなかった。

「そなたが火事で死んだとなってから、書庫のばばから預かっていた異国の本を余は見たのだ。そなたが訳して書本もだ」

「火事で焼けてしまったのではないのですか」

「ばばが火事と聞いたとき、貴重な本を一生懸命運びだしてくれたそうだ」

その言葉に小夜は何ともいえない嬉しさがこみ上げてきた。
焼けていなかった……

「それを見たとき、やはり、そなたはタダ者でない、と思ったのだ。多くを見渡せ、学問に聡いおなごなどいぬ」

「もったいのうございます」

小夜は頭を垂れた。

「月島」

家賢は上座から立ち上がって、小夜の元にしゃがんだ。

「帰ってまいれ、余のもとに」

時代の境

「帰ってまいれ、余のもとに」

「上様……」

「そなたを失つて以来、余はそなたが本物で妻であつたことがハッキリわかつたのじゃ。徳川開幕依頼、妻は夫に従い、内助の功で助け、良妻賢母であること、としてきた。したがそれは正しいのか？ だいたい將軍家はその教えにさえ則つておらぬ。御台所は、内助の功どころか、公家の姫をもらうので政治に口を出させぬよう大奥にひっこめたままだ」

「では上様は何をもつてして、わたくしを妻だと言われるのですしょうか」

「本気で悩んでくれるところ……ではないのか。同じ立場にたつて答えを出そうとするところではないのか。武將はおなごに政治の話をせずとも、側用人がある。しかし……太平の世が続いた今となつては、側用人でさえ利権が絡んでくるのじゃ」

「側用人の代わりを妻がせねばならぬと、言われるのですか」

「違う、もっと私的なことじゃ」

「私的？ 上様に私的なことなどありません」

あまりにきつぱりという小夜に家賢は面食らつた。

「ふふ、なんととはつきりと言う。だから、そなたは最高の妻なのだ。類稀なる頭脳と、余を恐れず、敬わず、本当に余のことを考え、意

見してくれる」

小夜には黙って聞くしかなかった。

「そなたに女の道を求めてはおらぬ。妻として一緒にいて欲しい、と言っておるのだ」

「わたくしが一緒にいて、あれこれ言えば何か変わるのでしょうか。幕府の体制や、上様のご判断が、変わるのでしょうか」

小夜はよく分からなくなってきた。ここに来るまでは大奥に帰らねば、と思っていた。だが、このまま家賢のそばにいても何も意味がないように思えてきた。

「なぜ、そのように小難しく考えるのだ。余でさえも幕府の体制をなかなか変えられぬ、というのに。そなたは余のそばにいて、色々な相談にのってくればよいのだ」

小夜はその言葉を聞いて、深い溝が開いていくのを感じた。家賢はただ、己のカウンセラーが欲しかっただけなのだ。それも都合のいい意見を言う。

小夜は少し意地の悪い気分になった。きつと怒るであろう、ことを言ってみたくなくなった。

「異国が攻め込んできて、もしも幕府が無くなったら上様はどうされます？」

家賢はきょとん、とした。だが、少し気まずそうに目を動かすと答えた。

「もし、徳川幕府が負けたら、それは切腹して果てるまでだ」

「日本の民は、どうなります？　天子さまも見捨てて、自害ですか」

「もちろん負ける前に、死ぬまで戦うのだ。その為に、そなたも江川たちも新しい武器を開発しているのであろう。異国に簡単にやられる我らではない」

「言うことが矛盾しておられます。？負ける前に死ぬまで戦う？というのは、負けると心の中で思っておられる、ということですよ」

家賢は怒りで顔が真っ赤になった。このように將軍の心の中にずけずけと入りこんで屁理屈のような口問答をする女などいなかったからだ。

だが、家賢はここで一呼吸おいた。失礼を働かれるのは御前会議でも、しょっちゅうだったのだ。

「そなたと、無益な議論をする気はない。いったい、何が言いたいのだ」

「徳川幕府を、解体、できませぬか」

意味が……分からなかった。家賢は、はじめて和語を聞いたかのように、不思議な顔をした。

「時代の境では、必ず旧体制は崩れます。そうしないと新しい世の中が来ないからです」

「今が時代の境だというのか。どうしてそれが分かる」

「二百数十年、続いてきた徳川幕府の考え、体制では、現状に全く対処が出来ていないからです。時代が大きく揺れているのが上様にもお分かりなはず」

確かに。家賢にもそれは分かっていた。

「しかし、幕府を解体して何とする？ 社会は大混乱じゃ。誰が、次の体制の指揮をとっていく、というのか」

「それは自然とできましよう。最初は力の強いものが出張ってきますが、その後は全く予測できない者が出てきましよう」

「予測できない、とは何じゃ」

「だから、予測できないので分かりません。今のわたくしたちの想像では限界がありますゆえ」

はああ。家賢はため息をついた。分からないけど来る、など、全く、理屈が通らない。そんなことでは政はやつていけない。どうした、月島らしくもない。

「そなたの言うことは無茶苦茶だ。話にならん」

だが、月島のこの予測は、明治政府という思いもよらなかった議会政治体制となって、後に結実するのである。

「とにかく大奥に帰れ。そなたは火事の病気で宿下がりをしておったのじゃ。分かるな？」

哀願するような家賢の目だった。

月島は心の中でため息をついた。やはり、自分の意見は届かない。旧体制にいる家賢や老中に何を言っても無駄なことが分かっていたが。

何かがざわつく。

それは、やがて内外からくる大きなエネルギー！。

小夜には時代の動きがひしひしと感じられた。

——そうだ、静山はどうなったのか——

「上様、静山どのはお元気でおられましようか。お部屋殿になられたとか」

その言葉を聞いたとたん、家賢は凍りつくような顔をした。

「静のことは口にするでない」

「どういつことにござりまするか」

不穏なものを感じた小夜は、引き下がらなかった。

「上様！」

あまりに激しい小夜の表情だった。苦々しい顔をしていた家賢は、やがてあきらめたように口を開いた。

「知らぬほづがよい。……だが、大奥に帰ったら嫌でも耳にするの」

——それならば余から話そう——

そして、家賢は顛末を話し始めた。

私が私の現実をつくる

「今は信州高遠・駿河守清枚の館に、お預けの身となっておる。死罪だけは何とか免じて、高遠に遠島となった」

「まさか、高遠に行くまで晒されるのでは……」

小夜は真つ青になった。

「いいや、それはない。ただ……高遠に着くまでに毒殺されるやもしれぬ。側室だった女人を罪人とするのは、將軍家の体面が悪いのでな」

「それで、上様はいいのですか！ あんなにも可愛がっておられたではありませんか！」

小夜は家賢に詰め寄った。

「だから、こそじゃ！ 静はわしを裏切ったのだ」

「その証拠の文とやらを信じておられるのですか。あやしすぎます、証拠が明確すぎます」

分かっていた。ふたりとも。あかりが大逆賊などでないことは。もう証拠がどうというレベルでないことも。ただ、政治的な落とし穴に、あかりは落ちてしまったのだ。

——どうすることもできない——
しよせん、世の中とはこんなものなのだ。

.....

.....

いや。
違う。

ぜんぜん違う！

世の中など、ない！ どうすることも出来ないなど、嘘だ！ 未来は決まっていけないのである。

今の小夜は違った。

何かがすっかり壊れていた。それは、今までの価値観。理論的だ
と思っていた、自分の思いこみ。

すべてを分かったふりをして？ あきらめる？ 生き方は
嫌だ！

小夜はすつと後ろに下がると、深々と頭を下げた。

「これにて失礼いたします」

口を開けたまま家賢は、立ち上がる小夜を見ていた。

「どこへ行く、月島！」

「退散いたします」

襖を開けて、廊下に足を出した途端、家賢が叫んだ。

「誰か、その者を捕らえよ！」

わらわらと小姓たちが三人、飛び出してきた。行く手をさえぎら
れる。

「行くな！ 月島」

「静山を、助けねばなりません」

振り返った瞳には炎があった。凄みさえ感じられる。

「將軍の余とて、どうにも出来なかったものを、そなたがどう出来る、というのじゃ」

「考えます」

そうだ。今まで自分には何の力もない、と思っていた。肩書きや権威がなければただのちっぽけな女。すぐに嵐の海に投げ出されてしまふ、と。

しかし、今、悟った。力は自分にある、と。

幕府になど、そして、自分の外になど力はなかったのだ。

現に家賢はたった一人の女さえ救えない。きっと陥れられたのが自分であっても救わないだろう。

家賢は將軍なのに。多くの人より何か出来るハズなのだ。それがたとえ理不尽であっても、心からの願いなら自分を中心に考えて動くべきなのだ。

わたしは違う。わたしの意志がある。わたしのやりたいようやれるよう、考えるのだ。

「どきなさい」

小夜から青白いオーラが立ち上るのが、見えたような気がした。その迫力に小姓たちは、一瞬たじろいだ。

光のように小姓の間を抜けると、小夜はさっさと歩いて行ってしまった。

「お、お待ちなされ……」

「よい」

家賢が近くにまできて止めた。

「そなた、あの者を江川太郎左衛門邸まで、丁重にお送りするのだ。くれぐれも粗相のないようにな」

「はっ」

小姓のひとりが小夜を追いかけていくを見ながら、家賢は少し胸が高鳴るのを感じていた。なにか、小夜がやってくれそうな頼もしさを感じたのだ。

『そなたは何をどうやるというのだ』

この袋小路だらけの現実には

そう思いながらも家賢は小夜の姿が消えた先を見たままずっと立ち尽くしていた。

江戸城に参代した次の日、本所にある江川太郎左衛門邸から小夜の姿は消えた。

「お世話になりました」という内容の他に、自分の使っていた南蛮の資料や辞書を、届ける手配を試みる、という書置きが一通あった。

江川は雲庵や妙安寺に何度か足を運んでみたが、小夜の行方は知れなかった。

小夜のたくらみ

夏本番、水無月の空を見上げながら、小夜は考えていた。今まで幕府に逆らった事件は、どんな顛末を辿ったかを。

——島原の乱、赤穂浪士、大塩平八郎——

どれも、失敗しているというか、最後には幕府に処刑されているが（大塩は自害）……本懐を達成したのは赤穂浪士だ。なにかヒントが落ちているかもしれない。

紙を取り出すと、赤穂浪士について分かっていることを書き始めた。

床一面に書付を散らかしている部屋は、女髪結い師・お種の家の一階だった。あかりと共に世話になったお種の家は、金さえ渡せば、好きなだけ気ままな生活を送ることが出来た。寝食を忘れて考え事をするには、そういった環境が必要だったのだ。

江川邸を出た理由はもうひとつあった。自分ともう関係を持って欲しくなかったのだ。自分はこれから幕府に対して弓を弾く可能性が高い。幕府の官僚である江川に類が及ぶのは避けたかった。

あまのやりへい
？天野屋利兵衛は男でござる？

不意にこのセリフが出てきた。

これは、赤穂浪士の芝居で有名なシーンのひとつ。天野屋利兵衛は、恩義ある赤穂藩に報いる為に、江戸の浪士の武器調達に奔走する。やがて奉行所の知れるところになり投獄されるのだが、自分だけ

でなく長男までもが拷問にあい、口を割るよう迫られる。

「どこの世に、我が子の可愛くない親があるものか。されども「信義」は曲げられぬ？天野屋利兵衛は男でござる？」と。

どこまでが脚色なのかは分からないが、天野屋利兵衛がひっかつた。武器調達という部分。

そこからは、囲碁の先手をどんどん読むような要領で、小夜は頭を働かせた。

ふふふ。

笑いがこみ上げてきた。自分がやることを想像すると、おかしくてたまらなかった。

これからやることの下見のため、小夜は出かけることにした。玄関を出てすぐの曲がり角。小夜は突然、駆けだした。慌てたのは、小夜のずっと後ろにいたひとりの男である。急いで後を追う。曲がり角を曲がってすぐに誰かとぶつかりそうになった。

小夜であつた。

「そなた、お庭番じゃな」

不敵に微笑んでいる小夜に、その大柄の男はうろたえた。

「上様であろう。わたくしの後をずっと着けてこさせたのは」
何も言えずにぶすつと黙りこむことしか出来ない。

「まあ、よい。そなたわたくしの言うとおり動く気はないかえ？
それを上様に確かめてござれ」

「た、確かめてどうするつもりですか……」

「また、戻って来て、わたしと一緒に色々とするのじゃ」

「色々とは？」

「色々じゃ」

艶やかに小夜は微笑んだ。

「在り」と「なし」

あかりは障子にうつる影を見ていた。

外は蒸しているようだけど締めきっているおかげで、存外この部屋は快適だ。

ああ、いつまでこのように押し込められるのだろう。処刑なら処刑でさっさとやってくればいいものを、本当にお役人仕事はのろろしていてイライラする。

ただ……

月島さま。

どうなされているだろう。

わたしの文が来ぬことを怒っておられるだろうか、それとも、心配されているだろうか。ううん、何よりわたしが月島さまのことをすっかり打ち捨ててしまった、と思われたら……それだけは耐えられない。

月島さまの居場所を知っているのはおまつだけ。

そのおまつも、どうなったか分からぬ。下手をすればわたしと同じような目にあっているかもしれない。もし、そうなら……すまぬ、おまつ。そなたはわたくしとは一切関係ないのに。

ずっと考えるのは、「雨月物語」の？菊花の契り？。

菊の節句に会う約束をした、義兄弟だが、義兄は訳あって捉えられてしまいその日までに帰れそうにない。「人一日に千里をゆく」とあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」ということばを思い出し

て、自死し、幽霊となって義弟の元までたどりつくという話。

わたくしにも出来るであろうか。死んでこの姿を脱ぎ捨てれば月島さまに会えるのだろうか。だけど、そうなると月島さまに会えるのは、もうあと一回きりとなる。その一回でお別れするなど……出来ようか。

ふふ。

一度会えるだけでも贅沢なのに、わたしはなんと業の深い女であろうか。？菊花の契り？は約束したことは命を賭して果たすという、義を説いた話じゃないに、わたしは何という罰当たりであろうか。

しかし、この菊花の義兄は本当に幽霊になれる、と信じていたのだな。下手したら幽霊にもなれずに？おしまい？ではないか。

そうだ仮定してみよ、あかり。

わたしがこのまま死んだとする。

すると、意識はなくなる。

すると

……

何も無くなる。

何も。

あれれ？

「なあ、静山、そなたこの世は確かなものと思うか？」
いつか月島さまはそう言っていた。

そうだ。

もし、自分がこの世にいなくなったら、この世界は存在している

といえるのだろうか。この障子も、襖も、畳も……

だんだんと現実感がなくなっていく。
あれ？

これが……空ではないのか？ わたしがこの世を認識できなくなったら、すべて消えてしまうなんて、なんていい加減なのだ、この世は。それとも意識は何かに変化するのだろうか。幽霊のような靈魂に。そして、この世界は相変わらず存在するのか。

あー、分からない。

こんないい加減な世界なのに、それでも、この世を生きていく意味は何であろう。

こればかりは古今東西の知恵者が考え抜いてきた問題だ。わたしに簡単に分かるようなものではない。
それよりも。

月島さまが幻など、それは絶対に違う。わたくしが感じているこの感覚が幻なハズがないであろう。確かに感覚に形はないが、？なし？などでは絶対にありえぬ。

そうか。月島さまは、こういったことを知りたかったのだ。
わたしが感じている？あり？の感覚を、どうにかして探さなければ。

死ぬに死ぬぬ……

慈悲の縁（えん）

あかりは、空^{くう}の話から、般若心経に関する本を持ってきてもらえないか、と役人に尋ねてもらった。

罪人であっても、坊主や仏典を取り寄せることは認められていたので、それはすぐに叶えられた。ただし、役人が許可したものである。

本気で求めているものは与えられる。

届けられた書本のなかで、面白い解説をしているものがあつた。

？「空^{くう}の根底」には「因縁^{いんねん}」「縁起^{えんき}」というものがある。釈迦は「万物は因縁より生ずる」ということに気付いた？

ふむふむ。では因縁とは何か。

？因縁とは、「因」と「縁」と「果」の関係をいつた言葉で、「因」とは原因のこと、結果に対する直接の力。「縁^{たす}」とは因を扶けて、結果「果」を生ぜしめる間接の力。この世を原因と結果だけでみる事はできない。もっと複雑で多様な関係がある？

とのこと。

？^{もみ}初^{はつ}が稲穂になる過程。初は直接原因の「因」、これを土中に蒔^まき、それに雨、露、日光、肥料というような、さまざまな「縁の力」が加わると、豊かな稲穂となる。これが「果」である？

と、ある。

ひとりの人間として、他人との出会いは、土や日光に当るようだ。

いやいや、違う。お互いに土や日光になっているのだ。そして皆、それぞれの稲穂になる。

だから、稲穂というのは、反応した結果なのだ。

人も稲穂のように、何かになるため、お互いに反応しあっている。

それは、分かる。分かるが、それが、わたしと月島さまが密接に惹かれあう理由になっているのか。そして、この感情も。

『因縁は確かにあろう。空間的にも時間的にも、一瞬、一瞬の関係だということも分かる。しかし、より濃い関係と、薄い関係があるのも確かである。それはなぜ書いていないのか』

十二因縁の項を読むと、愛とは好きなものに心がとらわれること、とある。

とらわれている？ 最初はそうであったが、今は違う気がする。

——そう、なにか彼女は重要な存在なのだ。私にとって。激しく反応することが出来るというか、根本から変えてしまうというか——

本当はそれが答えのひとつであったのだが、あかりにはそれは分からなかった。

濃い関係は、共鳴作用が働いている、と現代ではされている。すべての物質には周波数というものがあり、波打っているのだが、周波数の似た物質は、互いに共鳴しあう。

共鳴はエネルギーが高まるので、乱雑な軌道へと移ることが出来、カオスへとなだれ込む。カオスは混沌でもある。が、新しい現象を

起こすともいわれている。

あかりと小夜が、惹かれあうのも、お互いに強烈な反応と現象を起こすことが分かっているからである。現に今、ここまでの現象をお互いに起こしてしまった。

人間たちも干渉しあい、カオスを起こし、そして、何かが発展していくのであろう。

だから、カオスを起こす関係性は濃い関係、ともいえる。それは、よい関係・悪しき関係どちらもある。個人、個人、みなカオスを起こす関係は違うので、これが縁の濃い、薄いとなるのであろう。

あかりは猛烈な勢いで本を読み始めた。この世のこと、死を悟ることが出来なければ、死ぬことは出来ない、と考えはじめていた。どうして、しのびという死に近い場所にいたのに、ここまでこの世界のことを深く探求しなかったのか不思議であつた。

裳羽服津^{もはぎつ}では、ただ、死んだら仏のいる極楽浄土か、地獄に行くか、その中間か、と教えられていたただけだ。

……そんなの、絶対に変だ。

そんな人間の考えられるような場所に行くなど。カエルは動いているものしか理解できない、と月島さまは言っていた。なら、あの世は人間の理解できない世界であるはずだ。

ただ、この世には人知を超えた、知を理解できる人もいるだろう。お釈迦様はきつと分かっただけに違いがないが……経典を残されな

かった。

仏陀の死後に書かれた、仏教の経典では、何か不十分な気がした。もちろん、全部読んだわけではないが、あの月島こと小夜さえも「使えぬ」と言っていたではないか。

あかりはとうとう疲れて、ごろりと横になった。どうせ、見張りなど部屋に入ってこない。このようなこと、大奥であつたら絶対に出来なかったであろうが。

「手と手をつないで、いっしょに行こう　そらそら、みんなで歌うたお」

急に子どもの歌が聴こえていた。この屋敷の子どもなのだろうか。楽しそうに何度も繰り返し返している。

「手と手をつないで、いっしょに行こう、か」

小夜とならずと手をつないで、同じ瞬間を多く持つていけそんな気がした。本質的に直感的な関係なのだ。話さなくても分かるというか。お互いの見ている世界は違っている、同じ時間と空間――接点が多くあればあるほど、見ている世界の相違は少なくなっていくような気がした。

パートナーとの関係は、穏やかな愛を感じること、勇気づけられること。それは、仏の世界からやってくる慈悲の分化したものと分かること。そして、この慈悲はやはり？あり？なのだ。空即是色。形はないが在り。そう考えれば、かなり納得することが出来た。

『ちよつと分かってきたじゃないの、あかり』

嬉しくなつて、思いつきのびをした。

おまつ（前書き）

第十章

おまつ

じめじめした蒸し暑い日、小夜のもとに三人の女性がやってきた。おまつと、伴をしていた女性がふたり。

あかりから、お種の家の場所を聞いていた、おまつは何かしてあかりのことを知らせようと神田にまでやってきたのだ。

「月島さま！ やはり生きていらした」
涙で顔をぐしゃぐしゃにしながらおまつは、肩で息をしていた。

「たいへんなのです。お静さまが……静山さまが、死罪になりそうで……」

小夜が生きていて嬉しいのと、あかりの現状を伝えなければ、という切羽詰った感で、言葉が上手く出てこない。

滂沱と泣くおまつを抱いてやりながら、落ち着くのを待っていた。伴の女たちは近くの茶屋へ行かせた。

あかりが逆賊容疑で捕まったことだけは知っている、と、小夜はおまつに話した。

「どうやって来たのじゃ。そなたはお宿下がりにならなんだのか」

「は、はい……お静さまの……部屋子は、み、みな、お暇を出されるハズだったのですが、な、なぜか、わ、わたくしだけが美津波瀬さまの部屋子に、指名されまして」

しゃくりあげるのを、なんとか我慢しながら、とつとつと話すおまつ。

「美津波瀬どのに？」

小夜は落ち着かせるため、おまつの背中をさすってやる。

「はい。……じつは、あ、あれから、大奥の中味がガラッと変わりました……いまは美津波瀬さまが、総取締りとなられたのです」

おまつは小夜の知らない話をはじめた。

「万里小路さまがお辞めになったあと、村岡さまは自分が総取締りになれると思いこんでおられましたんで、いい気味です」

真っ赤な目をしながらも、おまつは意地悪な目をして笑った。

「万里小路さまは、静山のとばっちりを受けて失脚なさったのか？」

「よく、分からないのです。噂ではお静さまの後見だったので辞められた、と言われていますが……もっと何か上のほうで不都合があったようにござりまする。村山さまに呪いをかけられて体調を崩されたとか、他にも色々な噂がありますけど」

呪い、と言われて、小夜は山吹の死んだ時にあつた呪詛のことを思い出したが、すぐに考えを振り払った。

「それで、そなたは今日はどうやってここへ参ったのだ？ 美津波瀬どのの部屋子なら、すぐに大奥へ帰らねばなるまい？」

「大丈夫です。本日はお宿さがりとして出てまいりました。美津波瀬さまは村岡さまへの対抗として、わたくしを自分の部屋子されたんです。総取締りと言っても、村岡さまの力は依然として大きなものがありますので、村岡さまに恨みを抱いているであろう、わたくしを部屋子にするのも意味があるでしょう」

「そなたはとても聡く気も効く。その才能を買われたのだ」

「わたくしは、月島さまのしたで働きとう存じます！」

おまつは興奮して小夜に訴えた。

小夜は少し気分を変えなくなった。

「そうじゃ、冷たい井戸水を汲んでくるゆえ、少し待っておれ。遠いところも出さずすまなんだの」

「そんな！ わたくしがいたします」

「よいよい、そなたは客人じゃ。わたしは貧乏御家人の娘ゆえ、本当は何でもやれるのだ。ここでの暮らしは案外快適じゃぞ」

そう言いながら、やかんとタライを持って出ていってしまった。

みーん、みーん、みーん。

冷たい水、と言われて、おまつは初めて自分がぐつしよりと汗をかいているのに気付いた。大奥の女性は大体において着すぎでもあった。

——そう、もう本格的な夏だ。お静の方が捕まったのは衣替えの日であつたゆえ、何日たったのであろうか——

自分がここへきた本来の目的を、思い出した。お静の方をどうにかして救いだせないまでも、月島がただひたすらに、お静の方を待っていることだけは耐えられなかったから、一瞬は悲しまれても、事実を伝えたい、と思いここまでやってきたのだ。

しかし、月島こと小夜は、お静の方ことあかりが捕まったことを知っていた。そのうえ、驚くことに、あつけらかと生活している

のである。

「あーやはり暑くなってきたの」

井戸の水で手ぬぐいをしぼり、自分に差し出す小夜の姿がどうにも合点がいかなかった。質素な町屋は、よくみれば散らかし放題である。考え事をするのに紙を床にどんどん広げたり、片付けを後回しにしたりしていたからだが。こんな荒れた部屋に住んでいるかと思っただけでおまつは耐えられなくなった。

「お止めください！」

差し出された濡れてぬぐいを持っていた手を拒絶するよう、自分の手の平を立てた。

「そんなこと……なさらないでください。月島さまは、月島さまは大奥御年寄りです。上様の寵愛も信頼も厚く……とても高貴なお方なのです。わたくしたち女性の憧れなのです！」

おまつは再び泣き出した。悲しかった。傲慢の主がこんなみずばらしい部屋で、荒れたまま使用人も持たず暮らしている。そのうえ、使用人だった自分の汗を拭く用意をするなど。

顔を被って大泣きしているおまつの横に、小夜はゆっくりと腰をかけた。

「すまぬな、おまつ」

小夜は自分をうちわであおぎつつ、その風がおまつにもかかるようにうした。

「わたくしは、他の女性や上様の為に生きるほど殊勝ではない。自分勝手な女なのじゃ」

おまつは驚いた顔をして顔をあげた。他の女性はともかく、上様の為にも生きぬ、と言ったからだ。

「上様は制度の奴隷じゃ。そんなお人に仕えるのはもうごめんじゃ」「そんな……」

「おまつ、もう幕府はそんなにもためぞよ。いつまでも古い体制では新しい時代はやっていけぬのだ、賢いそなたなら分かるだろう？」

茫然とした。確かに。月島は、大奥年寄り時代から経済問題にしても異国問題に対しても、おまつたちには色々話していた。

「だ、だからといって、月島さまはこんなボ口屋にずっとおられるつもりですか？ 幕府が嫌だからといって、こんなトコにいるのですか？ 今までの月島さまなら、上様に言上して色々と改革の力になられたハズ……」

「静山を見捨てるような上様に、言上することなど何もない」「おまつはぞくり、とした。

小夜の目に青白い光が点ったからだ。

「おつらみされているのですね？」

「いいや。上様は上様の生きようがある。それをどうこうは出来ぬ。人をうつらむ、とは人を自分の思い通りにしようとするからじゃ。わたくしは、そんなこと思わぬ。」

大体、將軍相手に、どうこう出来る人間など、果たしているのか？ だが、自分自身ならもうちょっとやりようがある。だから……わたくしは自分で考えて我がままに生きることにしたのじゃ。例え間

違っておつても」

とてつもないことを言っておきながら、小夜はおまつに向かつてにっこりと笑った。

「そなたはもう帰れ。もう、ここへ来てはならぬぞ、そしてわたくしのことは忘れよ」

「いやでございます！ 帰ってきてくださりませ、月島さま」

「帰らぬ。ここでやることがあるので。そなたは、幕府が嫌だからここにいるのか、と言ったの。違う。ここでやることがあるから居るのじゃ。この家が豪華な城であろうがボロであろうがそんなことは関係ない」

その表情をおまつは知っていた。

月島が決意をした時は、この顔をするのだ。

「分かりました。では、わたくしもここで月島さまをお手伝いします。今までどおりわたくしはちゃんとお役にたちます」

「だめじゃ」

「なぜですか！ わたくしは決してしくじったり邪魔をしたりいたしません」

「だめじゃ、そなたは邪魔じゃ」

「なら、邪魔いたします」

おまつも引き下がらなかった。今までさんざん悲しい思いをしてきたのだ。たとえ、ここで小夜と一緒に死んでも本望だった

別れ

小夜は困った。自分がしゃべりすぎたことを今更に後悔したが遅い。

何とかおまつを上手く騙して返す方法をひねり出さなければならぬ。着いてこぬよう怒ったふりをして外へ出た。おまつも、この場所へ小夜が帰ってくるのは分かっていたので居座っていた。

風にあたって頭を冷やす。数間歩いたところで、自分をじっと見つめている男・旭あさひを発見した。

旭は、小夜を見張っていた家賢いえよしのお庭番である。

小夜は周りを見渡すと、スツと旭のもとへ寄った。

「静の方の遠島の日が決まりました。来月の一日です」

すばやく文を旭は手渡した。

来月の一日。あと八日しかないではないか。

「行程などはそちらに書いてあります。上様は、わたしに月島さまの言つとおりにせよ、と言われました」

「そうか」

「ただし、報告はせよ、と言われております」

それは予想内のことである。どうせ、他のお庭番もいるかもしれぬいし。

「困られておりますな」

「聞いておったか」

おまつとのやりとりのことだ。

「わたしが何とかいたしましょうか」

「ほお」

小夜は少しホッした表情で旭を見た。

「後でうらまれるかもしれないが」

「よい。うらまれてもおまつには息災であって欲しいのだ。あれの家族に類が及んでも困るしの」

小夜は少し寂しそうに笑った。

おまつの待つ家へ、ひとりの大柄の男が駆け込んできた。

「今、そこで妙齡のべっぴんさんが台車に跳ねられたんだ！　そこいらの人が言うのに、この家の人だって言うじゃねーか。あんた、家族かい？」

血相を変えた男の表情を見て、おまつは驚いて立ち上がった。

「いえ、あの……」

「今、医者へ運ばれたんだが、かなり血が出て……」

「ど、ど、どこの、お医者ですか」

「いま、そこで籠を待たせてある！　早く、早く」

パニック状態になったおまつは、旭の用意していた籠にあっさりと乗った。そして、そのまま江戸城平川門まで連れていかれてしまった。

「な、なんですか？　ここは」
籠を降りたおまつは、せんと見た景色に愕然とした。門内に入っ
てしまうと、大奥の中である。

「ご存知のとおり、大奥のご門内」
振り返ると、さきほど大柄の男が腕を組んで立っていた。

「どういことですか？　そなた、わたくしをだましたのですか」
「ああ」

悪びれる風でもなく男は肯いた。

「よくもそのような……なぜわたくしをだまして、ここへ連れてき
たのです！」

男の態度にカツとなったが、すぐに月島の策略だと気付いた。

「ああ、ひどい月島さま……」

再び、自分が見捨てられたのだと分かって、おまつは心底落胆し
た。もう、これ以上歩けないほどに悲しくて倒れそうだった。

「これ、あんたに渡してくれって」

旭は茫然とヘタリこんでいるおまつに、布にくるまれたかんざし
を差し出した。銀の地に金で牡丹が透かし彫りしてある。

「これは……？」

「月島さまがずっと着けてらしたかんざしだ。それを、あんたに、
つて。それから？　まつはわたしにとって大切にしたい、かけがえの
ない存在なのだ？　と伝えてくれ、つて」

その瞬間、おまつはかんざしを握り締めて絶叫した。
永^{なが}の別れだった。

それがいま、はつきりと感じられた。

「襲うなら、ここ。小仏峠の関所前だね。ここを出てしまうと、ど
ういった道を通るか分からなくなる」

サエは広げた甲州街道の地図の一点を指差した。

あれから、あかりの義父だった黒川藩、横井定利の家を張り込み、
何とか情報を得たのだった。高遠藩^{たかとおはん}お預け、そして文月の一日に高
遠へ移送されることを。

「小仏峠は狭くなるところがある。そこを通るとき一列になるから、
一気に切り込めば何とかなるかもしれない」

そう言ってからちらつと龍才の顔をみた。重傷を負っている龍才
は、果たして使いものになるのか。あれから毎日、鍛錬をしている
とはいえ多勢に向かうのだ。

「あかりだって自由になりや、あいつだって戦えるしな」
暑さのため、勘介は首元をハタハタとさせた。

「あかりはどういった状態か分からぬので戦力にいれぬほうがよい。
弱っているか、眠らされているか……」

「もう少し先まで着いていつて、見張りの手薄になる機会を狙って
もいいですが、長い距離を着けていくと相手にも怪しまれるし、こ
っちの体力も落ちてきます」

「敵は何人くらいだろう」

「恐らく二、三十人くらいではないでしょうか。女の警護ですし、あまり金もかけられないでしょう」

サエが冷静に判断する。

「だが、幕府からの用命となるとあまり人を少なくも出来ぬが……いや、あんまり目立ってもいけないか」

「そこが微妙なトコなんです。なので、多くても三十人と」

「ならば何とかなるの。火器やら飛び道具も使えば。……やっかいなのは」

風魔だ。

龍才は二人に順番に視線を合わせた。どこまで風魔が未だに自分たちを狙っているか、だ。表の世界にいるあかりを窮地に落としたのは誰であれ、今回、あかりを取り返しにくることくらいは想定していよう。

高遠藩の見張りに紛れていることは十分考えられた。

それでも、やらねばならない。三人は出来うる限りの予測をして作戦をたてた。が、それは全く思いもよらない因子、つまり小夜によつて滅茶苦茶になってしまつのである。

意思が運命を変える

なにかヘンだ。

あかりがそう気付いたのは、水無月の二十日すぎ。つまり、信州高遠に移送される、と知った夕方のことだった。

夕食に出されたものを食べてから、気持ちが悪く軽い腹痛もする。これは毒なのか？

はつきりとは、まだ分からないが、その日から食べるものには細心の注意を払うことにした。できるなら食べないでもよいが、この暑さだ。全く断食をしてしまうのも危険だ。

高遠に移されると聞いて、最初に感じたのは『一応、助かった』という安堵感だった。配所へと移送、ということは、そういうことである。幕府の咎人^{とがにん}を高遠藩が勝手に処分するわけにはいかないからだ。どうなつて遠島という沙汰が下つたのかは分からないがホツしたのは事実である。

だが、今日の食事に毒が入っていた、となれば安心など遠い話である。なにか……分らない陰謀が始まったと考えるとよかった。

汁もの……は、手をつけないでおこう。一番毒物を入れやすい。だが、飲んでいない、と分かれば他のものに入れるだろう。なら、汁ものはどこかへ捨て飲んだとみせかけねばならない。さて、どうやろうの。小さな戦争のはじまりだった。

「はあ……」

あかりは思わずため息をついた。もう何度もついてきたが、今回はまた別のため息だった。

毒物の勉強をしてきた自分が毒殺されようとしているなど皮肉以外の何ものでもなかった。そのうえ、この後に及んでもまだ生き残ろうとしている自分がいたからだ。

「最後の最後まであきらめてはならぬ
そう言ったのは親方だった。

それは時間内に鍵を開ける練習をしていたとき。どうしても開けられなくてあきらめようとした時に言われたのだった。

「鍵はよい。別にあきらめればすむことだ。しかし、鍵のかかった土蔵の中に大切な方がいて爆薬がしかけてあつたらそなた何とする。じりじりと導火線の火が減っている。鍵を開けねばその人は爆発とともに吹っ飛んでしまうのだ。時間はもちろんない。そんな状況であつたらそなた何とする」

「壁をぶち抜きます」

「ほお、それもひとつの方法だ。じゃが、壁は頑丈でちよつとやそつとでは抜けぬとならどうする」

「屋根にあがつて穴をあけます」

「それでは、そなたが入れても大切な人を外へ出すことは間に合わぬ」

あかりはじつと目をして考えた。

「もういちど……よく考えます。穴の形状と使っている鍵あけの道具が適当であるか」

「して？」

「合っていたなら、何も考えずにもういちど鍵を開けてみます」

「では、そうせよ」

あかりは手元にあつた鍵の鍵穴をさぐったあと道具を変更した。

新しい道具で探してみるとピキンと鍵は外れた。

「そうじゃ。よく出来たな。あかり」

炎才は嬉しそうにあかりの頭をなでてくれた。

「しのびはな、お役目のためには簡単に命を捨てよ、と教えられているかもしれぬが、それは嘘じゃ。本当に大事なことは最後まで生きることであきらめぬことにある。それが本当のお役目遂行だから。死んではお役目は遂行できぬ」

「お役目を遂行するのに、どうしても死ぬ必要がある場合はないのですか」

「ないの」

炎才はきつぱりと言った。

「どうしても生きられぬ、という場合はあるかもしれぬ。しかし、それは今回のように最後の最後まであきらめねば、ほとんどない、と言ってよい。どこかに？もう、いいか？という気持ちがある場合のみ、死ぬのだ。本当に大事なのは意思なのだよ、あかり」

よく分からなくてあかりはぼかん、と口を開けた。あの時はまだ十二歳くらいだった。

「意思が運命を変えるのだ。それをしっかり覚えておくのだぞ」
「はい」

あの時は、よく分からないまま返事をしたけど、今になってその

言葉の重みを感じる。

親方はわたしに生きる意思の大切さ、運命を切り開く手がかりをくれたのだ。そして、あの温かい手でわたしのことをちゃんと愛してくれた。

母上はわたしには父者は死んだと言ったけど、今にして思えばずっと親方のことを想っていたのが分かる。時折、たずねてきてくれた親方と過している時間は、本当に嬉しそうだった。小さな頃は、わたしは親方の膝に座っていた。

外ではだめだぞ、って言うっておきながらわたしを放さなかった親方。それを見ていた母上の幸せそうな顔。わたしは両親からちゃんと愛されていたんだ。それが今になってよく分かる。

——だから——

わたしは死ぬわけにはいかない。父や母のためにも。親方の教えを守るためにも。そして月島さまとの約束を果たすためにも。

どうにかして逃げ出す手はずを考えねば。ここで逃げるか、高遠に行く道にするか、それとも高遠で手薄になった時を狙うか。

もう、あかりはふつきれていた。

横井家の断絶のことも、家賢^{いえよし}のことも、どうでもよかった。いまましい父権社会の制度にしばらくのこの世界から、心は自由になるうとしていたからだ。

わたしが運命に見捨てられていない、とすれば、何か合図があるハズだ。『いまだ！』という合図が。逃げるべき兆候というものの。

それを見逃さないようにしなくては。

賽は投げられた

迎え出た小夜が旅の身づくろいをしているのを見て、旭は不思議に思った。

「その格好は？」

「今から、泥棒をして逃亡するのじゃ。そなたも早う支度せえ」

「ど、泥棒？」

「大きな声を出すでない！」

家の戸口に突っ立っていた旭を家の中に引き入れた。戸をぎゅつと閉める。

「そなたは、お庭番のくせに声が大きい！」

「や、ですが月島さま、何を盗むんですか」

「そなたは黙って、わたくしの後に着いてくればよいのだ」

内容を聞いてしまえば家賢いえよしに報告する義務が発生してしまう。小夜はいちいち答えるようなことはしなかった。

「今から？　ですか？」

真昼間である。それも真夏。ぎんぎらと刺す太陽の光線はどこにも影を作らないほどだった。

「そうじゃ。そなたは、その台車を引いてわたくしの後をついてまいれ」

仕方なく、汗をぬぐいながら旭は、小夜の後についていくことにした。

江戸時代、真夏になると、ほとんどの町人たちは働くことはしなかった。商人たちは、朝と夕方だけ商売をしたり、町人たちは銭湯で一日中ゴロゴロだべって過していた。したがって、町の通りにいるのは、小さな子どもくらいである。

そんな中、笠をかぶった女とガラガラと台車をひく大柄な男が、通つても誰も気にかける者はいなかった。

「ここは……江川さまのお屋敷？」
表札を見上げると反射光が目にはいつてくるので、旭は目を細めた。

本所にある江川太郎左衛門の屋敷は、広く、有志たちのサロンのようなものも兼ねていたが、今はひっそりとして人影もなかった。

「あれ、月光さま」
屋敷の庭から気付いたのは、初老の下働き風の男だった。

「しばらくお姿を見ませんでしたでしたが、どうされましたか」
たしか嘉助かすけという下男だ。この様子では、小夜がいなくなった事など、詳しいことなどは何も知らないようだ。

「今日は、お預けしていたものを取りにきたのです」
「はあ…… お代官さまは、今お留守で」
それは想定済み。江川は月末に定期的に留守にする。

「大丈夫です。わたくし、もう伝えてありますから。勝手にもつてまいりますわ」
「左様でございますか」

「申し訳ないんですが嘉助さん、運ぶのにちよつと人手が足りませんので、下男を何人が集めてもらえませんか」

「そんなに大きなもので」

「ええ」

小夜はにっこりと笑った。

がらがら、がらがら……

真夏の道を、数人の男たちが大きな荷物を運んでいく。藁で周りを包まれた物体を台車にのせて押していく。しかし、それでも気にかける人はいなかった。

番所の前でさえ何も言われなかった。あまりの暑さに、奥にひっこんだ役人たちはダレ、半分寝ぼけたような風体であったからだ。

小夜は、運ぶ下男たちに最初に給金をはずむ、と告げ、士気を上げていたし、時折、酒も買ってやると言ったので、やる気は落ちなかった。

「どこまで行くんですか」

日陰で休憩と水を取っていた旭だが、汗が流れ落ちるのが止まらない。それほど暑かったのである。ひょわい大奥女中の小夜は、もつと疲れているはずだ。

「今日は新宿まで何とか行けたらいいが……」

「新宿！」

まだ、本所を出て両国にまでしか来ていないのだ。あと十キロメートル以上はあった。この炎天下で、小夜の体力では絶対に無理である。

「無茶です、男の私でもこの炎天下はキツイ」

「確かに……」

「舟を使いませんか」

「川を遡^{さかのぼ}るのは、時間がかかる……」

小夜は顔をしかめた。

「でも、江戸市中の水路はそんなに流れがありません。えーと……浅草御門から飯田橋までいけば、あとは川の流れに沿っていけます。あちらのほうがラクです」

旭に言われたことを確認するために、小夜は荷物の中から地図を出した。

「確かに。そなたに言われるまで、私は下から上がる経路しか考えていなかった」

「月島さま、おひとりで計画を立てられるのはいいのですが……私にも少しは相談ください」

でないと、体力を考慮しないではないか、と続けたかった、が止めた。小夜は家賢^{いえよし}に報告されて止められることを何よりも嫌がっているからだ。

「もう、上様に報告はできません。月島さまに着き従って旅に出してしまうのですから。ですから、これからの計画を話してください」

そう。それが何よりも大事なことだった。江川太郎左衛門の屋敷から盗み出したものを使っていったい何をしようというのか。

数秒考えていた風だったが小夜はやがて納得した。

「そうじゃな。旭の言うとおりだ」

そして計画を話し始めた。

登場

文月一日。

元・將軍家側室・靜、信州高遠へ搬送。

千代田にある上屋敷から出てきたのは、小さな籠かことそれに伴う十
四人の男たちであつた。暑さを避けるためか夜明けと同時に出発す
るらしい。

それを密かに追うのは、龍才以下三名。

一向は肅々と歩き、昼には内藤新宿には到着していた。ここには
高遠藩の下屋敷があるので長めの休憩を取るらしい。サエはその情
報を持って近くの飯屋に戻ってきた。

「お天道さんが高いうちは休んどいて、夕方になってから少し歩
きたいです。うーん、今日は高井戸で泊まりかねえ」

「あかりの姿は見えなかったか」

龍才はそばをすくっていた箸を止めた。

「見えませんでした。なんせ下屋敷に入っちゃったもんで」

「今度はおれが、ちらつと下屋敷の辺りを見てきますわ」

勘介はお茶をぐびり、と飲みほすと飯屋を出ていった。

「思ったより警護が少なくて安心しました」

「はあ」

龍才は大きなため息をついた。

「何だか拍子抜けというか、風魔もいるのかいないのか……隙のな

い護衛は一人いるかいなという感じだ。女人の護送とはこんなものののだろうか」

「分かりません。ま、今の状況は我々にとっては好機です」

「そう……だな」

不承ながらも龍才は返事をした。高遠藩一行は、サエの予想どおり、その日は高井戸宿まで行き、そこで一泊することになった。

一方、その頃のあかりは、
困っていた。

本当に体調が悪かった。
確かに毒だ。

試しに食事をしなかった次の日は体調がよかったのである。そのまま絶食をしたかったが、そうなれば水に毒を入れられるであろう。それは避けたかった。数日くらい食べなくても大丈夫であるが、水を飲まなければ一日とてあやうい暑さなのだ。

しかし、そう考えるとなぜ水に毒を入れないのか、のほう不思議でもあったのだが。あまりにあからさまな方法をとるのは避けた理由があるのだろうか。仕方がないので、何とか少しでも食べれば、見ていないところで捨てる、という攻防が続いていた。

しかし。

もう時間はあまりない。

このまま毒を飲み続けたり絶飲食をしたら自分の体のほうが参ってしまう。

逃げる体力を考えると、もってあと二日。

合図はまだ……こない。

文月二日。

次の日も夜明けと同時に一行は高井戸宿を出発した。同じようなペースで進んでいく。

布田五ヶ宿、府中ときて日野との境である、玉川（現在の多摩川）に差し掛かったとき事件は起こった。

ドドン！

高遠藩一行のすぐそばが爆発したのである。

「なっ」

采配役である郡代・鈴木隆興は固まったままだった。他の者も同様である。

間髪あけずに、今度は反対側が爆発した。

ドオオン！

土が数メートルも跳ね上がった。

「うわーカミナリさまのタタリだー！」

籠を担いでいた人足たちは、籠を放りだして逃げ出した。そのま
ま、あかりは地面に落とされ籠の外へ飛び出た。

「おちつけ、おちつくんだ！」

鈴木は自分に言いかけせるように大声で叫んだ。周りの一同は才
口オ口と周りを見わたすだけだった。

やがて、もうもうとした土けむりの向こうに、黒ずくめの人姿が

浮かび上がった。

大きい影と小さな影。

そして、なにやら、大筒と思しきもの。

襲撃

——きた——

その時あかりは実感した。

そう。

ずっと待っていた時が来た。

「そちら高遠藩お預け・お静の方とみた。その籠、こちらに貰い受ける」

小さなほうの影が、よく通る声で発した。

その声、その姿。

小夜だ。

あかりは目を見開きながら背中から胸に向かって何かが貫くのを感じた。その気のようなものは、一瞬にしてそのまま小夜の胸へとつながった。

カシヨーン

実際には音などしなかったが、ふたりは感じていた。

そのまま胸の奥から熱いものがどんどん広がっていく。

『ああ、広がる』

一方、鈴木隆興は相手が人間の女であったことを知り、俄然^{がぜん}、我に返った。

「おまえら、何者だっ」

「こちら、そこにいるお静の方に私怨を持つ者なり。我が手にて恨みを晴らしたく候えども、そちらが断るとあらば、このまま、大筒にてそこもとらごと吹っ飛ばす所存である。さあ、返答やいかに」

うつと詰まった鈴木は、周りの者の顔を見渡した。誰もがどうしてよいか分からないようであつたが、中には、ほとんど逃げ出さんとしている者もいた。

「わたくしが行きましょう」

その時、あかりが口を開いた。

「し、しかし……」

「このままでは、そなたたちも巻きこんでしまふ。どうせ、わたくしはどこかで処分される身。ここで賊に渡しても惜しくはありますまい」

そう聞いても鈴木はぎりぎりとしていた。まだ体面を気にしていた。

「時間かせぎは許さんぞ。かせいだとて、これはライフル砲といつてすぐに実弾が発射できる最新鋭の大筒なのじゃ。それ！」

小夜は後ろにいた黒装束の旭に向かって手をあげた。

その合図で旭は、大筒を少し前にやると火を点火し、そのまま発射した。

ばああん！！！！

今度はすぐ後ろに落ちた。

「うわっー」

土と砂のつぶてがモロに体に飛びかかってきた。その破壊力と地

響きに侍たちは真つ青になった。

「わ、わかった。わかったから、止めてくれ」

鈴木は手をあげて止めた。もはやパニックだった。急いで、あかりの足の縄を解かせた。

あかりは、そのまま黒装束一味に向かってそろそろと歩いた。その顔に微笑みが浮かんでいるのを見ることが出来たのは小夜と旭だけだった。用意してあった馬にあかりを乗せると、そのまま小夜も一緒に乗り川上へ消えてしまった。

「さあ、あんたたちはもう少しここにいてもらおうか」

旭は大筒を再度、高遠藩一行に向けた。

追尾

高遠藩一行はパニックだったが、高遠藩一行たち以上にパニックだった男がいた。

ずっと後を着けてきていた龍才である。

『いったい、何が起こったのだ？』

あの声、姿はどう見ても？小夜どの？ではないか。それが大筒をぶつ放し、高遠藩の一行を襲い、あかりと逃げてしまったのだ。いったい何なのだ？ 何が何だかサッパリ分からない。

「龍才さま、後を追いますよ」

勘介の声でハッと我にかえった。

「あの黒装束はいったい何者でしょう？ 風魔ではないですよね」
龍才があまりあわてていないのを見て、サエは訝^{いぶか}しんだ。

「いや、違う違う。あれは小夜どのだ。おれの傷の当てをしてくれた女人だ。よく分かんが、小夜どのとあかりは知り合いのはずだ」

「じゃ、あの私怨を持つ、とか言うのは嘘？ なんですよ。小夜どののはあかりを助けた？ んですよね？」

「う……ん、恐らく」

あいまいにしか答えられない。

『しかし、大砲を持ち出してぶっぱなすかあ？ どうやって調達し

たんだ？ 全く信じられん。下手したらあかりに当るかもしれぬのに手加減や迷いは一切ないとは。あの小夜どの……乱心しておるのか」

けれど、自分の傷の手当ての仕方から尋常ならざる平素、の小夜を知っている龍才は小夜が決して乱心していないことは確信していた。

『まさか本当に私怨を持っている……のではないよな』

近くの宿場から馬を調達してきた三人は、とりあえず上流に向かって走ることにした。玉川をずっと上がっていくと、多摩丘陵と武蔵野台地につながり、どちらに分け入るうとうっそうとした森になる。

『おんな二人を乗せて、そう遠くへはいけないハズ』

龍才は注意深く足跡を探していった。川砂には足跡が残っている。同時に、追っ手を考慮して、あちらこちらへと自分たちの足跡を散らしてまわる。

『どこまで行っただ』

『花火をあげてはどうですかね』

勘介が提案したのは、もはきつ裳羽服津で居場所を知らせる手持ち花火のことだった。

「いや、高遠藩のやつらに見つかってもマズい。もう少し探そう」
龍才は馬を進めた。

実際には高遠藩は旭が十分にひきつけていたので、未だに同じ場

所で汗をかきかき突っ立っていたのだが。

龍才が辿った足跡は、やがてひとつの山道へと分け入っていた。
「ここだ」

青々とした木々がうつそうと茂れる。木立に入ると真夏の陽射しがスツとさえぎられ、体感温度が急に低く感じられた。

「あかりのやつ、どこへ行ったんだろう」
サエがきよるきよると辺りを伺った。

「ここからは獣道だ。足跡も残らぬ。よく考えぬとな」
「よし、アス力を飛ばそう」

勘介が口笛を吹くと、どこからともなく大型のハヤブサが現れた。勘介は鳥類を飼いなすのが得意なのだ。飛鳥は勘介が飼っている猛禽鳥だった。

「どこにいたんだ」
「ずっと着いてきてましたよ」
信じられない面持ちで龍才は、腕にアス力を停まらせている勘介を見ていた。

「ここいらに人間がいらないか、ちよつと見てきてくれ」
勘介はアス力に話しかけると腕を上げた。アス力はババツと羽を広げると飛び立っていった。

現れた敵

龍才たちから、そんなに離れていない場所に小夜とあかりはいた。小夜は腕の中のアかりの顔が真っ青であることに気付いた。流している汗も脂汗である。

「どうした？ どこが悪いのじゃ」

「少し……吐き気がするのです」

気持ち悪いのを我慢するように目をぎゅっとつぶった。

木立の中は涼しい風が吹いていたが雑木林だけしか見えず、休めそうな宿や家はどこにも見当たらなかった。目的の村落に行くには、この山を越えなければならない。

小夜はあたりをきよろと見渡して、一本の檜ならの木元にあかりを降ろした。そこは少し平らになったスペースがあった。

「気持ちは悪ければ吐けばよい。少し馬を飛ばしすぎたようだ」
背中をさすってやりながら声をかけた。

「申し訳……ごいません。水を」

体に入った毒を出すには水を大量に飲むしかなかった。二日前から食事はもうほとんど摂っていないのである。吐くものはなかった。

さわさわさわ……

木立を渡る風は気持ちよかったが、この調子では夜も冷え込むことが予想された。夏なので、野宿も視野にいれていた小夜は、自分が甘かったことを悟った。

あかりを見ると臉は蒼い影を作っていて尋常でない様子が伺えた。ハッと息を飲んだ。

そう言えば家賢はあかりが毒殺されるかも、と言っていたではないか。

「毒じゃな？」

その言葉にあかりは苦笑いするような顔で肯いた。

「なんとか食べぬよう努めていたのですが……なかなか難しいものがありました。今日、月島さまが、あのようにとんでもない方法で乗り込んでこられる、と分かっていたら意地でも絶飲食を通しました」

「なかなかであつたろう？」

「はい。面白ろうございました」

あかりはニヤリと笑ったが、印象は薄かった。

しばらくふたりは、櫓の木元にじっとしていた。目をつむったままのあかりと、それをじっと見つめる小夜。

遠くできゅーいきゅーい、と鳥の鳴き声が聴こえた。とんびのよな飛び方をしているが、とんびではない。

あのように飛んでいけたらよいのに。

そう思ったと同時に、その灰色の鳥は直下降して何かを襲った。
「うわっ！」

途端に、人間の男が悲鳴をあげながら灰色の鳥に追われて木立から出てきた。

「し、し！ あっち行け！」

バサバサと鳥を格闘している。

と、同時に、木立から三人の男が仕方なさそうに顔を出した。

小夜とあかりはキツと表情を引き締めた。

現れた敵2

「不細工すぎるぞ長吉」

体格のいい男が、鳥に襲われている男に向かって言い放った。

「素晴らしい活躍でしたなそちらの御仁。さすがに我らも驚きました。よもや、大砲をぶっぱなすなど想像もできませなんだ」

嫌味たらしく男は手を叩いた。

「上様公認のお庭番ですか」

「おまえたち、風魔であろう」

あかりは身を起こしながら小夜の懷にある短剣をちらりと見た。

やはり風魔はどこかで高遠藩一行を見ていたのだ。

「ほお、よくご存知で。ああ、お静の方もしのびでありましたな」
「雲才さまを殺したのは、おまえたちであろう！ 山吹を殺したのも！」

それを聞いて一番驚いたのは小夜だった。

——こいつらが、山吹を——

驚きと怒りがないまぜとなった瞳は大きく開かれ、爛々と光りはじめた。

すちゃっ。

懐剣の鞘を抜いた。

だが、あかりが小夜をかばうように手を広げて前に出た。

「それをわたくしにください。わたくしがお守りいたします」

少し考えていた小夜だったが、すぐにその懐剣をあかりに渡した。

「そんなもので我らに勝てると思いか？ お静の方。こちらは男四人だぞ」

「もちろんじゃ。だが、これならどうじゃ」

小夜は懷から、短筒つまりピストルを出した。ゆっくりと銃身を上にはね上げ、薬きょうを充填した。

男たちは半歩後ずさった。

「大筒を扱うわたくしが、短筒を持つとは思わなんだか」

見たこともない短筒に一瞬焦った風魔たちだったが、小夜のいうとく近くにいた小矢太は火縄がどこにもないことに気付いた。

——あれでは火をつけられぬ——

つつつ。

一瞬にして迫りくる小矢太の姿に、小夜はためらいなく引き金を引いた。

パアアン！

バサバサバサ、と森にいた鳥たちが飛び立った。

信じられない顔をした小矢太は、胸を押さえたまま、どうと倒れた。

「小矢太！」

その瞬間、その銃が火縄式でない、ということが風魔たちにもはっきり分かった。

「気をつける！ 新しい銃だぞ」

体格のいい男はこの三人の組頭なのだろう。他のふたりに言い放った。

じりじりとにらみ合いが続く。

小夜は、あと一発しかない弾を思い、どうしようかと考えていた。輸入もののサリンジャー銃は護身用なので二発しか銃弾を装填できなかったのだ。江川邸にあった他の銃は重いか火縄式だったので自動着火式はこのサリンジャーしかなかった。

裳羽服津vs風魔

均衡を破ったのは、一本の手裏剣だった。
スタ。スタ、スタ。

続けて放たれた手裏剣を、風魔の隼人は瞬時に避けた。間髪あけずに茂みから現れた勘介が隼人にとびかかった。

きいん！

息もつかせぬ素早い攻防。

「あかり！」

勘介に続いて現れた龍才とサエも、眼前の風魔に攻撃を仕掛けた。

フツ、とサエは吹き矢を放つ。それを予測していたかのように長吉は刀でそれを打ち落とした。一方、龍才は組頭に襲いかかった。激しく剣を交えながらふたりは位置を移動する。

「おまえたち一族の身元を知ろうと思ったのだが……いた仕方がない」
組頭の目に大きな殺気がみなぎった。

あ、龍才がやられる。

小夜とあかりはそう思った。

利き手が使えない龍才の右側から、その刃はふり下ろされたのだ。

ガシッ！

龍才はなんと右手の小刀で受け止めていた。

動かなかった右手で、組頭の刀をひき受け止めた後、左に流し二

刀流の状態で戦いを始めた。
ぎりぎりの状況で、龍才は利き腕を取り戻したのだ。火事場の何とやらであつた。

一方、一番形勢が不利なのは勘介だつた。

隼人はめつぽう強かつたのである。隼人は風魔ナンバーワンの腕前だったが、あまりに冷酷すぎたため長の候補から外されるような男だつた。

小夜はじつと隼人に狙いを定めた。勘介がまさにやられようとしたその瞬間、小夜はサリンジャーを再度発砲した。

背中から胸に向かつて弾丸は貫いたはずなのに、隼人は振り向き、血走つた目で小夜を睨みつけた。

あまりの形相に一瞬ゾツとしたが、すぐに小夜はあかりの手にあつた懐剣と一緒に握ると構え睨み返した。山吹の敵に敗れてなるものか。かたき

だがそれは一瞬のことだつた。下から勘介が隼人の喉を裂いたのだ。

「ぐはっ」

大量の血しぶきを吐いて、今度こそ隼人は倒れた。

「ザマミロ、雲才さまと山吹の仇をとつてやったぜ」

雲才の最期の状態を聞いていた勘介は同じように隼人の喉を斯き切つたのだ。そのまま立ち上がりながら倒れている隼人につばをかけた。

そして大きく手をあげると「アスカ」と叫んだ。先ほどの灰色の

鳥が上空から風を切って舞い降りてきて、勘介の腕に停まった。

「アイツを倒せ」

サエと戦っている長吉を指さすと、アスカを停めていた腕を大きく振りかぶった。アスカは一直線に長吉に向かって飛行すると、ハヤブサのするどい爪で頭を攻撃しだした。

「いたっ」

驚いた長吉はアスカの攻撃から身をかわすため、あっちこっちへ逃げだした。それと同時にサエの攻撃を避けるのは至難の業であった。

その様子を見た組頭は自分たちが不利であることを悟った。

「引け、一旦引くのだ」

四人組が二人になってしまった風魔は、ザッと茂みに紛れて逃げていった。

後には、龍才とサエの荒い息づかいだけが森に響き渡った。

きゅーい、きゅーい。

その鳥の声に、勘介の肩に停まっていたアスカは反応した。キョロキョロと首を回すとバツと飛び立った。

「アスカ！」

勘介が叫んだがアスカは戻ってこない。そのまま上空に上がると姿を消してしまった。

全員がその様子を見ていたが、やがてほーほーほー、という声に耳をとられた。

ふくろの三回鳴きは裳羽服津衆の合図。

ぞろぞろと木立の中から現れたのは、炎才をはじめとした裳羽服津衆たちだった。

「やっと見つけたぞ」

きりりとした目には安心感を抱かせる微笑がたたえてあった。その顔を見た龍才をはじめ裳羽服津の四人は急に緊張感が抜けていくように感じた。

「親方……」

体面の犠牲

「アスカにはつがいになっているヤマトというハヤブサがおるのだ」

そう言うとき炎才はピュイッと口笛を吹いた。連れ舞いをしていたヤマトとアスカが下降してくる。

「勘介、苦勞をかけたの。礼をいうぞ」

「いえ……」

降りてきたアスカを腕にのせながら勘介は頭を軽く下げた。炎才あてに勘介は、今までの経緯を文にして出していたのだ。

意味が分からず、つつ立っていた龍才はいきなり炎才に殴られた。そのまま吹っ飛ぶと下草の中をズサササッと転がった。

「おまえは、なんと無謀なことをしとるのか！」

驚きながらも龍才は顔を上げた。口元が切れて血がにじんでいる。

「自分たちだけで勝手な振る舞いをしようなど、思いあがるのも大概にせい。おまえのその勝手な行動で、どれだけの人間が危険にさらされたと思う。雲才、山吹……そしてこのサエや勘介までも死ぬところだったのだぞ。我ら一族全体まで危機に陥れよって。一族の危機は殿様の危機だと分かんんだか！」

あかりが炎才の前に転がり出て手をついた。

「申し訳ございません！ わたくしの落ち度にございます」

目許に涙をためながらも、炎才に必死に訴えた。

「元はといえば、このようなことになったわたくしのせいでもあります。……どうか、どうか、わたくしを殴ってくださいませ。龍才さまは悪くありません……………」

グツと目を閉じて耐えているようだったあかりは最後のセリフを言ったあとグラグラと揺れた。

「静山」

かけよった小夜はあかりを抱きとめた。

「あかりは……どこが悪いのか」

炎才は部外者である小夜に向かってたずねた。

「毒を飲まされておる……將軍家が側室だった女を罪人にしたくない、という、ただそれだけのために、体面のため毒殺しようとしたのだ。將軍家とはそういうところじゃ。」

いや……家や制度とはみなそうだ。訳の分からぬ体面とやらを守るために人を殺す。そなたは、その犠牲になった者を助けようとするのを許せんというのか？」

「おぬしは何者だ」

炎才はじつと小夜を見つめた。

「わたくしはただの女じゃ」

「小夜どのは……おれを助けてくれた命の恩人じゃ」

口元をぬぐいながら龍才が立ち上がった。

「大奥の第一実力者にして上様の寵愛が最も深きお人。御年寄り・月島さまでございます」

あかりは息を吐きながら炎才に告げた。そこにいた全員が一斉に

小夜に視線を注ぐ。あまりにも意外な事実だった。

「そしてわたくしが最もお慕いするお方です」
じつと。

じつとあかりは炎才を見つめた。

周りの者は誰ひとり話せなかった。

「静山、もうよい。それ以上話すでない」

小夜の腕の中であかりは薄く笑うと目を閉じた。

「わたくしと一緒に行こうな。そなたは何も気に病むことはないぞ」
黙って聞いていた炎才は斜め後ろにいた中年の男に声をかけた。

「解毒剤をあかりに飲ませよ」

「はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9328w/>

二人静 - ふたりしずか

2011年12月2日19時45分発行